

山梨県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書
— 北巨摩郡須玉町地内 —

1976.3

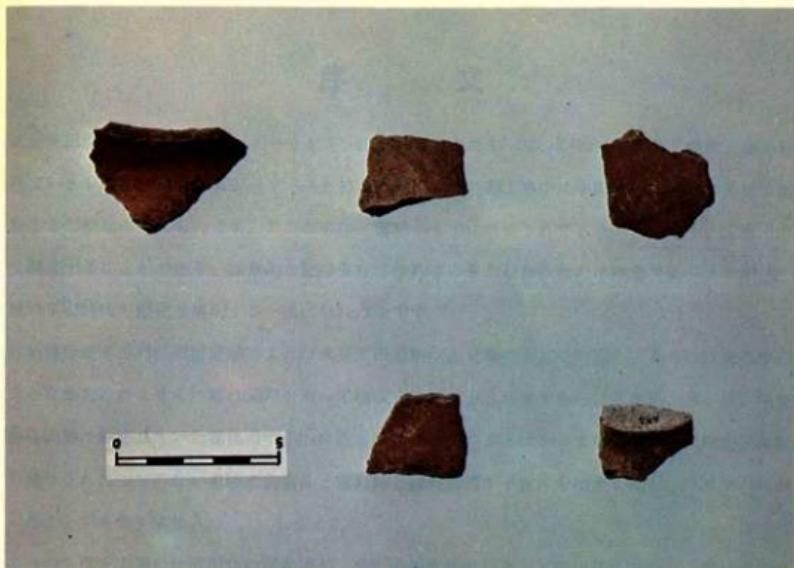
山梨県教育委員会
日本道路公団東京第二建設局



綠釉陶器(内面)



綠釉陶器(外面)



彩 色 土 师 器



陶 磁 器

序 文

大豆生田遺跡は、中央道インターチェンジ建設予定地内にあって、昭和48年度より建設工事が進められていましたが、これと須玉バイパスを結ぶ取付道路の付帯工事中に平安時代の土器が多量に出土したことで発見されたものです。このために、遺跡がすでに破壊されてしまった場所や、工事用道路敷で調査することができず、部分的な記録保存にならざるをえなかつたのは残念であります。この地域の平安時代の歴史を解明する一助になれば幸です。

和名抄甲斐国郡郷位置推定図によれば大豆生田遺跡は逸見郷の所在地近く、あるいは郷の中心地であったかもしれません。郷は50ヶをもって編成していたとされますから、八ヶ岳、茅ヶ岳、甲斐駒ヶ岳各山麓に散在していた集落の中心的存在と思われ、このことはかって中央道の北巨摩地区発掘調査で発見されたことのない当時の貴重品と言われる緑釉陶器が十数片も出土したり、フィゴの口が出土したことでも分ります。

こののち平安末期には武田氏の祖義清が、今の市川大門町にあった市川荘に下向し、甲斐源氏の基となり、その子清光とともに候北逸見地方に勢力を伸ばしたと言われ、須玉町若神子の正覚寺は義清の開基、又、大泉村谷戸城は清光の根拠地とされております。これだけを概観しても甲斐源氏発展にとってこの遺跡が無縁ではなかったと推察されるものです。

この様に歴史的にも貴重な遺跡をわずかではありますが記録にとどめられたことを喜びとしたいと同時に、この報告書を広く研究学習の用に役立てていただきたいと思います。

文末ではありますが、調査に協力いただいた地元大豆生田の皆様外須玉町役場の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和51年3月1日

山梨県教育委員会

教育長 丸 茂 高 男

凡　　例

- 1, 本書は昭和49年度に日本道路公団と山梨県教育委員会との委託契約により実施された、並崎～小瀬沢間須玉町地内大豆生田遺跡発掘調査の報告書で、この報告書作成経費の委託契約は昭和50年度に行なわれた。
- 2, 本書の作成は県教育委員会で行なったが、各遺構については、担当者から提出された住居址カードを要約し、文末に担当者名を記してあるが、他の執筆及び編集は末木が行なった。
- 3, 遺物洗浄、実測、トレース、写真撮影は末木、米田、野口、井川が行なった。
- 4, 遺物及び実測図は県文化課に保管してある。

目 次

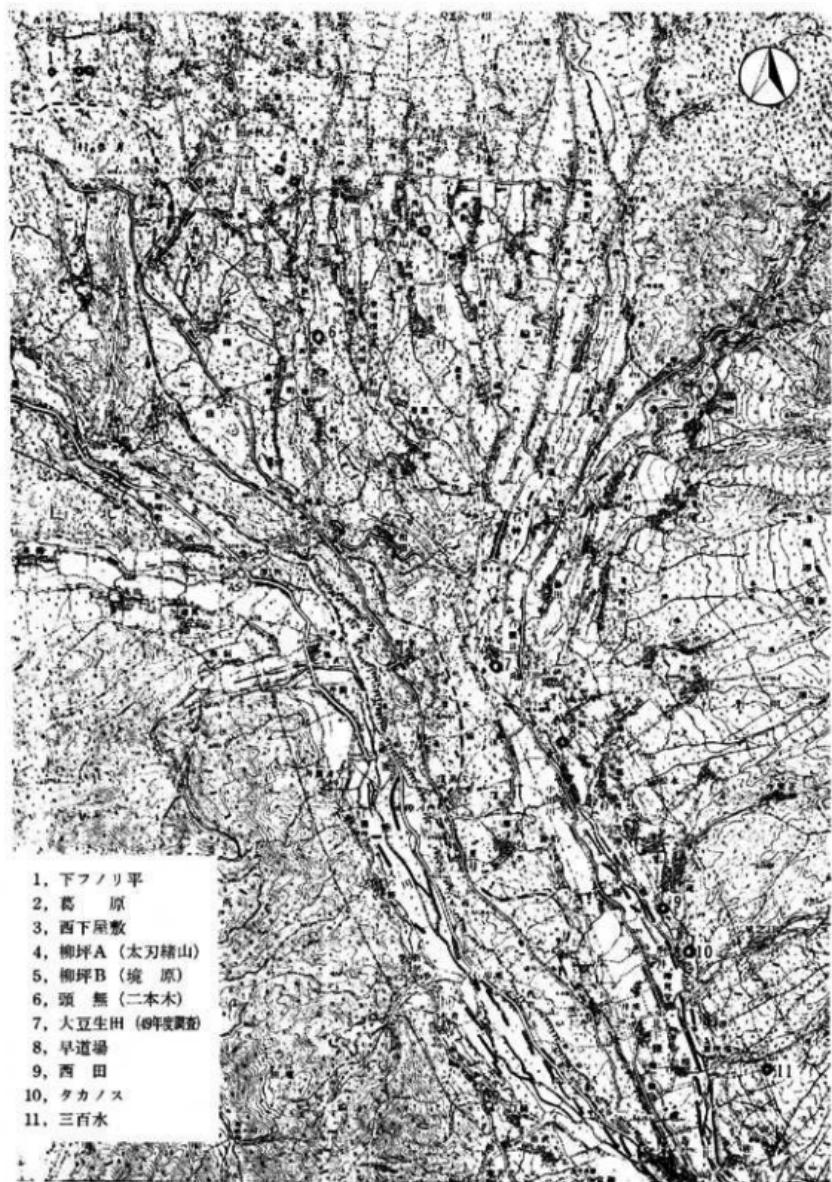
1. はじめに	1
(1) 発掘調査事務経過	1
(2) 調査組織	1
(3) 遺跡の地理と歴史的環境	1
2. 遺跡の概況	3
(1) 遺構	3
A 地区	3
B 地区	8
C 地区	9
(2) 遺物	27
A 地区出土遺物	27
B 地区出土遺物	29
C 地区出土遺物	29
3. 考察	100
中部地方の平安時代土師式土器編年の諸問題	100
おわりに	119

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1	第37図 A地区出土遺物01	41
第2図 遺跡地形図	2	第38図 A地区出土遺物02	42
第3図 A地区全体図	4	第39図 A地区出土遺物03	43
第4図 A地区配石模式図	5	第40図 A地区出土遺物04	44
第5図 A地区土層図	6	第41図 A地区出土遺物05	45
第6図 A地区H2グリッド微細図	6	第42図 A地区出土遺物06	46
第7図 B地区全体図	7	第43図 B地区出土遺物(1)	47
第8図 B地区D1.2.3グリッド微細図	8	第44図 B地区出土遺物(2)	48
第9図 C地区全体図	9	第45図 B地区出土遺物(3)	49
第10図 C地区エレベーション	10	第46図 B地区出土遺物(4)	50
第11図 C地区C～C'土層図	11	第47図 C地区1号住居出土遺物	51
第12図 1号住居平面図	12	第48図 C地区2号住居出土遺物(1)	52
第13図 2号住居平面図	13	第49図 C地区2号住居出土遺物(2)	53
第14図 2号住居カマド土層図	14	第50図 C地区3号住居出土遺物(1)	54
第15図 3号住居平面図	15	第51図 C地区3号住居出土遺物(2)	55
第16図 3号住居カマド土層図	16	第52図 C地区4号住居遺物(1)	56
第17図 4号住居平面図	17	第53図 C地区4号住居遺物(2)	57
第18図 4号住居カマド土層図	18	第54図 C地区5号住居出土遺物	58
第19図 5号住居平面図	19	第55図 C地区6号住居出土遺物	59
第20図 5号住居カマド土層図	20	第56図 C地区7号住居出土遺物(1)	60
第21図 6号住居平面図	21	第57図 C地区7.8号住居出土遺物	61
第22図 7号住居平面図	22	第58図 C地区9号住居出土遺物	62
第23図 7号住居カマド土層図	23	第59図 C地区グリッド出土遺物	63
第24図 8号住居平面図	24	第60図 縄文時代遺物(1)	64
第25図 9号住居平面図	25	第61図 縄文時代遺物(2)	65
第26図 9号住居カマド土層図	26	第62図 弥生時代遺物(1)	66
第27図 A地区出土遺物(1)	31	第63図 弥生時代遺物(2)	67
第28図 A地区出土遺物(2)	32	第64図 弥生時代遺物(3)	68
第29図 A地区出土遺物(3)	33	第65図 平安時代遺物(1)	69
第30図 A地区出土遺物(4)	34	第66図 平安時代遺物(2)	70
第31図 A地区出土遺物(5)	35	第67図 中道I期	102
第32図 A地区出土遺物(6)	36	第68図 中道II期	103
第33図 A地区出土遺物(7)	37	第69図 中道III期	104
第34図 A地区出土遺物(8)	38	第70図 中道IV期	105
第35図 A地区出土遺物(9)	39	第71図 北巨摩地方土師器晚期編年案	113
第36図 A地区出土遺物00	40		

図版目次

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 図版 1 A地区全景(北西より) | (2)発掘参加者 |
| A地区列石(南より) | 図版10 出土遺物(1) |
| 図版 2 A地区列石全景 | 図版11 出土遺物 出土遺物(2) |
| 図版 3 (1)A地区H2グリッド遺物出土状態 | 図版12 出土遺物(3) 11 |
| (2) " H3グリッド出土磨石斧 | 図版13 出土遺物(4) |
| 図版 4 (1)B地区B4グリッド遺物出土状態 | 図版14 (1)縄文時代土器 |
| (2)同上部分 | (2) " 石器 |
| 図版 5 C地区全景 | 図版15 (1)緑釉陶器(陰刻文) |
| 図版 6 (1)C地区3号住居全景 | (2)石 鎌 |
| (2) " 3号住居址遺物出土状態 | (3)古 錢 |
| 図版 7 (1)C地区3、4号住居址 | 図版16 (1)(2)緑釉陶器 |
| " 6.7.8号住居址 | 図版17 (1)(2)彩色土師器 |
| 図版 8 (1)C地区4号住居址カマド | 図版18 (1)(2)輪(フイゴ) |
| (2) " 7号住居址カマド | 図版19 鉄 製 品 |
| 図版 9 (1)C地区発掘調査風景 | 図版20 (2)C地区3号住居址出土鉄鎌 |



第1図 遺跡位置図

1. はじめに

(1)発掘調査事務経過

- 49・3・11 県文化課に於て大豆生田遺跡発掘調査費打合せを道路公団と行なう。
49・5・7 公団あて、発掘時期及び経費の計画書を送付する。
49・5・8 発掘届を文化庁あて提出する。
49・5・21 公団より契約書が送付される。
49・6・3 文化庁より発掘届の回答が送付される。
49・6・21 県より契約書を返送する。
49・6・25 大豆生田発掘開始。
49・7・31 大豆生田発掘終了
49・8・1 茂崎警察署あて埋蔵物発見届を提出する。
50・3・5 公団に精算報告を行なう。
50・3・31 上記回答を公団より受ける

(2)調査組織

- 調査団長 井出佐重（山梨県遺跡調査団）
○調査担当者 末木 健（県文化課文化財主事）
○調査補助員 小林洋、野口行雄、米田明訓、井川達雄（明治大学）、辻陸史（日本大学）
○作業員 清水きくし、篠原みどり、矢崎敬子、花田豊子、博林義知、清水立子、三井栄子、
清水よし、清水のり子、篠原はる子、清水民男、佐藤さく代、清水嵐、博林日露子
三井安利、清水かおる、深沢保文、田中はる子、保坂かのえ、伏見さかえ、沢田やす子、赤岡ひさを、清水孝次、清水吉一、三井とも子、守屋まさ子、桜井義興、内藤美雄、小林たき子、佐藤よし美、篠原義勇

(3)遺跡の地理と歴史的環境

大豆生田遺跡は八ヶ岳の東麓を流れる須玉川が、茅ヶ岳の西麓を流れる塩川に合流して狭まれた地点で、両側はそれぞれの裾野が急崖となって南北に長い谷となっている。谷幅は500mから1000mあって、遺跡に立つと南には富士、東には茅ヶ岳の雄姿を眺めることができるが、八ヶ岳は最近に迫る急崖でさえぎられて望めない。このことは冬の季節風の強い時期など、崖が風防の役を果してくれるものであろう。

須玉川は遺跡のすぐ西側にあって、現在遺跡のある自然堤防地形をえぐっている。遺跡から七里ヶ岩の崖までが須玉川の河川敷で、塩川までは相当距離があるが、工事中掘削箇所を見たところ砂礫ばかりで耕土はわずか30~50cmの厚さもない。遺跡の立地している所だけは表土が50cm~1m、ローム層が1~2mあって、古来より比較的安定した土地であったことが窺える。これは須玉川、あるいは塩川の合流点に自然堤防が造られ、これを住居地として周囲の低湿地を耕作したり、簡単な漁獵を営むのに適していたのである。

歴史的にこのあたりが文献等であらわれるのは平安時代の柏前、真衣野、總坂の三官牧に間接している。「延喜式」「和名抄」に記されている甲斐国の郡は、山梨、八代、巨摩、都留の4郡で、須玉町あたりは巨摩郡逸見郷に位置し、三官牧をほぼ掌握できる地理にあり、毎年一定数の馬を宮廷に進める

駒牽の行事が行なわれた。大豆生田遺跡が牧と直接結びつくかどうかは現在のところ不明ではあるが、駒牽行事がすたれた12世紀にはこの官牧地帯を根拠として甲斐源氏が勃興してくることを考えると、軍事的にも政治的にも重要な地域であったことがうかがえる。



第2図 遺跡地形図

2、遺跡の概況

(1) 遺構

A地区（第3図）

遺跡の中心よりやや南東の地点で、最初に調査を開始した地点である。調査面積は約600m²で、2mのグリッドを設定して調査を開始した。

第5図の地層図はF15～17グリッドの西壁面を実測したものであるが、最下まで約80cmを掘り下げているがロームは発見されていない。C地区で浅い所で約60cmでロームが見られるが、A地区とC地区の間の通路ボックス掘削面から判断すると、この地点より急激に落ち込み、ローム層は検出できない様である。B地区から東にかけては工事中の土層を観察するに地表から約5～10m近く疊層が厚く堆積しており、旧須玉川、あるいは塩川が流れていたものと思われる所以、河川がA地区までも洗っていたのであろうが、平安時代には低湿地として水田あるいは、やや乾燥した地区として居住されていた可能性も充分に考えられる。

A地区は以前水田が営まれていた為、表土より約20cmは耕作を受けており、水田の床土であろう黄褐色上層が見える。配石及び列石群はこの水田床土面より下にあって黒色土中に存在しており、A地区全体から発見された石は第3図のとおりである。これら配石及び列石の性格については考察し得る積極的な事象を得てはいないが、平安期に属する布目瓦（平瓦）片が1片、綠釉陶器片等が出土していることから当時の重要な建築地の可能性もあるだろう。この地区的性格についての考察は後にゆするとして、列石の配置状態を見ていきたい。

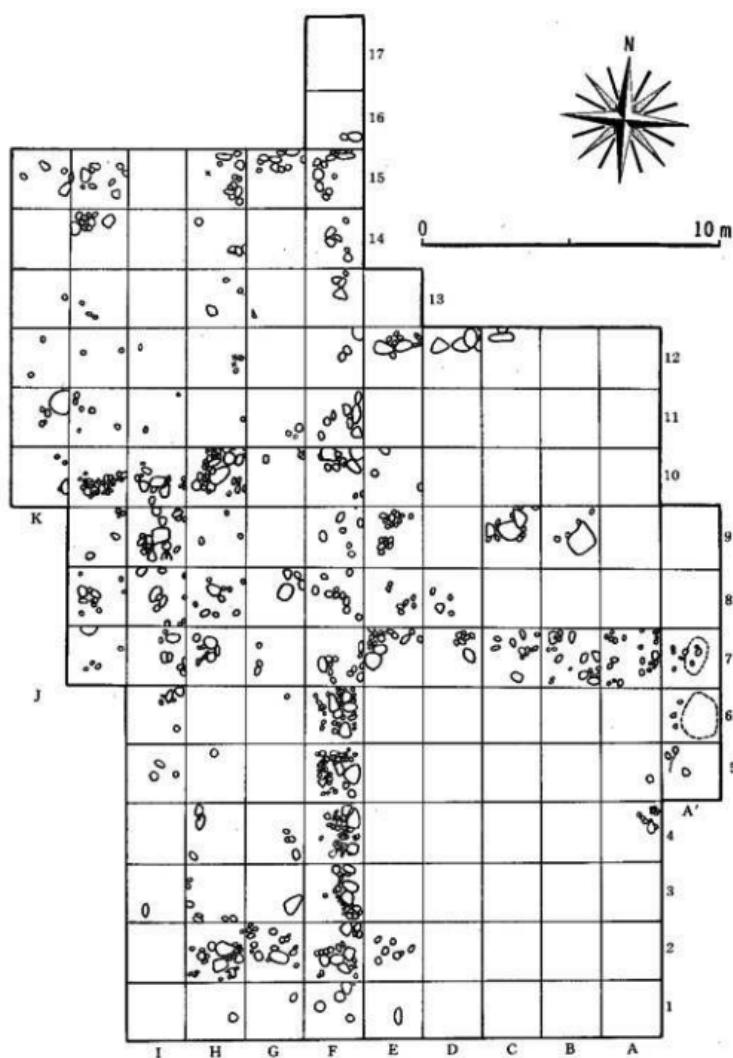
F列に1号、3号列石が南北方向にあって3号列石の配列は50～80cmの比較的大きな安山岩を並べてあり、4号列石と直交する様である。1号列石はA地区で最も長い列石であるが、50～80cmの大きなものと20～30cmの人頭大の疊とが混存し、帶状に連なる。1号列石は長さ12m巾1.5mで、南部部分で2号列石と直交する。2号列石は2列グリッドに入っており、長さ6mで、その性格は1号列石と類似するため、1号列石と2号列石はL字形に連続するものであるかもしれない。3号列石に直交する4号列石は12列グリッド北側より発見されたもので、80～100cm位の大きな石を主体に配され、小疊を含まない。配石状態から見てやはり3号列石と4号列石はL字形になり、1号2号列石と逆方向に屈折する。5号列石は15列グリッド北側に並ぶもので、約5mの長さをもつが、大きな石を配列した3、4号列石の配石状態に等しい。

これら列石群の間からは平安期に位置する土師式土器や須恵器、灰釉、綠釉等が出土しており、列石の年代が平安時代前後にかかるものであることが確認された。

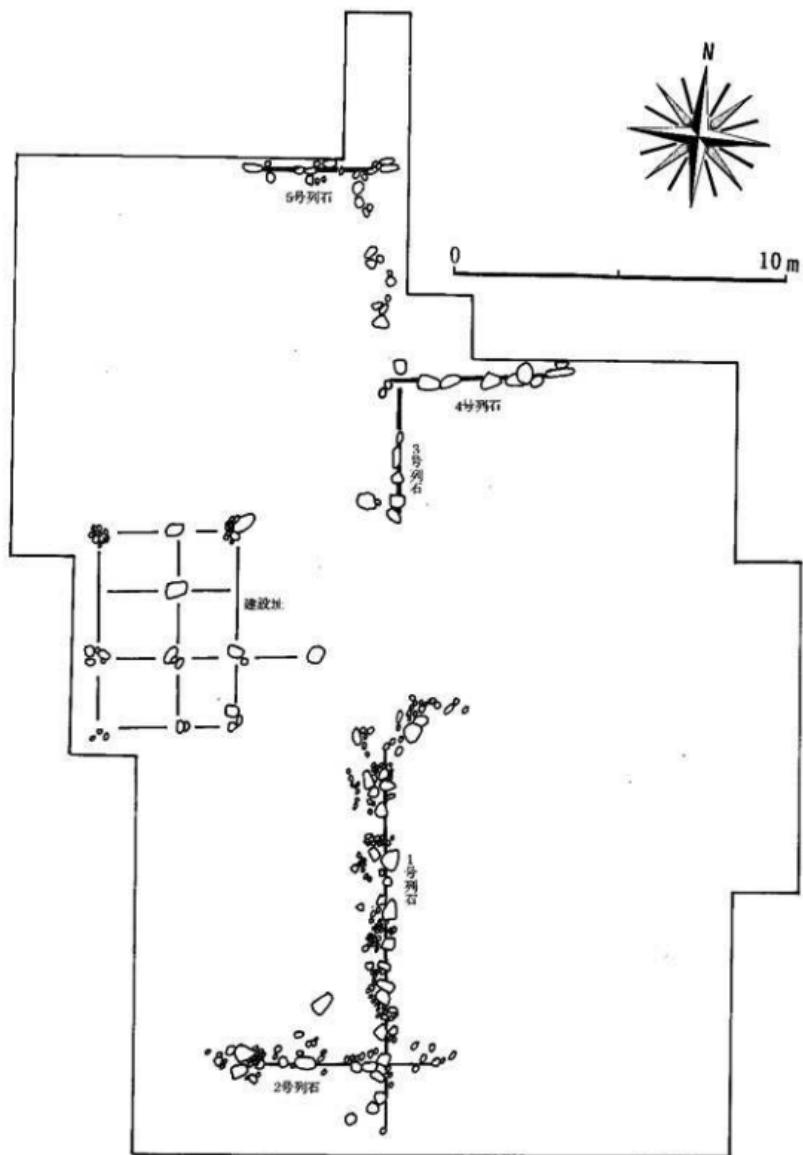
この列石の他に建物址と思われる配石がある。配石上のレベルはそれぞれ異なっている為に建物址か不明であるし、周囲の疊も多いので否定的材料の方が優っているが、綠釉片の十片以上の出土や、中世陶器などもあり、建物址の可能性も考えられることから、あえて提示した。ちなみに疊石間の距離は約2mである。又、2号列石と5号列石のほぼ中央に位置し、巨視的に見るならば5、3、2、1号列石が建物址をコの字形に囲んでいる様に観察される。

又、A列東側のA'列ではA'5～7のグリッドに於て土器集中区があり、そのほとんどが焼土と混入しながらも土器の層が5～10cmの厚さにある。土器廃棄場の跡とも思われ、焼棄されている土器はほと

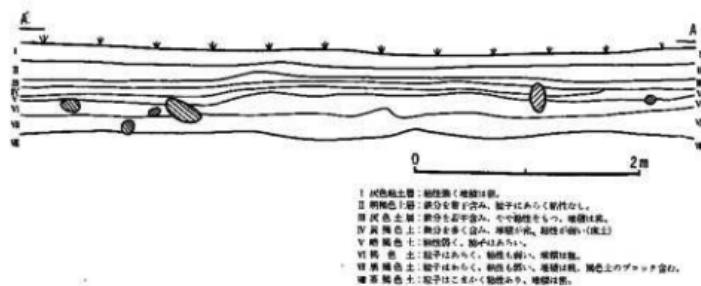
などが細片となっているが中には一括になるものも含まれていた。この中には土師器のみでなく須恵器、灰釉、綠釉片も含まれていた。



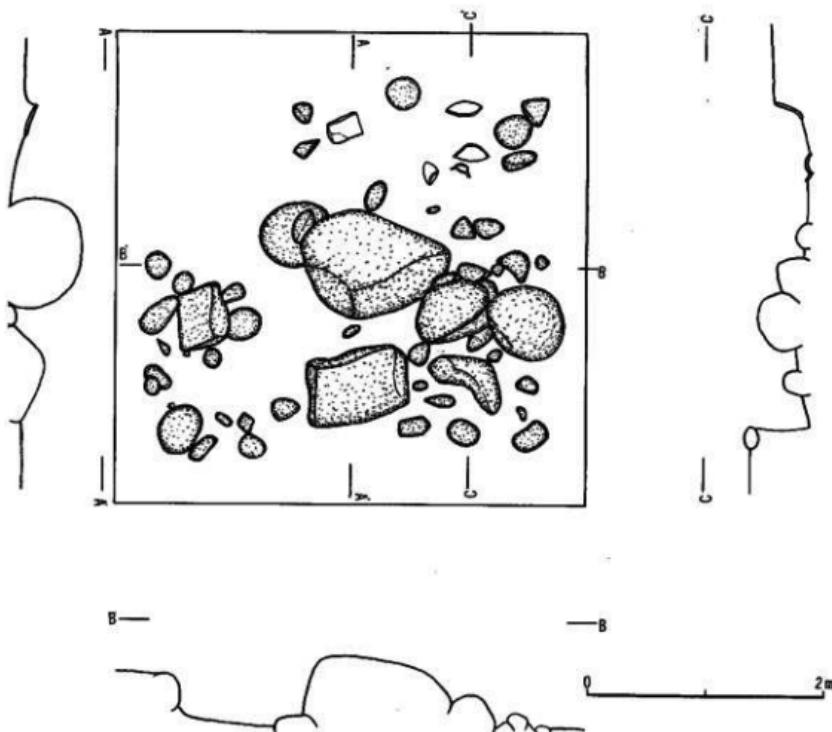
第3図 大豆生田A地区全体図



第4図 A 地区配石



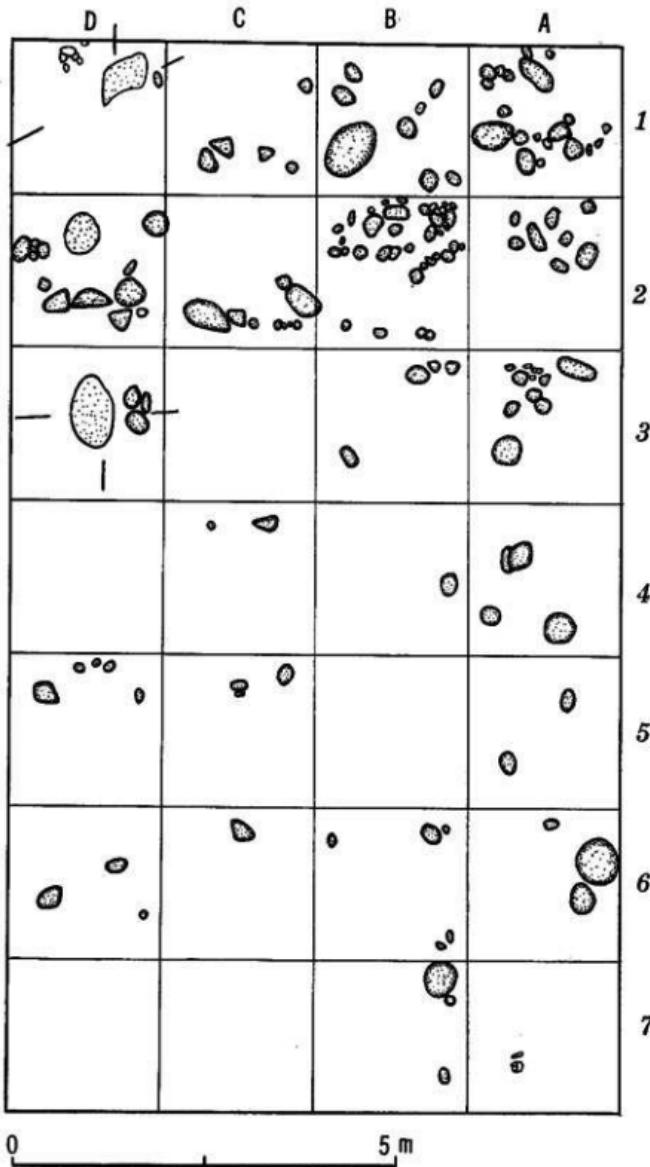
第5図 A地区 (F15~17Gnidセクション)



第6図 大豆生A地区H2 Grid



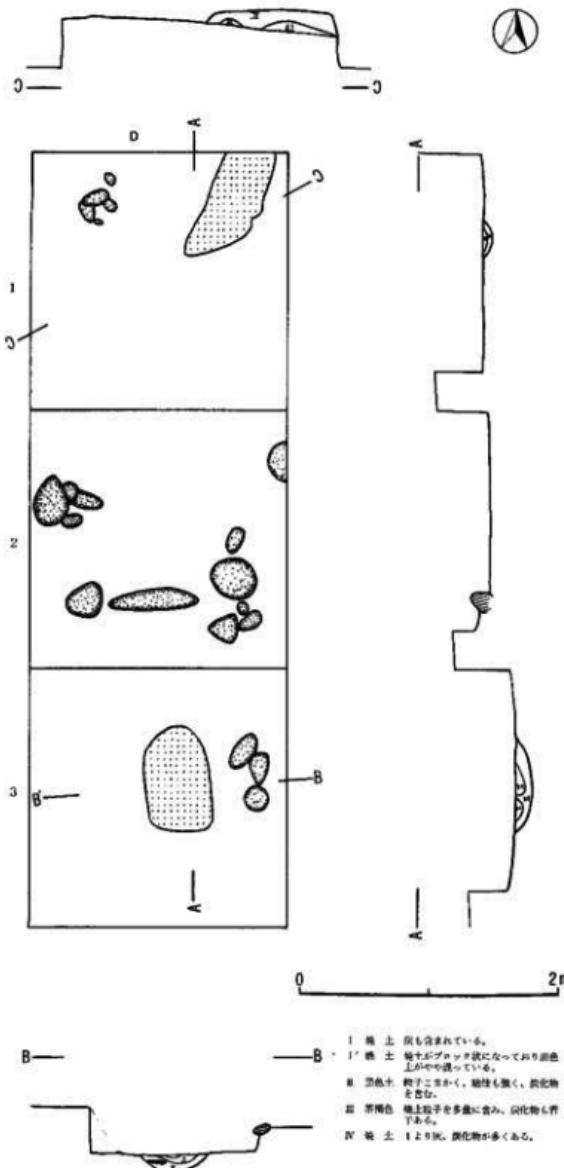
第7図 大豆生田B地区全体図



B地区（第7図）

A地区的東側約10mの所に8m×14mの2mグリッドを設定した。A地区とB地区の間にはこの遺跡発見のきっかけとなった水路が掘削された地点で、多量の土器と焼土が一ヶ所発見されている。A地区的調査がほとんど終了した時点で、B地区を設定して調査を開始したが、A地区より遺物包含層は深く、表土からは約1mで水の湧く黒褐色砂質土層に達する。B地区的全体的な状況はA地区とほぼ同様で、北側には、礫が多く南にいくにしたがって石は少なくななる。D1、D2、D3グリッドそれぞれから焼土が発見されたが、その詳細は第8図に示してある。

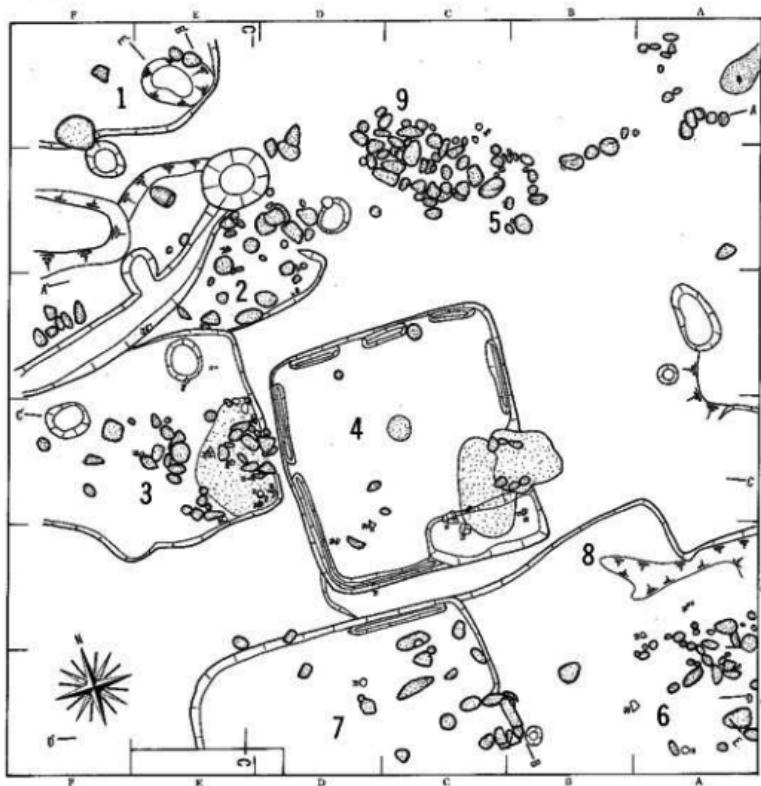
遺物は比較的少量で、流されたような状態で出土しているところからB地区は北側の地域しか當時使用されなかつたと考えられる。



第8図 B地区 D 1, 2, 3 グリッド

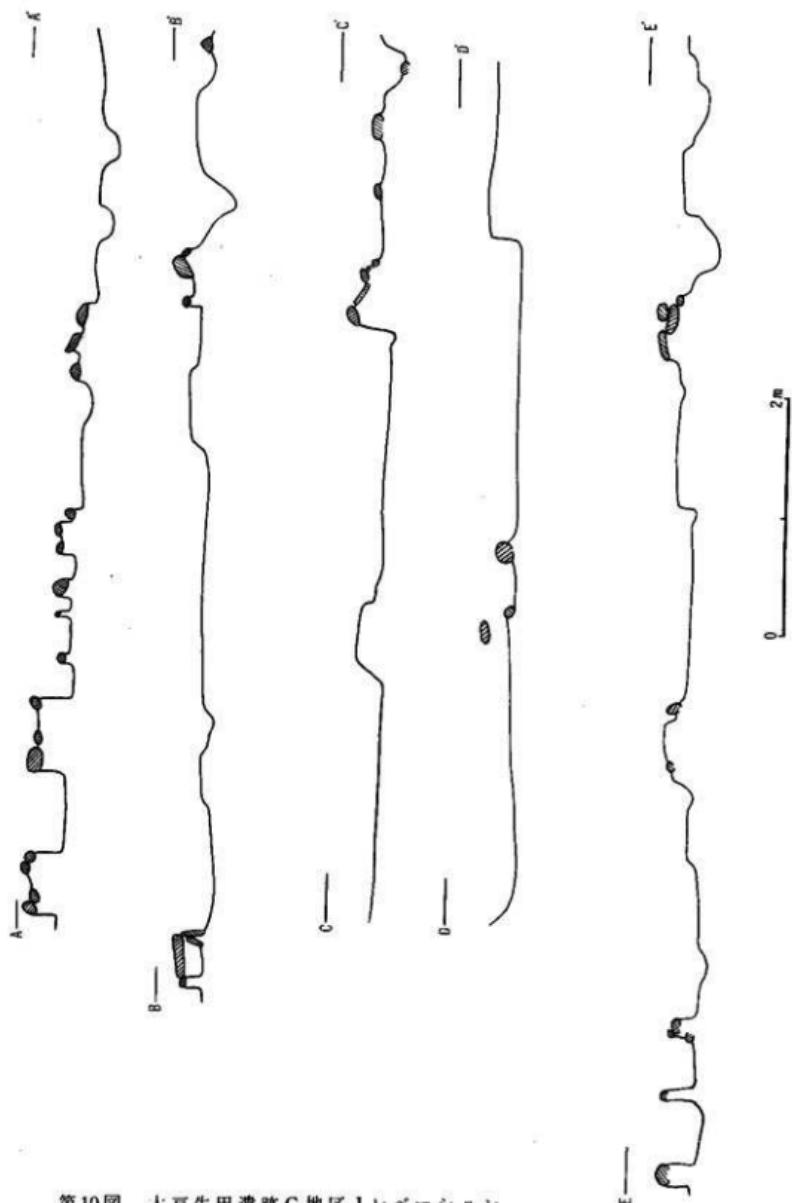
C地区(第9図)

須玉川から道路ボックスの間をC地区としたが、すでに述べた様に、工事中の発見の為に調査範囲は須玉川沿いの12×12mの144m²のみであった。この小範囲の中になんと9軒の堅穴住居址が重複して発見されている。この住居址の集中状態は須玉川の形成した自然堤防上の立地を示唆するもので、道路全体から出土している遺物を見ると、縄文時代前期末からほぼ連続して平安時代に至っていることが理解される。しかし自然堤防が全く安全と言いつ切れる訳でないことは、土層図を見れば良く分る。C～Cセクション図では、7分が砂疊混入暗褐色土に埋められ、3号址は砂疊混入暗褐色土を切り、表上下40cmでは、薄く砂疊層が入っている。これから見れば少なくともこの自然堤防は3回の洪水に見舞われたことになるであろう。住居址床面の土は黄褐色土で二次堆積ロームと思われる。

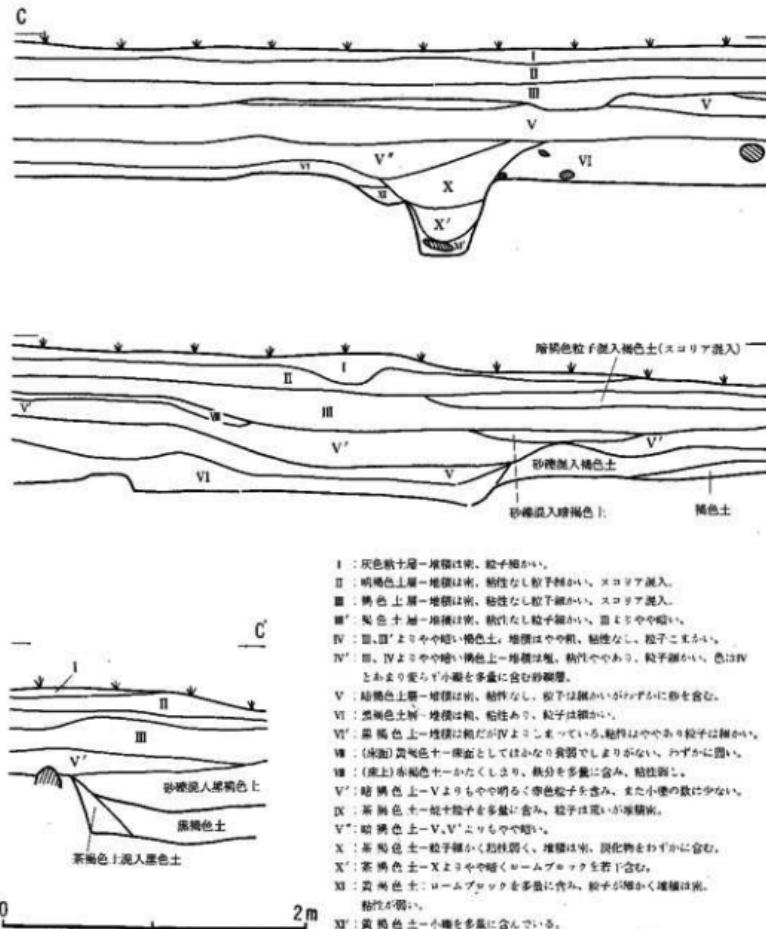


第9図 大豆生田C地区全体図

0 3m



第10図 大豆生田遺跡C地区1レベーション



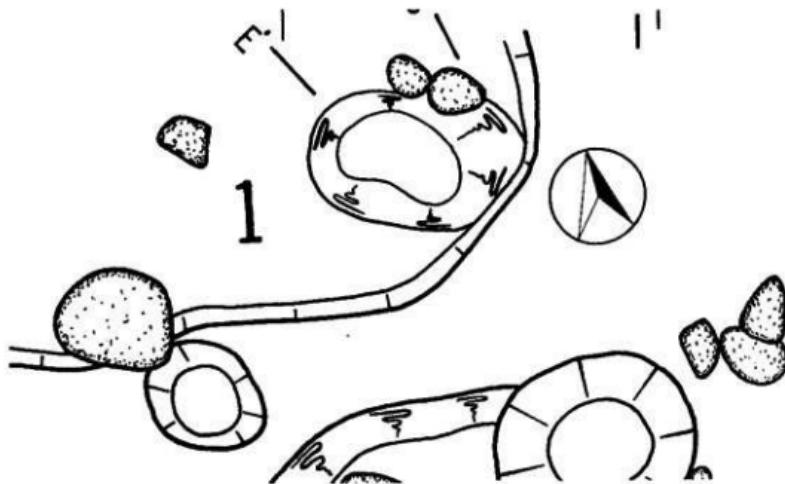
第11図 大豆生田C地区C～C'セクション

1号住居址（第12図）

C地区北西隅に於て発見された住居で、E1、F1グリッドにかかっており、住居全面積の約4分の1を発掘したのみである。

- プラン：隅丸方形と推定される。発掘した南壁は3m、東壁は1.5mである。
- 主軸：他の住居址と同じく東壁にカマドが設置されているものとすればN-104°-E（カマドの設置される壁に直交する線を主軸と考える。）
- 柱穴：住居内には無し。ただし南側にピットが1個ある。深さ17cm、直径50~60cmで、柱穴とはやや皿状を呈するが、この住居に付属するものであるが明確ではない。
- 周溝：なし。
- 壁：造構確認面から南側で19cm、東南隅で12cm、東部で11cmを計る。壁は軟弱で、ややだらとした落ち込みを呈す。
- 床：床面はF1グリッドの北側部分が一部良好に確認できたが、それ以外の所は非常にやわらかくしまりがない床面である。また東側壁に接して東西120cm、南北70cm、深さ14cmのピットがあり、皿状を呈する。
- カマド：確認することはできなかったが、平安朝の壁穴住居址の場合に東壁にカマドが設置されるとの東南隅に皿状ピットが掘り込まれる例が多くあり前述ピットの存在から逆に東壁の存在を考えられる。
- 出土遺物：住居址内造構に伴うと思われる遺物は一点も見当たらず、覆土中より土師、須恵器片等が多少出土している。また東南壁外20cmでローム面より10cm浮いて一括遺物がある。
- その他：なし

（野口）

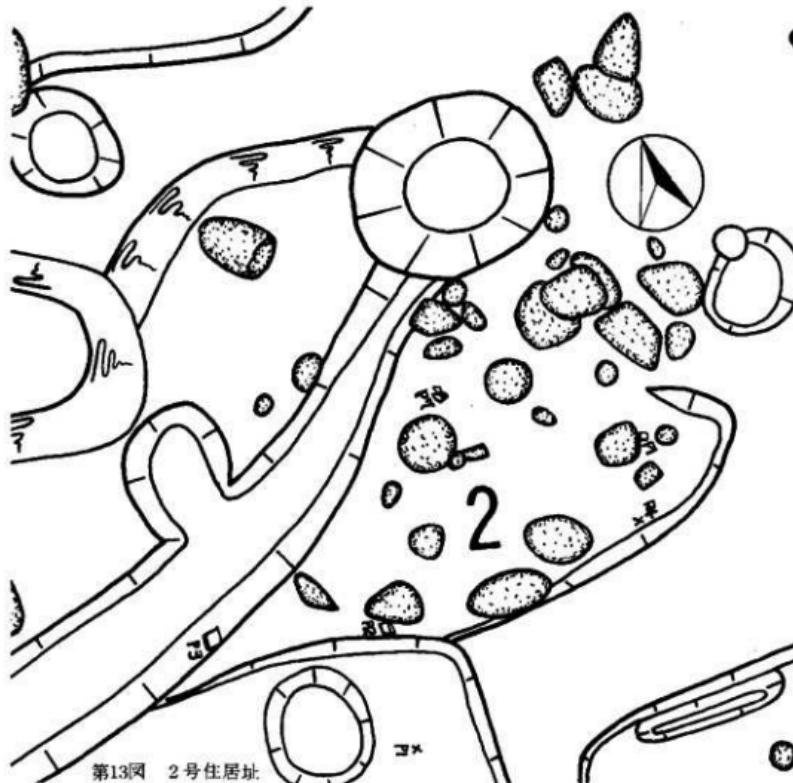


第12図 1号住居址

2号住居址（第13、14図）

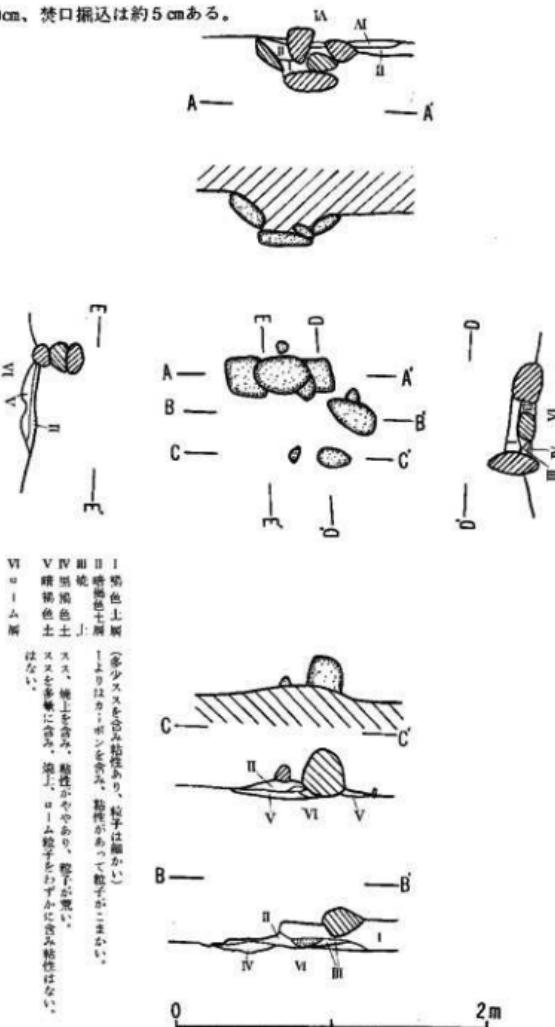
1号住居址の南に在って約50cm離れている。グリッドはD2.3、E2.3、F2.3の6グリッドにかかって発見されている。

- プラン：隅丸方形と思われる東西約3.3m南北2.7mを計る。ただし、北東隅に直径約1m、深さ約50cmの円形ピットがあり、このピットから流れ出す様に溝が西南に向って掘られている。又、北西隅にロームマウンドがあり、住居として確認できる範囲は東壁1.5m、南壁2mと溝に囲まれた三角形の部分である。
- 主軸：N-82°-Eでカマド設置辺と直交する軸である。各辺が直線ではないので82前後となる。
- 柱穴：不明、カマド東に深さ5cm、直径60cm×50cmの方円形ピットがある他、前述の北西隅の大ピットと溝中央部北側に張り出し状ピットがある。が、いづれも住所に伴うものと思われない。
- 周溝：なし。
- 壁：南壁8cm、東壁10cm、北壁3cmのそれぞれの壁高をもつが、いづれの壁も軟弱で直線的でない。特に北側は溝によって切られており北壁はゆるやかに立ち上っている。



- 床：床面の状態は全面的に悪く、確認するのも困難な状態であったが、カマド付近ではややかたくしまった面が確認された。
- カマド：東壁ほぼ中央にあって右組カマドである。石組はほとんど破壊されているが南袖石が1個、北袖石が5個残存しているが天井石は壊れている。焼土は袖石中央で厚さ10cm程見られ、全体の規模は70×80cm、焚口掘込は約5cmある。
- 出土遺物：覆土中はもちらんであるが、遺構に伴出すると思われるものとして上器片が7点出土している。このうちP5はカマド北側の大ピット内から出土している。
- その他：3号住居址によって南西隅一部を切られている。

(野口)



第14図 大豆生田2号住居址カマドセクション

3号住居址（第15、16図）

2号住居址南に位置し、4号住居址西にあって、北壁は2号址を切り、又溝に切られる。D4、E3.4.5、F3.4.5の7グリッドにかかって発掘されている。

○プラン：隅丸方形を呈すが辺長が明示できるのは東壁のみで2.8mを計るが南壁は南北コーナーにあたる部分でくの字に屈曲して方形とはならない。北壁は溝に切られ、2号址を切っているが、ほぼ2.8m前後の隅丸方形であろう。

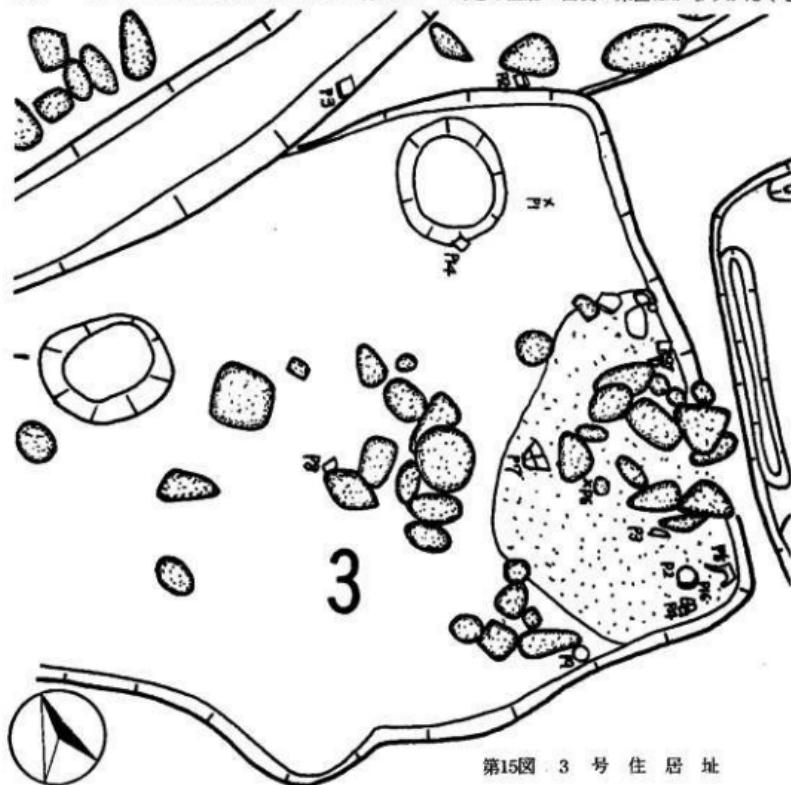
○主軸：N-91°-Eで東壁辺に直交する軸である。

○柱穴：柱穴らしいものは確認できないが北壁際に東西60×南北70cm、深さ20cmの長円形ピットがあり、西側住居址外になるかもしれないが、南北60×東西70cm、深さ20cmのピットがある。いづれも穴柱とは考えられないであろう。

○周溝：なし。

○壁：東北隅で13cm、東辺中央で18cm、南東隅で7cm、南西隅で10cmの高さをもち、壁のしまりは比較的良好である。

○床面：床面はほぼ全体的に良好であり、特にカマド周辺と住居の西側の床面はかなりかたくしま



第15図 3号住居址

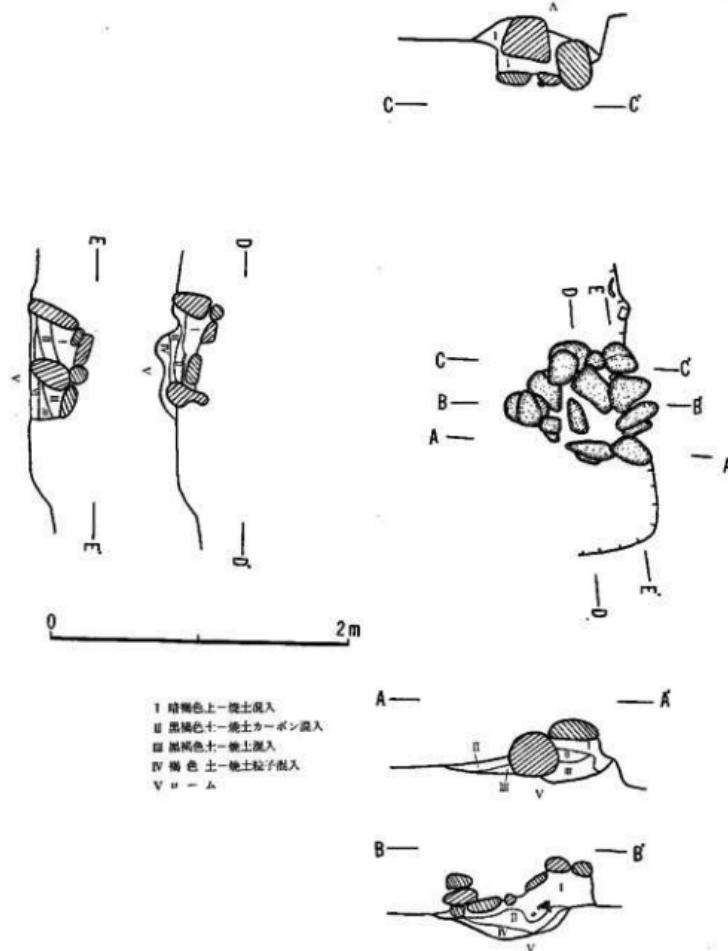
った床面であった。

○カマド：カマドの範囲は130cm×160cmほどで、袖石は南北とも良好に残っている。煙出は明確に把握されなかったが、全体的には破壊を受けたという程でもない。焚口掘込は10~15cmある。

○出土遺物：カマド周辺に集中して出土しており、特にカマド南側はピットがあり、この中に4ヶの杯の完形品と甕一括品が一個あった。又鍾がカマド北側にあった。

○その他：なし。

(野11)

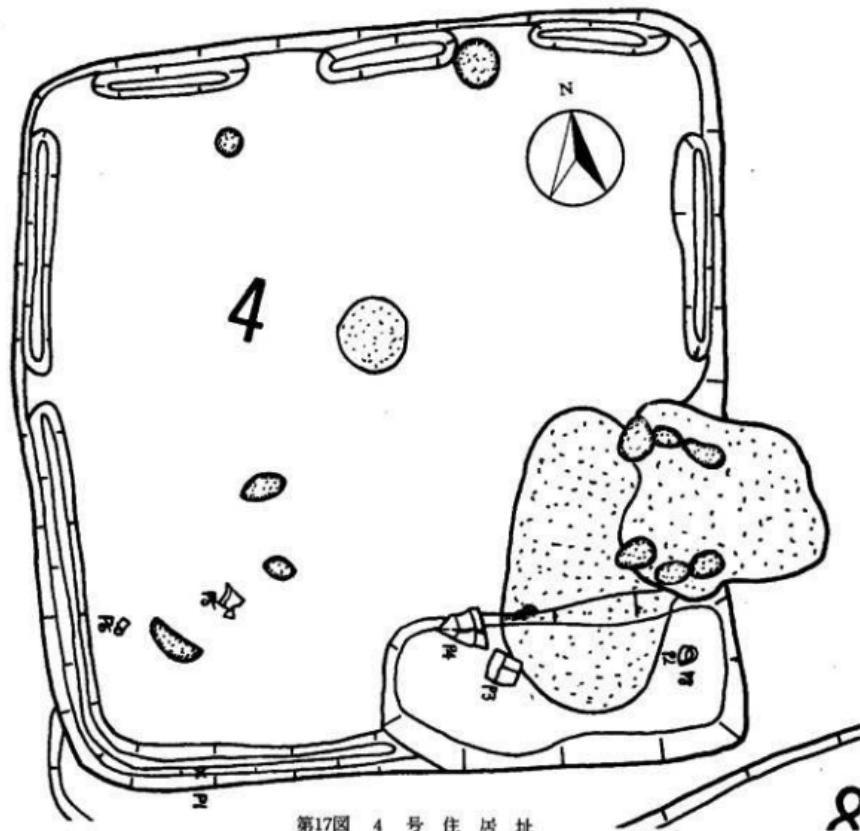


第16図 大豆生田C地区3号住居址カマドセクション

4号住居址(17、18図)

3号住居址東側にあってB4.5.C3.4.5 D3.4.5グリッド内より発掘されたもので、5号住居と重複するかもしれないが、一応、いづれの住居とも切り合わない。ただし3号住居址のカマドが4号西壁上に存在している。

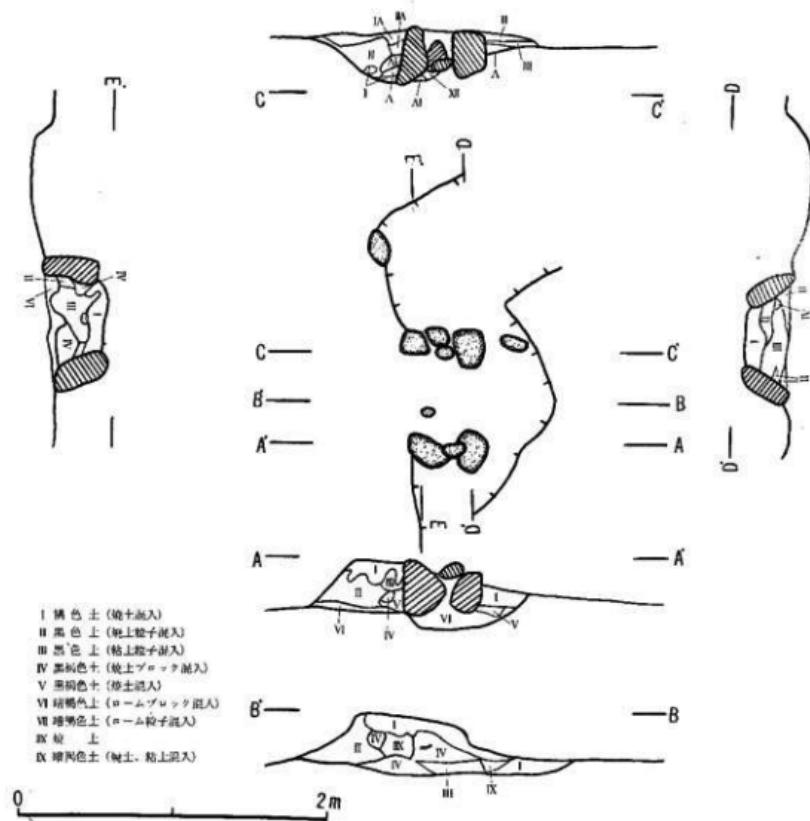
- プラン：隅丸方形を呈し、北辺360cm、東辺400cm、南辺360cmのやや台形である。
- 主軸：N-92°-Eで東辺に直交する軸である。
- 柱穴：なし。
- 周溝：カマド及びその南側ピットを除いて断続して走る。幅は15~20cmで深さは5~10cmを計る。
- 壁：北壁17cm、東壁6cm、西壁25cm、南壁2cmで、西壁が最も高く、東壁、南壁は軟弱で低い。
- 床面：極めて良好な部分はカマドの西、及び北側で、周辺にいくにしたがってやや軟かくなるが全体として良好である。カマド周辺は焼土をも含み、踏みかためてある。



第17図 4号住居址

- カマド：石組みカマドで120cm×110cmの範囲をもち、袖石が良好に残っている。袖石は偏平な石を2枚ずつ並べ、やや内側に傾斜させてあるが、その間に小礫が入れられている。焚口部掘込は床面より約10cm深掘り込まれており、爐道は不明である。カマドの焼土は西及び南に170cm×100cmの範囲で広がっている。
- 出土遺物：須恵器杯が南辺周溝上から、土師器杯2個がカマド南側ビット内より重なって発見され、壊破片が中央南側より出土している。全体として遺物は少ないと言える。
- その他：カマド南側に200×90cmの長方形ビットが存在する。このビットはいわゆる貯蔵穴と言われているものであるが、灰溜ビットと考えられるものであるかもしれない。
- その他：なし。

(米田)



第18図 大豆生田C地区4号住居址カマドセクション

5号住居址（第19、20図）

B2グリッドに発見された石組カマドによって確認された住居址で床面が部分的に残るが壁は検出できなかった。

○プラン：不明。

○主軸：N-90°-E（カマド袖石の中心を通る線に直交する軸）

○柱穴：なし。

○周溝：なし。

○窓：確認できなかった。

○床：カマド西側に於て一部確認できたが全体を把握することはできなかった。

○カマド：南北袖石がそれぞれ一枚ずつ残り焼土若干が検出された。

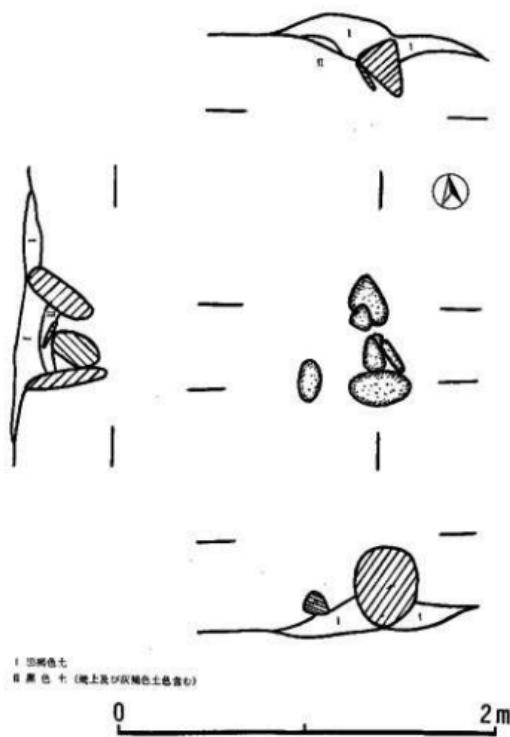
○出土遺物：一括遺物は発見されていない。

○その他：なし。

（米田）



第19図 5号住居址

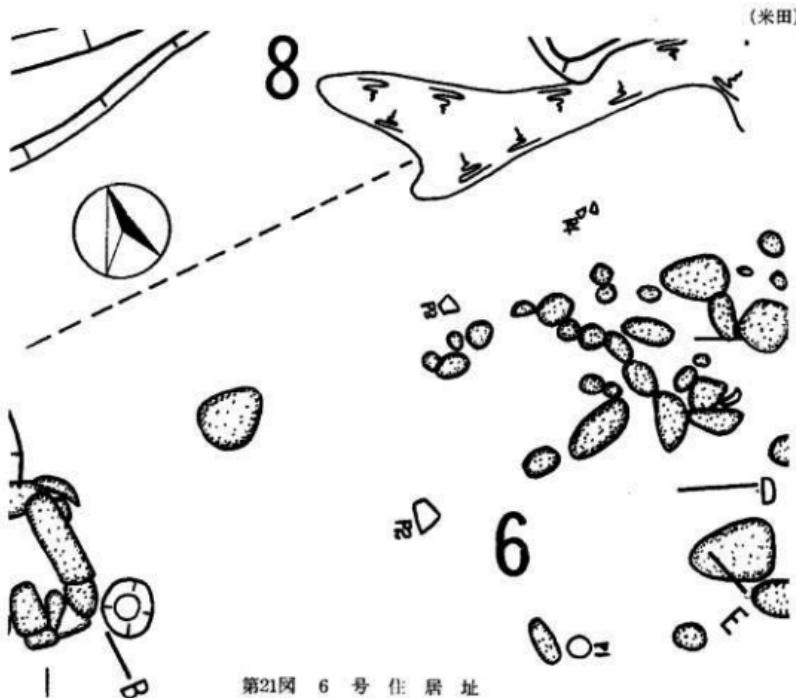


第20図 大豆生田C地区5号住居址カマドセクション

6号住居址（第21図）

C地区南東コーナーにあって、8号址を切り、7号址に切られている。発見グリッド地点はA5.6. B5.6グリッドのほぼ4グリッドにかかる。8号址を切り、7号址に切られた住居でカマドも不明である。

- プラン：不明。
- 主軸：不明。
- 柱穴：発掘区域内に於ては確認されず。
- 周溝：確認された北壁に沿って浅い溝が走っているが、周溝とは言いがたい。
- 壁：北壁の一部を確認。壁高は10~15cmだが軟弱である。8号址との切り合い部でも軟らかく確認できなかった。
- 床面：発掘範囲の南側の方で、しまりがあって良好であるが、7号址との境や、北側8号址との境では軟弱である。
- カマド：確認できない。
- 出土遺物：土師器皿が覆土中より出土した他灰釉瓶子片等が出土している。
- その他：7号住居址カマド東で直径30cm深さ20cmの浅い円形ピットが発見されたが、どちらに伴うものは不明。

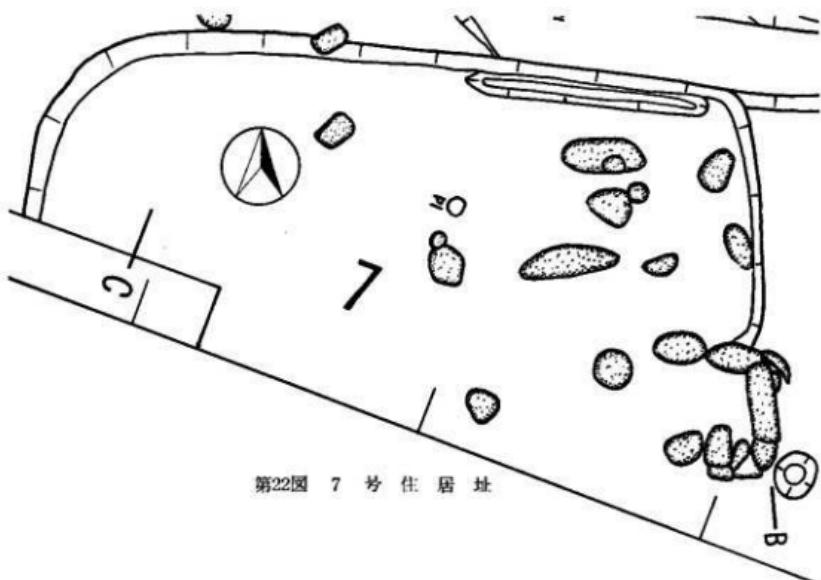


第21図 6号住居址

7号住居址（第22、23図）

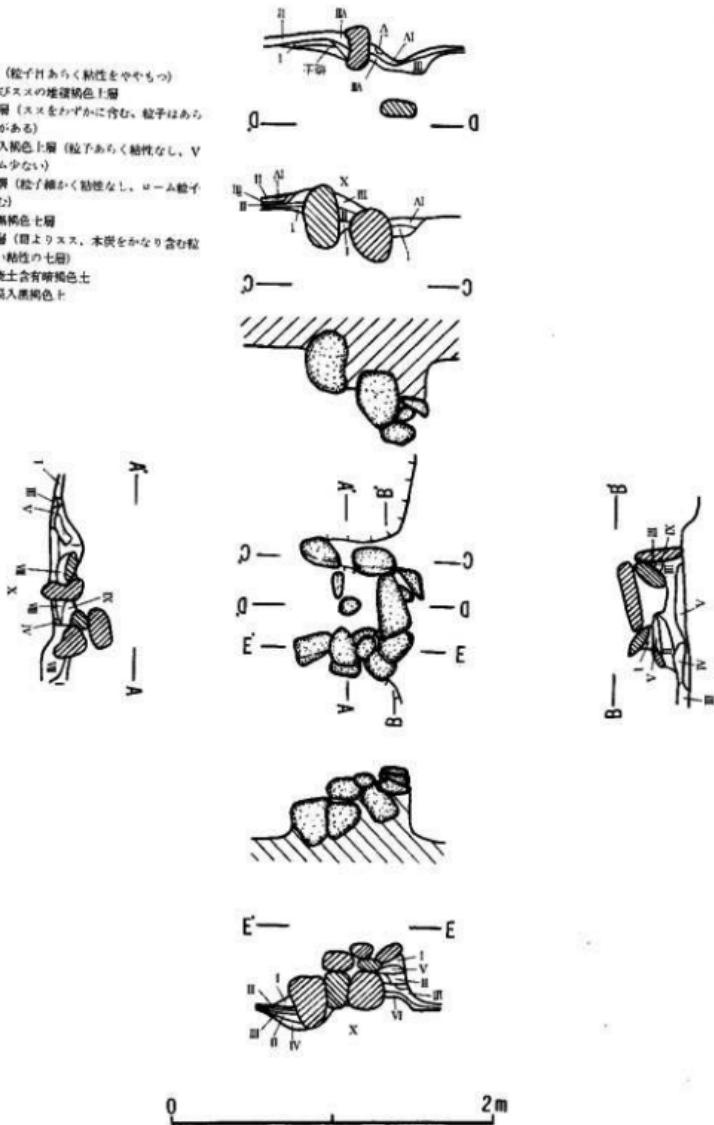
- 4号住居址の南で8号、6号住居址を切ってつくられた住居で全掘はされていない。C5.6 D5.6 E5.6 の各グリッドにかかる。
- プラン：隅丸方形と思われるが北壁辺4.2mを計る。
 - 主軸：N-89°-Eでカマドをもつ邊と直交する軸である。
 - 柱穴：なし。
 - 周溝：北壁にそって一部に見られ、巾15~18cm、深さ6cm、長さ1.6m。
 - 壁：西壁36cm、北壁中央約40cm、東壁7cmを計り、東壁を除く発見されている壁は良好でしまりが良い。
 - 床：中央部からカマド側にかけては水平でしまりも良いが、西側はやや軟弱である。
 - カマド：南北袖石は良好に残り、北側は2~3個、南側5~6個の石組の袖で、天井石も河原石の柱状石が残っている。カマド中央部に支脚が残り、カマド焚口の掘込は約5cm~10cm、焼土も5cm程あって良好なカマドと言える。規模は80×90cmを計る。
 - 遺物：中央部覆土中より皿一括土器が1個出土した他には破片が主である。
 - その他：カマド東側に直径30cm深さ11cmのピットがあり、住居に付属するものか不明。

(井川)



第22図 7号住居址

- I 黒褐色土（粒子はあらかじめ粘性をややもつ）
 II 硫化物及びスズの堆積褐色土層
 III 黑褐色土層（スズをわざかに含む、粒子はあらかじめ粘性がある）
 IV ローム混入褐色土層（粒子はあらかじめ粘性なし、Vよりローム少ない）
 V 黄褐色土層（粒子はあらかじめ粘性なし、ローム粒子多量に含む）
 VI 木炭包含黑褐色土層
 VII 黑褐色土層（黒色リス、木炭をかなり含む粒子のあらかじめ粘性の七層）
 VIII スズ及び硫化物含有黑褐色土
 IX 乾土粒子混入黒褐色土
 X ローム



第23図 大豆生田7号住居址カマドセクション

8号住居址（第24図）

6号、7号住居址に切られた住居で、その規模は不明の点が多い。A5.B5.C5.の各グリッドにかかっている。

○プラン：隅丸方形と推定される。

○主軸：不明。

○柱穴：不明。

○周溝：不明。

○壁：北壁及び東壁の一部を確認、北壁は7～10cm、東壁は10～15cmであるが、状態はあまりよくない。

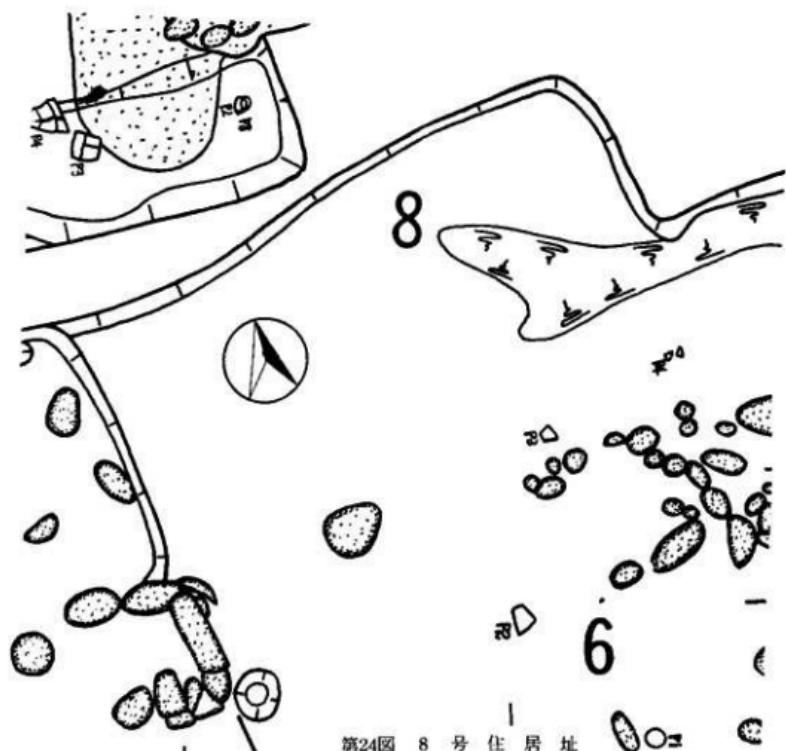
○床面：あまり良好でなく、だらだらと6号住居址床面に接して下る。

○カマド：不明。

○出土遺物：覆土中より破片が出土している。

○その他：なし。

(井川)



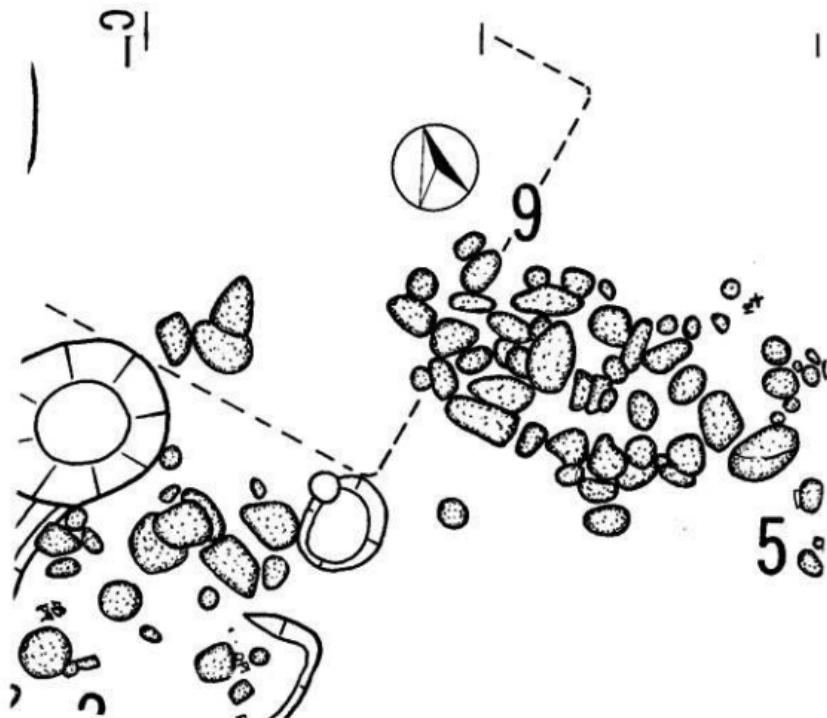
第24図 8号住居址

9号住居址（第26図）

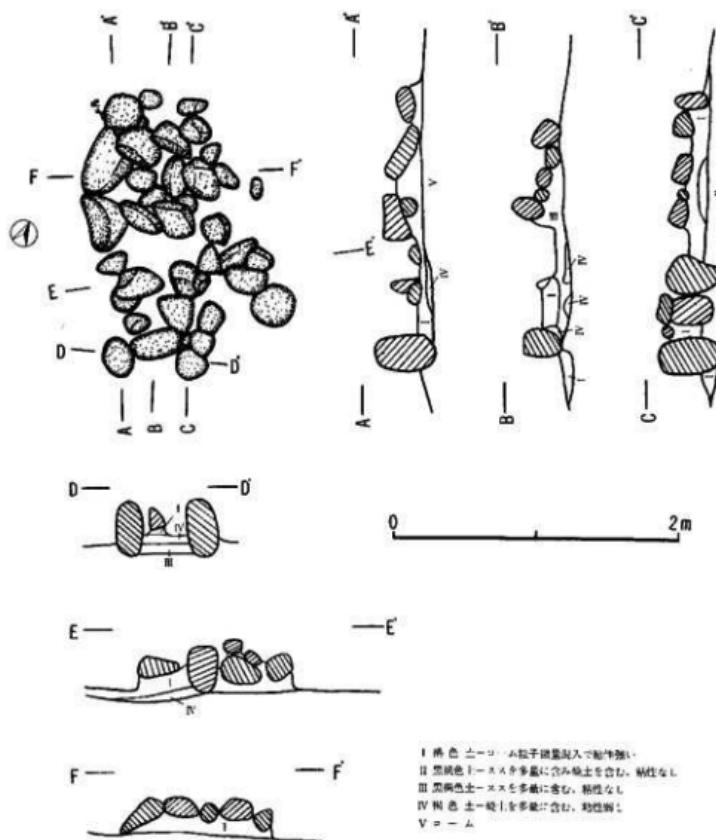
プランが全く不明でカマドと一部床面の確認によって住居址としたもので、カマドも破壊されている様である。範囲はC、D1.2グリッドにかかるものと思われる。

- プラン：不明。
- 主軸：不明。
- 柱穴：不明。
- 周溝：不明。
- 壁：不明。
- 床：カマド北側に一部良好な面が存在する。
- カマド：南北約2m、東西1.2mの石組が存在し、焼れていると思われるが、部分的に抽石等が残り燒土もある。正確なカマドの方向や石組は把握できなかった。
- その他：なし。

(井川)



第25図 9号住居址



第26図 大豆生田C地区 9号住居址カマドセクション

(2) 遺物

A地区出土遺物

1. 土師器

a. 杯・皿

平安時代に比定される土師器のうち黒色土器を除いて土師器の杯及び皿には、その整形技法に於て幾つかに分類することができる。その分類の基本的整形技法は、内面と外面、及び底部整形方法である。整形技法を表にすると次の様になる。

外 面	内 面	底 部
ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ	糸切り(回転、静止)
ロクロ横ナデ後ヘラ削り	ロクロ横ナデヘラ磨	糸切り後ヘラ削り
ロクロ横ナデ後ヘラナデ	ロクロ横ナデ後ヘラ暗文	ヘラ切り(ヘラなで)

平安期に於ける杯及び皿は畿内と異なりロクロ水びき手法による整形を基本としていると思われ、整形の第1段階では粘土塊ロクロ法によって造り出された内外面ロクロ横ナデ、糸切底の整形痕をもつ。これに加えられる整形段階の多いものがより古く位置付けられているのはすでに田中琢氏によって説かれているところであるが、それは大枠として本県に於ても認められるものであろう。山梨県中央道埋蔵文化財包装地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂、明野、蘿崎地内—(1975.3)で示した「杯整形方法」には若干の変更を加えておかなければならない。第Ⅰ期、第Ⅱ期に於ける杯の内面整形方法は「ロクロ横ナデ→ヘラ横磨き→放射状暗文」の3工程を整形段階として示し、第Ⅲ期で「ロクロ横ナデ→放射状暗文」としたが、暗文はヘラ磨後では装飾的効果が薄く、量的にも少ないと整理段階で明らかになってきた。この為第Ⅰ期、Ⅱ期の工程のヘラ横磨は()で閉じておいた方が良さそうである。又、暗文の種類でも放射状と花弁状に分類することができ、黒色土器ではラセン状の暗文、又は放射状暗文+ラセン暗文といった組合された暗文も見られることが言える。

次に分類の根拠となり得るのは器形、口縁部等の形態がある。器形で大きな差が分るのは杯の口径と底径の比率である。概観して底径が口径の2分の1以上、ほぼ2分の1、2分の1以下といった様に分けられる。細かな計測をした場合には一定の数字が得られるかもしれない。口縁部も径比率が2分の1以下のものは外反玉縁が顕著に現れてくる。皿に於ても胸部がくの字に屈曲し、口縁が外傾するものと外反玉縁を呈するものに大きく2分され、遺物も中間形態をも含め、連続したものが出土している。

第27図

内面暗文が施されるものを集収した。1.2は外面ロクロ横ナデ、内面放射状暗文の杯で1は他のいずれよりも古式に属するものであろう。2は胸部下半にヘラ削痕があるかもしれないが破片で不明である。3.5が放射状暗文の他は、暗文の線が連続しているので花弁状暗文とした。

第28図 第29図(1~9)

外面ロクロ横ナデ後胴下半ヘラ削り内面はロクロ横ナデ痕のものを一括した。この中でも1.2が古式に属し、外反玉縁を呈するものは新しくなる。外面斜目のヘラ削りの方法が規則正しく並び、口唇が尖るものはやや古くなることが分っている。

第29図(10~15) 第4図(1~8)

内外面ともロクロ横ナデ整形痕のものを一括した。10はやや特殊であるが他は胸部下間にヘラ削り痕のある可能性を有する。

第30図（9～17）

外面胸部下間にヘラ削り痕のある皿を一括した。12の様に胸部が屈曲して立ち上がるもので胸部下半が横方向のヘラ削り、底部が回転ヘラ削りのものは古式であり、次に11、15、16が統いて、最も新しいものが残りとなる。

第30図（18）

極端に外反したこの皿は編年的位置が不明確で今後の資料増加によって位置付けたい。

黒色土器

第31図から第33図に内面黒色土器を一括した。黒色土器の器種は杯、皿、浅鉢がある。長野県内から見られる甕の黒色は全く無い。黒色土器は整形方法によって様々な組み合せがあり、年代的にも異なる様である。最も古式に属するのは器内に暗文が施されるもので、土師器の杯の暗文技法が終る段階に黒色土器に発生すると考えられる。

長野県内の黒色土器が全般的に暗文を施さないのに対し、本県の黒色土器発生期では放射状、花弁状暗文、ラセン状暗文及びその組合せ暗文がある。暗文の施されないもので内面ヘラ磨によるものがある。この編年的位置は土師暗文杯と平行かやや後出的で、浅鉢はヘラ磨のものが多い様である。

大豆生田遺跡での黒色土器の編年は長野県内より移入されたと考えられる上器群と、甲斐国府を中心とし生産されたものとの重複使用された地帯である為に長野との対比上は便利であるにもかかわらずA地区の様に擾乱層（二次堆積層）の中に混在している場合にはこれらの分離と分類が困難である。しかし甲斐文化圏に含まれると想定される黒色土器の変遷は土師器の杯や皿と同一器形、外面整形技法が見られる。

第31図1、2第33図8が甲斐文化圏に於ける黒色土器の最も古式の形と言える。外面上半はロクロ横ナデ、下半はヘラなあるいはヘラ横削で底部ヘラ削、又は円削りであり、8は底部内側に一本の沈線がめぐらされるが、これは、他地区遺物にも見られる削出高台の変形であろう。次に31図3、4、6等の杯が続くが、これに併行する長野系の黒色土器として第32図3、5、6、9等があり、それ以前では32図の1が比定されよう。しかしこれ以降になると甲斐文化圏の影響を受けた土器も見られる所から、長野系黒色土器の生産地も山梨県を出たとしても遠からぬ地であったことが推定される。第31図にもどると、5、7、10、11等は3段階目のものであろう。口唇部玉縁で底部が小さくなっている。いずれも花弁状暗文が施される。暗文が消えるものでは第32図の2があげられる。恐らくこの土器は前述の第3段階と言ったものに併行するであろうが、更に外反し、器壁が薄くなったものを第4段階とすることができる。（ここで言う段階とは編年を必ずしも示さず、技術的変遷段階を指すものである。）

浅鉢と考えられる第31図8、9第32図11は前述した様に内面ヘラ磨で直径20cm以上のものである。

第33図に収録したもので1、2は高台付皿で14は内黒の蓋（杯）かもしれない。

第34図の1は小型皿で一般にかわらけの祖形などと言われる土師質上器である。2は高台が特に高く造られている。11～13は土師器の杯蓋で、かつてあまり見ることの無かった遺物であり、破片ではあるが復元実測なども試みた。

須恵器（第35図）

第35図には杯蓋と杯を集めました。杯蓋、杯いすれも破片からの復元実測によるものであるため正確さに欠けるが、須恵器のこれら器種の少ない本県では貴重な資料と思われる。

今までの研究段階では、須恵器杯は10世紀中頃でほとんど十師器に取ってかわっているのだが、この岡の遺物がそれ以前の遺物であるという確証はない。

杯蓋は一般的に分類される様に器高が高くふくらみをもち端部がL字形に屈曲するものと、器高の低いものに分けることができそうである。杯は8の様に口径16cmを計るものと10cm前後のものがあるこの他に甕類があるが第40、41、42図に示す。

灰釉陶器（第36、37図）

完形品は皆無であり復元実測である。黒笹90号窯期から折戸53号窯期に比定される遺物と考えている。個々の遺物説明は行わないが、全般的に概観して気付く点は口縁部が外反し尖っていることであろう。土師器の杯が外反玉縁を呈し、胴下半をヘラ削りによって器肉を減じているのを見て比較すると、土師器の工人達が灰釉陶器の器形に似せる為に生み出した器形の様な気がする。

第38図～42図までは土師器甕、釜、浅鉢、須恵器甕、灰釉長颈壺、甕、瓶子等がある。ここでは既に発見されていなかったり特殊なものを説明していく39図4は上師器カマドの一部ではないかと考えるが推定するのみである。同図6は須恵器が酸化したもので外面に板目叩目がある。第42図4は土師ではあるが内面にタールが相当付着しており、トリベと考えている。A地区からフイゴの口の破片（第66図3）が出土しているので、鋳形に注ぐ為の皿であるトリベが出土しても問題はないであろう。同図5は長颈壺の様な遺物の口の蓋かもしれない。

B地区出土遺物（第43～46図）

A地区の遺物とほとんど内容的な差はない。A地区と隣接している為もあるが、A・B地区とも湿地であり流土中の遺物であれば当然のことであろう。

1は内面黒色研磨土器で放射線暗文が施される。2～4は外面胴下半をヘラ削り、内面に暗文が施されるもの、8は胴下半のヘラ削りが横方向で底部が回転ヘラ削り（ヘリ切り）技法が見られるもの、26～32の黒色土器のうち29は皿であるが、胴が屈曲するのは黒色土器中珍らしいものと言える。33～36はいすれも十師の杯蓋で、須恵器生産の少ない本県では土師器の蓋が多量に生産されたことを裏付けるものであろう。37～39は須恵器杯である。40～43が灰釉陶器の長颈壺で46は須恵器の長颈壺である。48は灰釉の浅鉢であろうと考えているが、直径約30cmもあり、盤かもしれないが、いずれにしろ一般に知られている資料より大巾に大きいものであろう。残念ながら破片で復元実測であり参考にしていただきたい。49は土師器小型甕としたが器壁が薄く底部外削をヘラ削りしており底部もヘラ削りである。器形が灰釉小鉢に類似しており技術的な関係があるかもしれない。50は巻上ロクロ痕を内外に残し底部は糸切である。土師器甕の糸切例は少なくC地区4号址例と同時期に含まれる遺物であろう。47、51は土師器の甕である。

C地区出土遺物（第47～59図）

住居址が9軒発見されているこのC地区では平安時代土師器研究上極めて貴重な遺物が発見されている。その貴重な遺物とは奈良時代真間式土器と平安時代土師式土器の接点で平安時代頭初に相当する一括遺物である。出土土地は4号住居址で、発掘地の中央部から発見され遺構は全掘されている。

4号住居址の床面及びカマド内、灰溜ピット内より出土した遺構に伴う遺物の主要なものは第52、53図に示してあり、それぞれの遺物の概要は表に記してある。大豆生田跡出土の真間式土器の代表

的なものが第59図1の皿で、糸切技法によって第4号住居図3.4の様に底径の大きな杯を産み出すに至ったものであろう。胴部ヘラ削（なで）痕が見えないのも、その古さを表わしていると思われる。甕もロクロ整形による。20は底部糸切で、他時期の様な刷毛目削痕、木葉底部は見られない。須恵器杯1.2.5も底径が大きく口唇がやや尖る。底部が糸切であり、土師器と器形的に類似していることが分かる。

これら4号住居出土の土器は小瀬沢町上平出遺跡1号住居出土遺物に先行するものであり、編年上の価値が極めて高いものであろう。

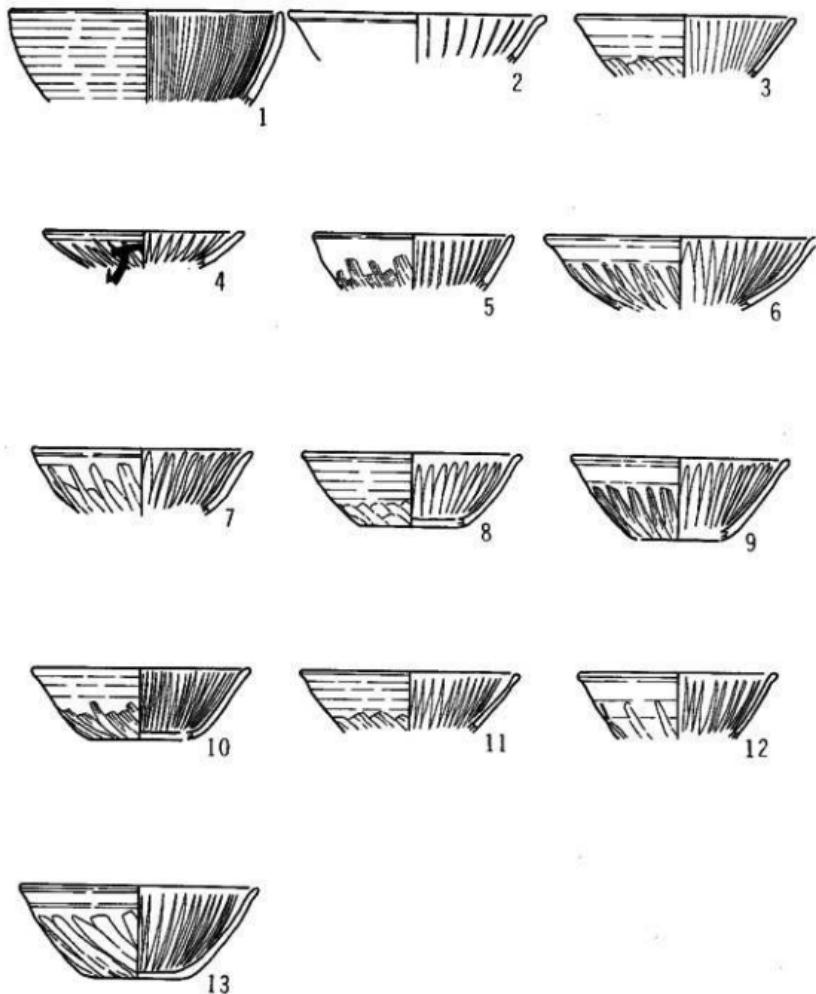
次に重要な発見と考えられるのが、第66図2のフイゴの口（土師表）であろう。遺構が不明なのが残念であるが、A地区で2点、C地区1点の他にも破片等が出土している。又A地区ではトリベ（第42図4）が出土しており、大豆生田遺跡の一隅で精錬が行なわれていた可能性がある。事実各地より出土している不定形鉄製品（図版19-1）からしても製錬後の鉄材と思われるものである。

フイゴの口は本県に於て2番目の発見例である。その最初のものは日下部遺跡であるが、現在日下部中学校保管の資料中に見ることができないので、本県の貴重な資料と言える。又、鉄関係遺跡として近年報告されている塩山市下小田原字原の京遺跡がある。これは昭和46年8月に塩山市によって調査されたもので、直径約1.6mの円形に礫がピット中に投入されていたもので、上野晴朗氏は鍛治場跡としている。このほか製鉄、製錬所と考えられる場所は発見されていない。

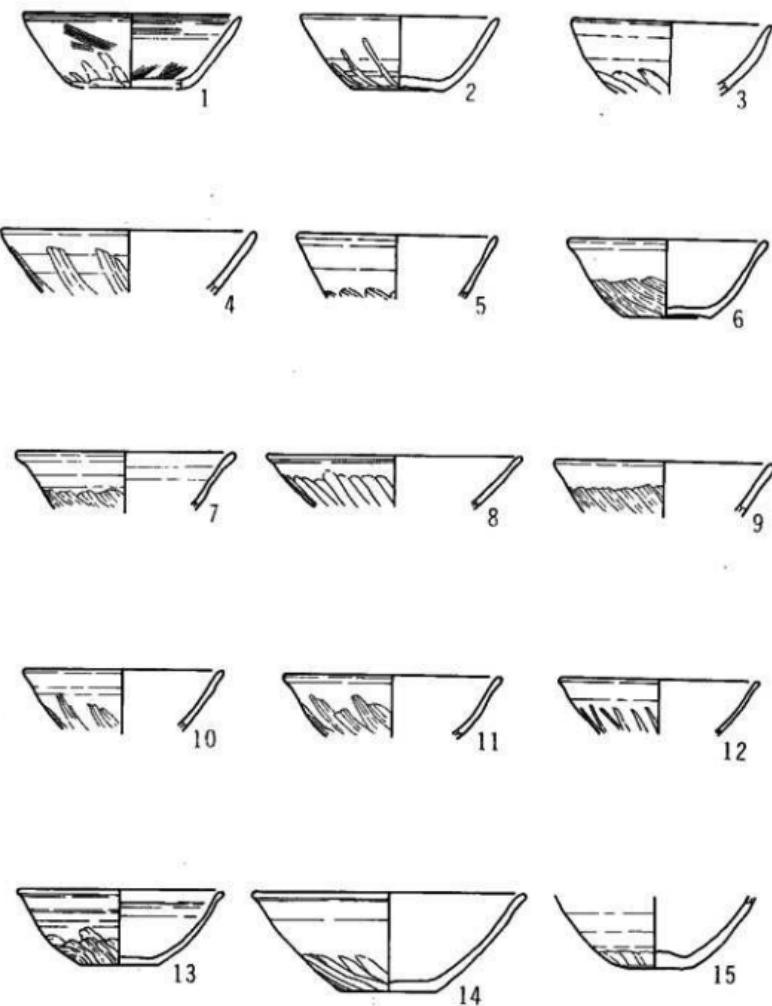
C地区での主な発見は以上のごとくであるが、その他の遺物でも軽視できぬものが多い。即ち、縄文中期、後期、晩期、弥生時代水神平系土器、後期上器片等が出土している。時代の巾の長さからすればそれぞれ少量で、流されたものであるかもしれないが、C地区北方に連なる自然堤防上にこれらの時期の生活が営まれたものであろうし、A、B地区の低湿地は弥生時代以降の水稻耕作には最適地であったと思われる。

それでは各住居出土遺物について概観してみよう。

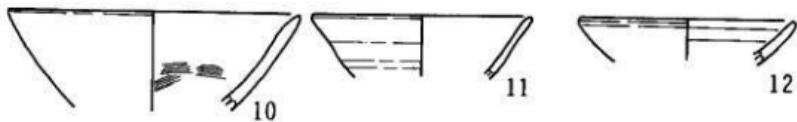
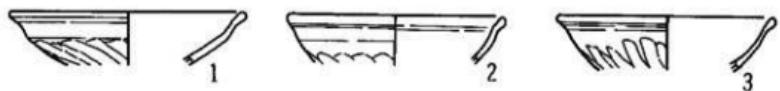
1号住居出土遺物はいずれも覆土中で、特に5の小形皿は厚い土師質土器の祖形となるもので、床面より約70cm程浮いていた。1は床面に近い所から発見されたもので、これが住居の時期に最も近いものであろう。2号住居は比較的古く考えられるもので、覆土中より1号住居床面に近い土器が多量に出土しており、2.3は占さを表すメルクマールとなる土器である。3.11、12は削出高台をもつ杯で一時的にのみ現れる。3号住居は平安時代の住居址として発見されたものの中でも遺物の保存状態の良好なもの一つで、水害に会って破壊した様に杯完形6個、罐1が発掘されている。従って一括遺物を見るのに一級資料であろうし、4号住居壁上にカマドが構築されている点も考えると、4号住居と並んで貴重なものであろう。第50図1.2は墨書「西」をもつ杯で、内面暗文が施される最後の土器であろう。黒色土器も多く、これには外面ヘラ削が見られない。又覆土中ではあるが、第51図24の手付小形瓶子片があった。本県出土例が少ないため復元実測をした。第50図18は小形の鉢で、特異的な口縁であり、今後の資料増加をまちたい。4号住居は前記したので5号住居を概観するが、この住居はプランが不明で、これらはいずれも覆土中である。91がロクロ整形の土師器小型直口壺で類例の少ないものであろう。6号址P1は住居床に約15cm浮いていたもので黒色土器皿であるが灰釉陶器の器形の影響を受けたと思われる口縁と高台が見られる。7号址は3号址よりやや新しくなるもので、暗文の施される杯が少なく、口縁外反玉縁のものが多い。9号住居址は住居に伴わず、いずれも覆土中のものである。



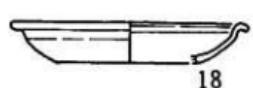
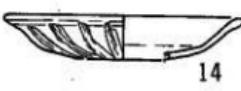
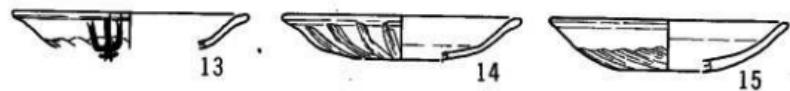
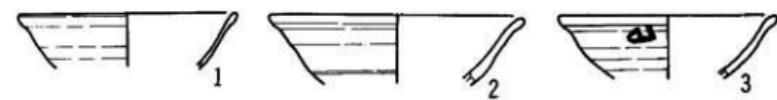
第27図 A地区出土遺物(1)



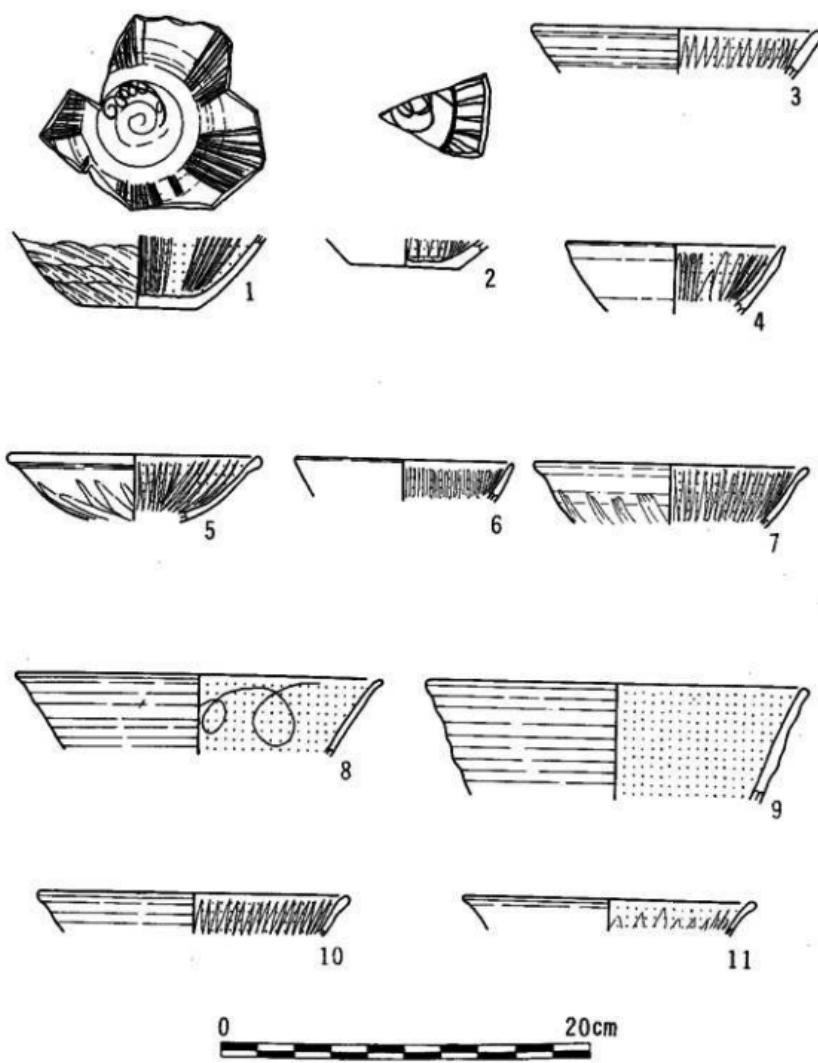
第28図 A地区出土遺物(2)



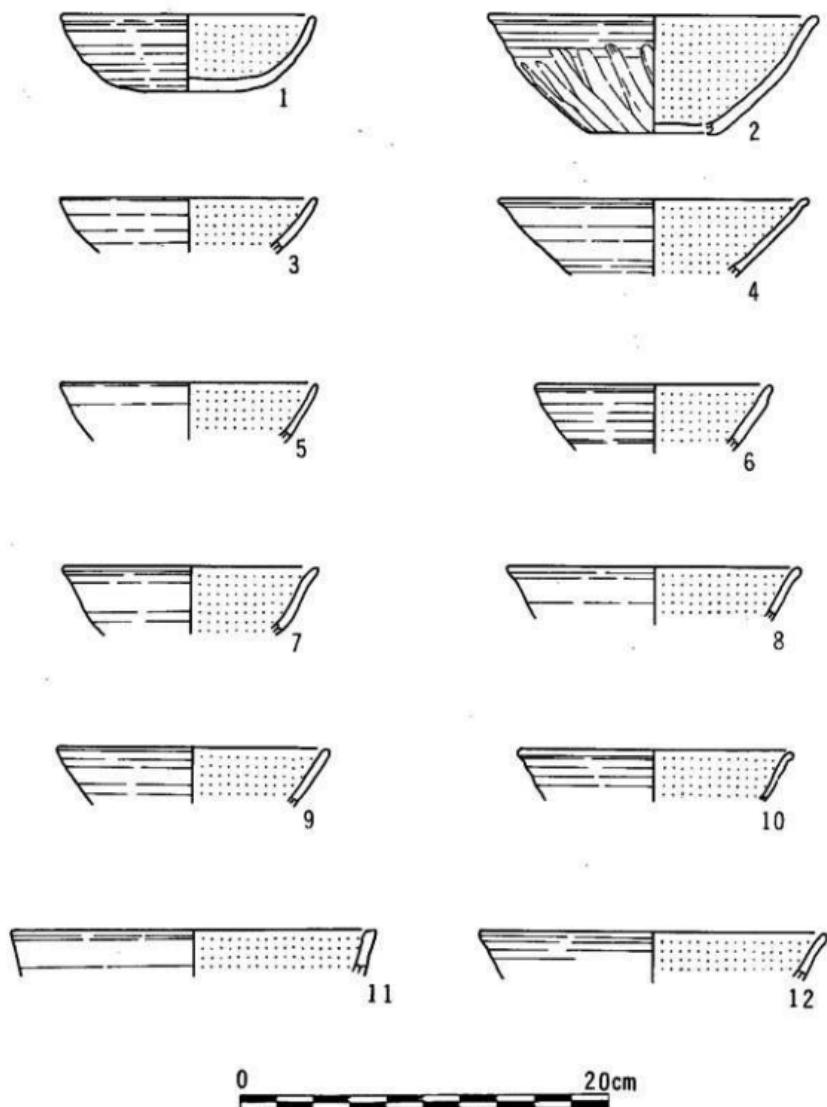
第29図 A 地区出土遺物(3)



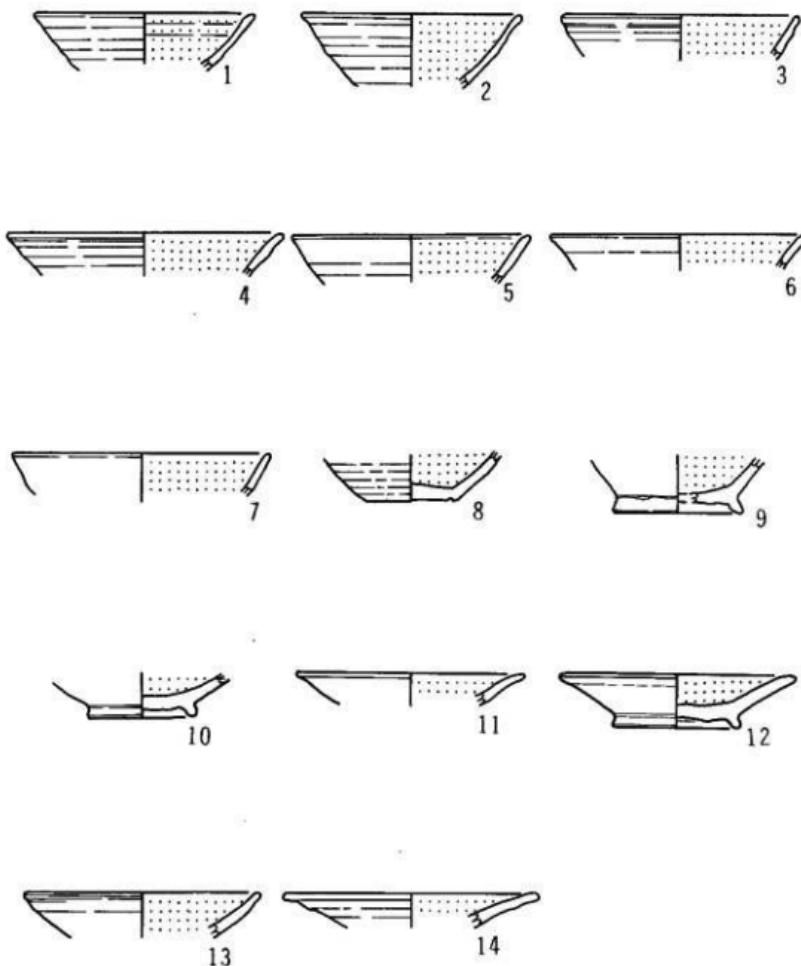
第30図 A地区出土遺物(4)



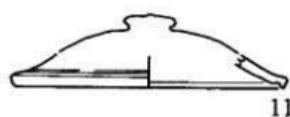
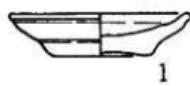
第31図 A 地区出土遺物(5)



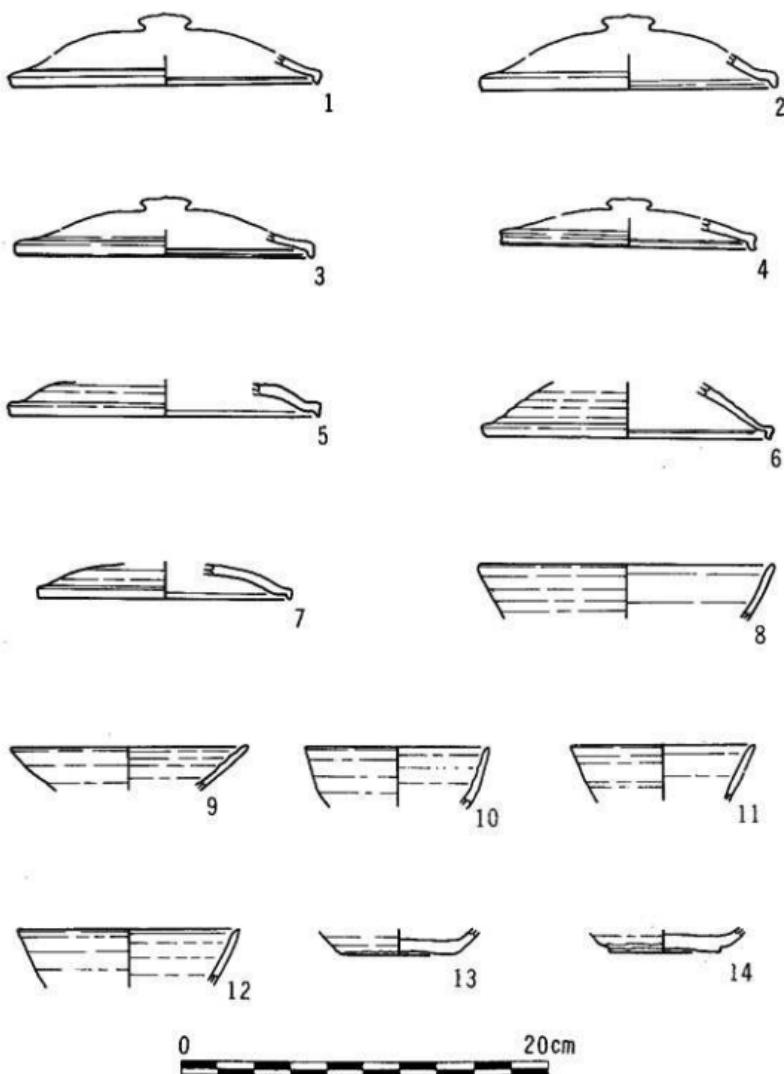
第32図 A地区出土遺物(6)



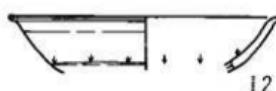
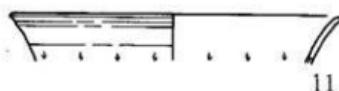
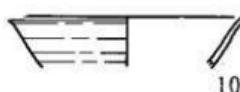
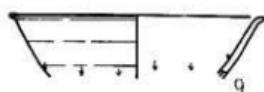
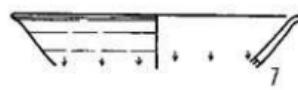
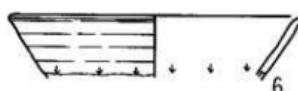
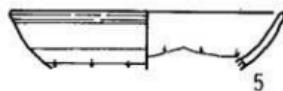
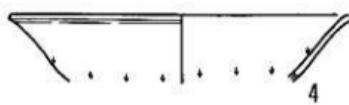
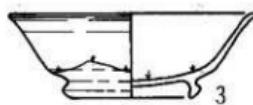
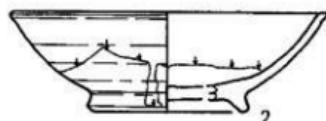
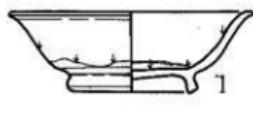
第33図 A 地区出土遺物(7)



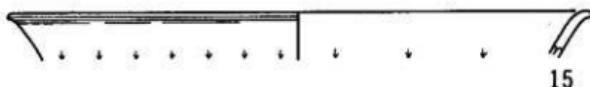
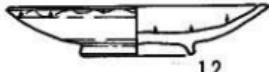
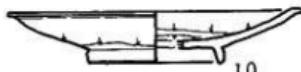
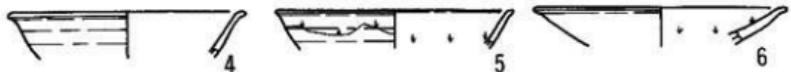
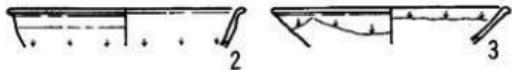
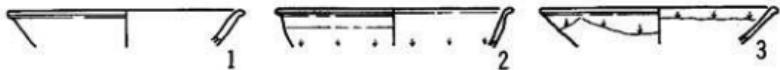
第34图 A 地区出土遗物(8)



第35図 A地区出土遺物(9)



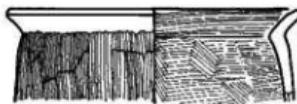
第36図 A地区出土遺物図



第37図 A地区出土遺物



1



2



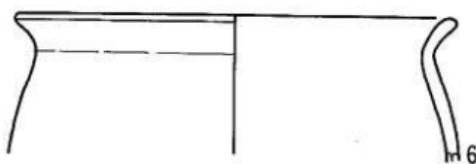
3



4



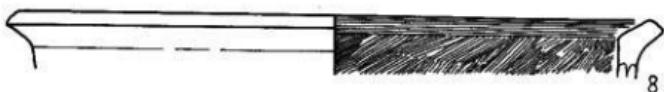
5



6



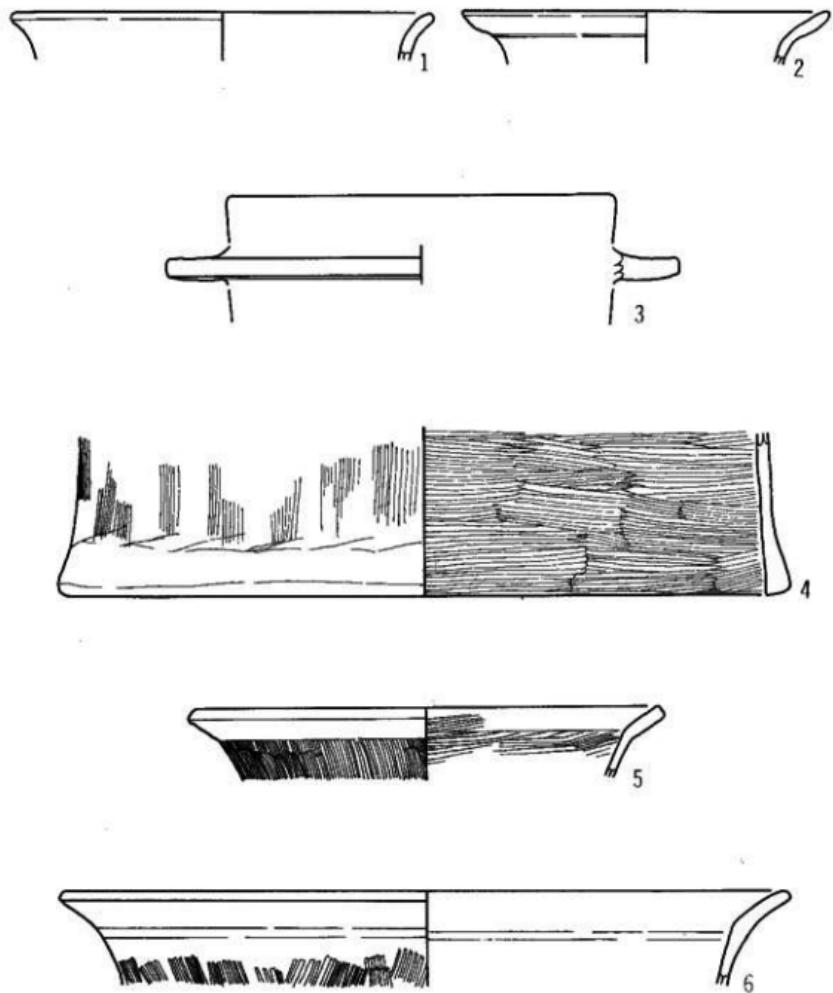
7



8

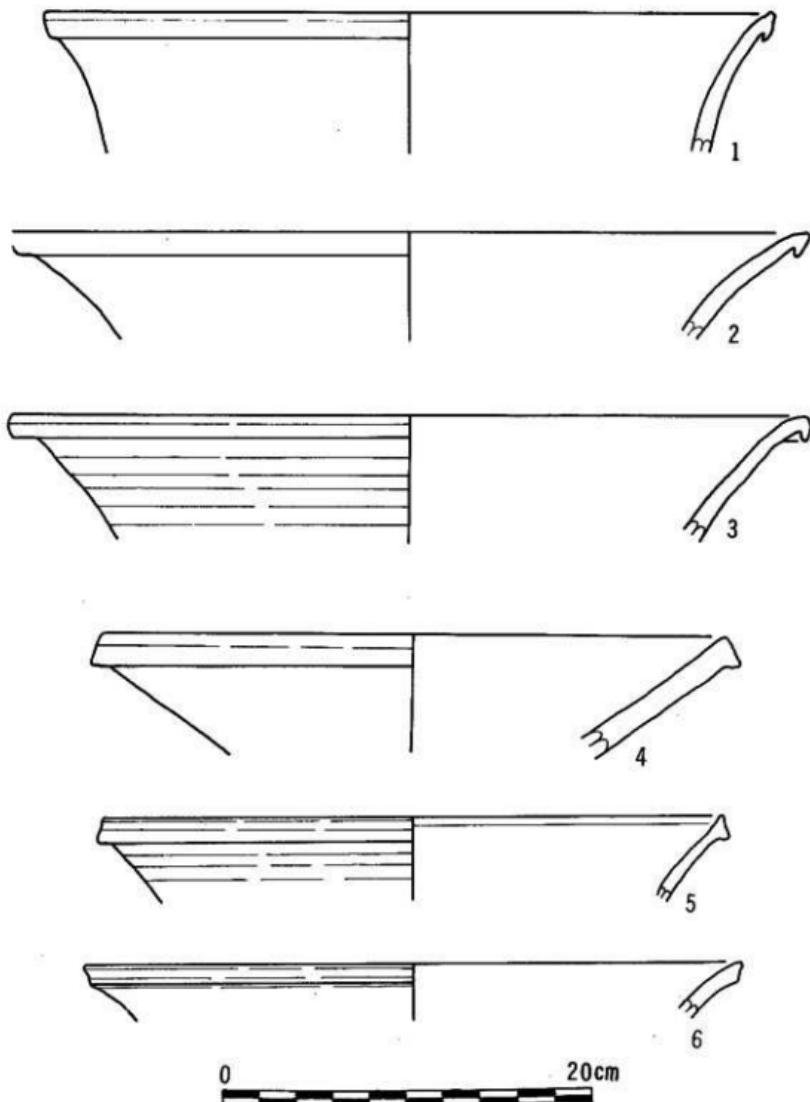


第38図 A地区出土遺物図

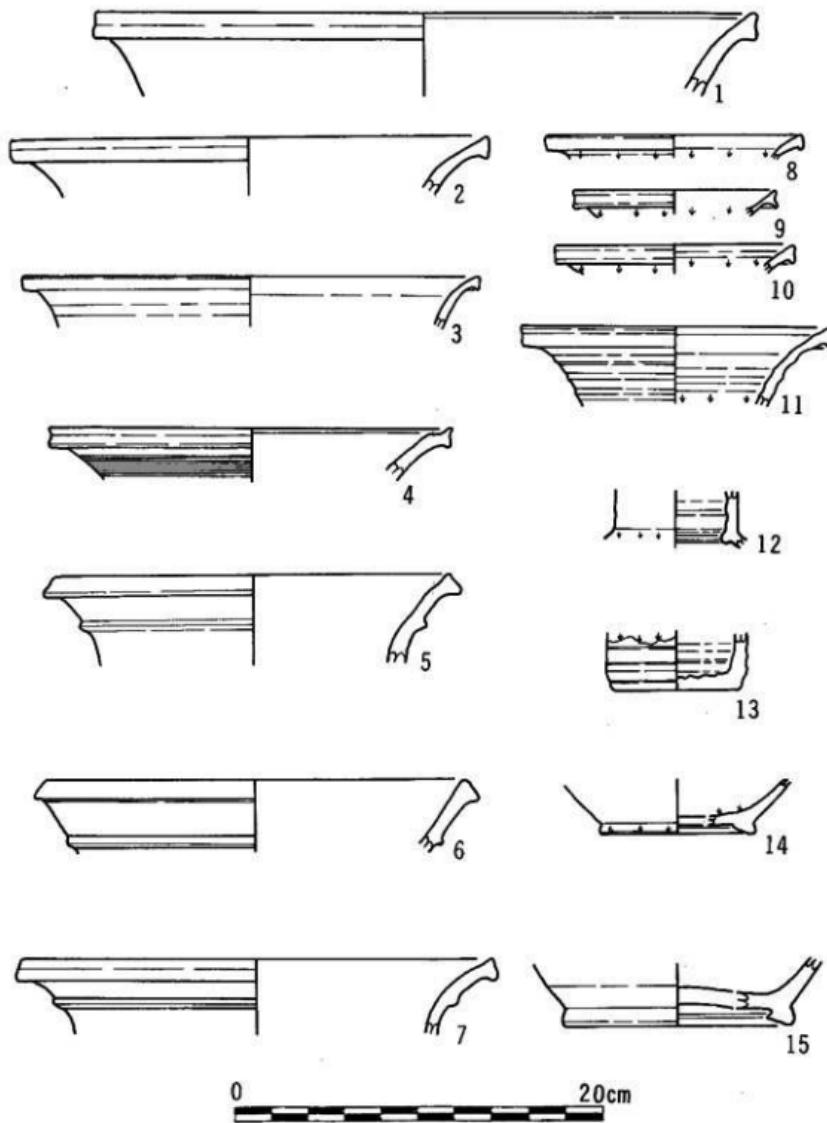


0 20cm

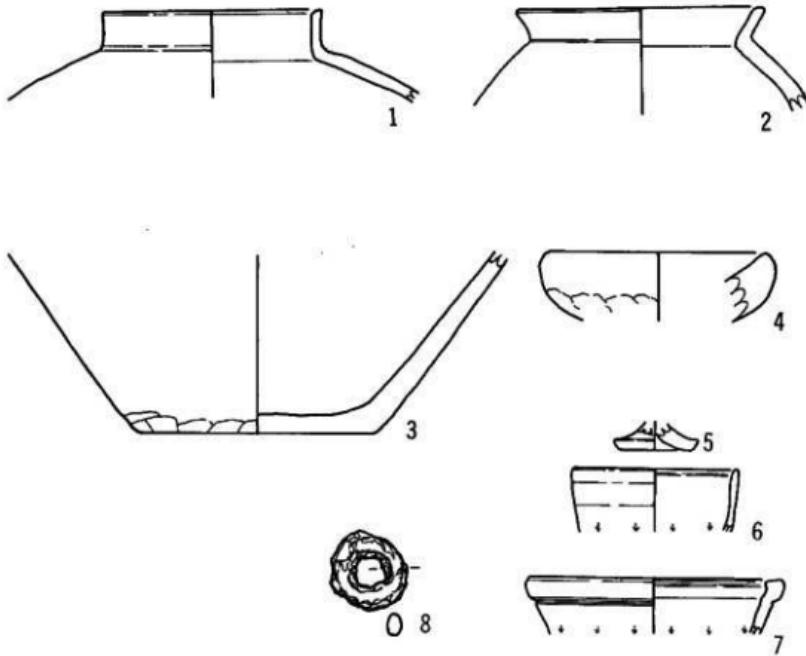
第39図 A地区出土遺物03



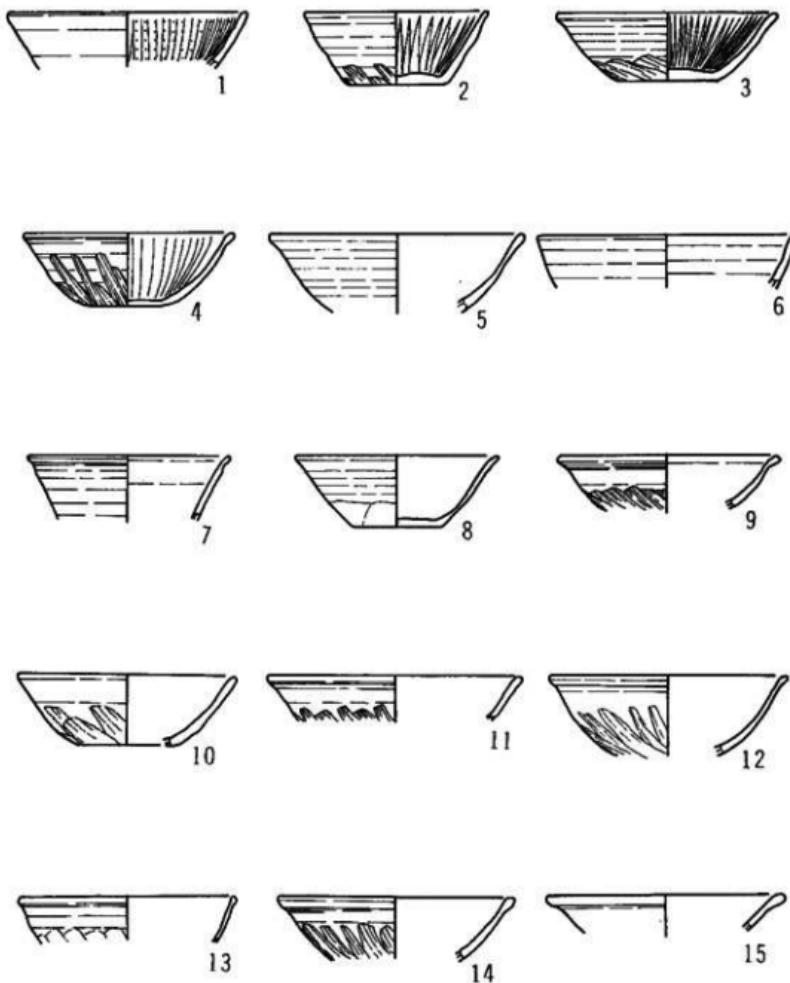
第40図 A地区出土遺物04



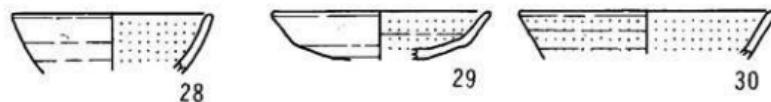
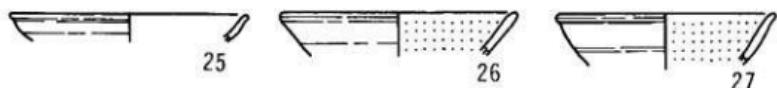
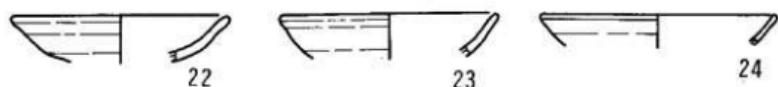
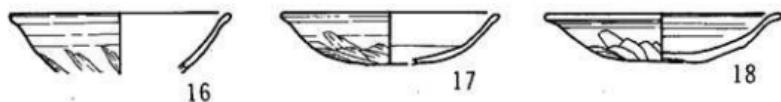
第41図 A地区出土遺物15



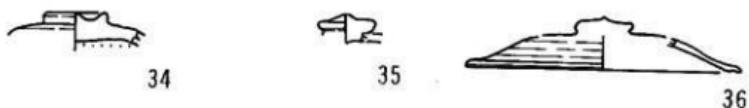
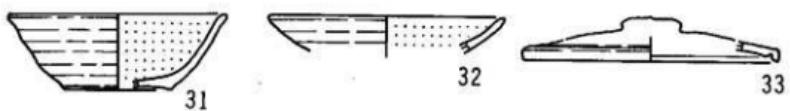
第42図 A地区出土遺物(16)



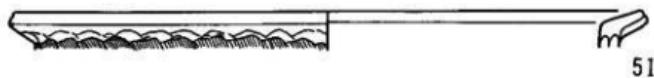
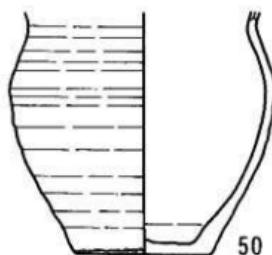
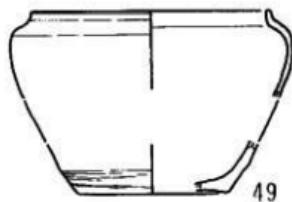
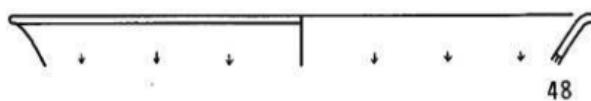
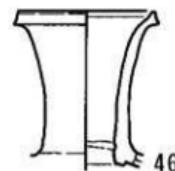
第43図 B 地区出土遺物(1)



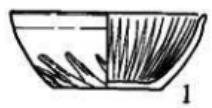
第44図 B地区出土遺物(2)



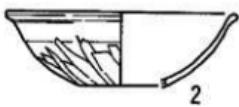
第45図 B地区出土遺物(3)



第46図 B地区出土遺物(4)



1



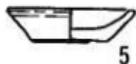
2



3



4



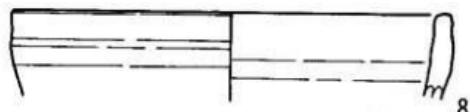
5



6



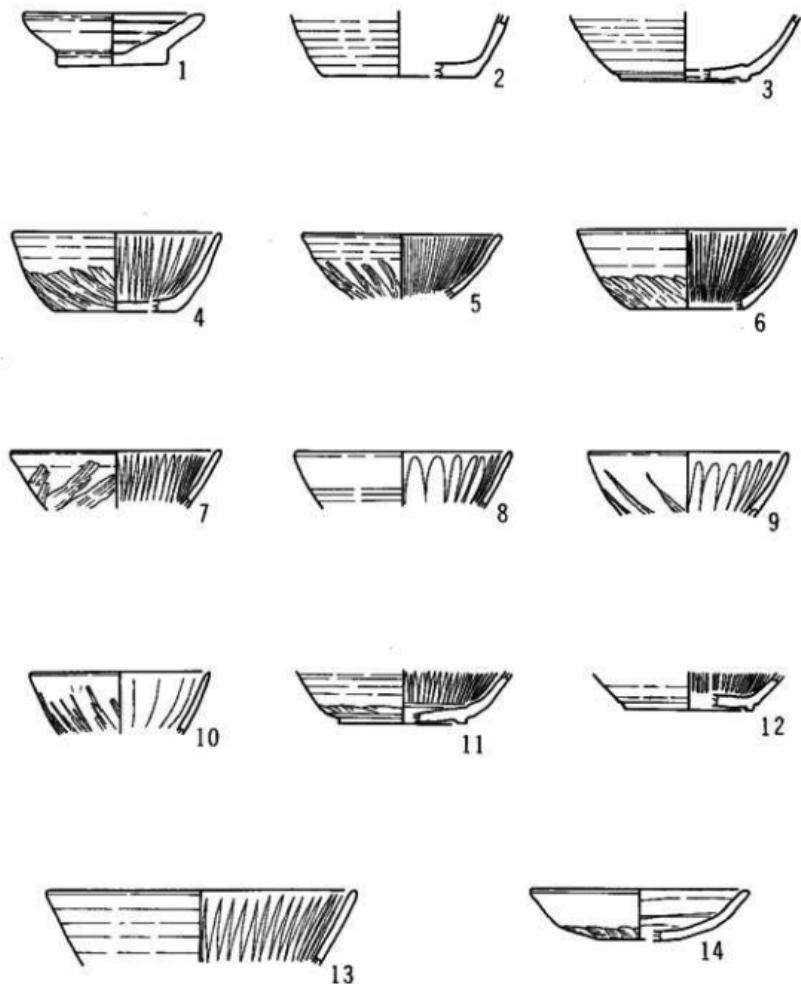
7



8

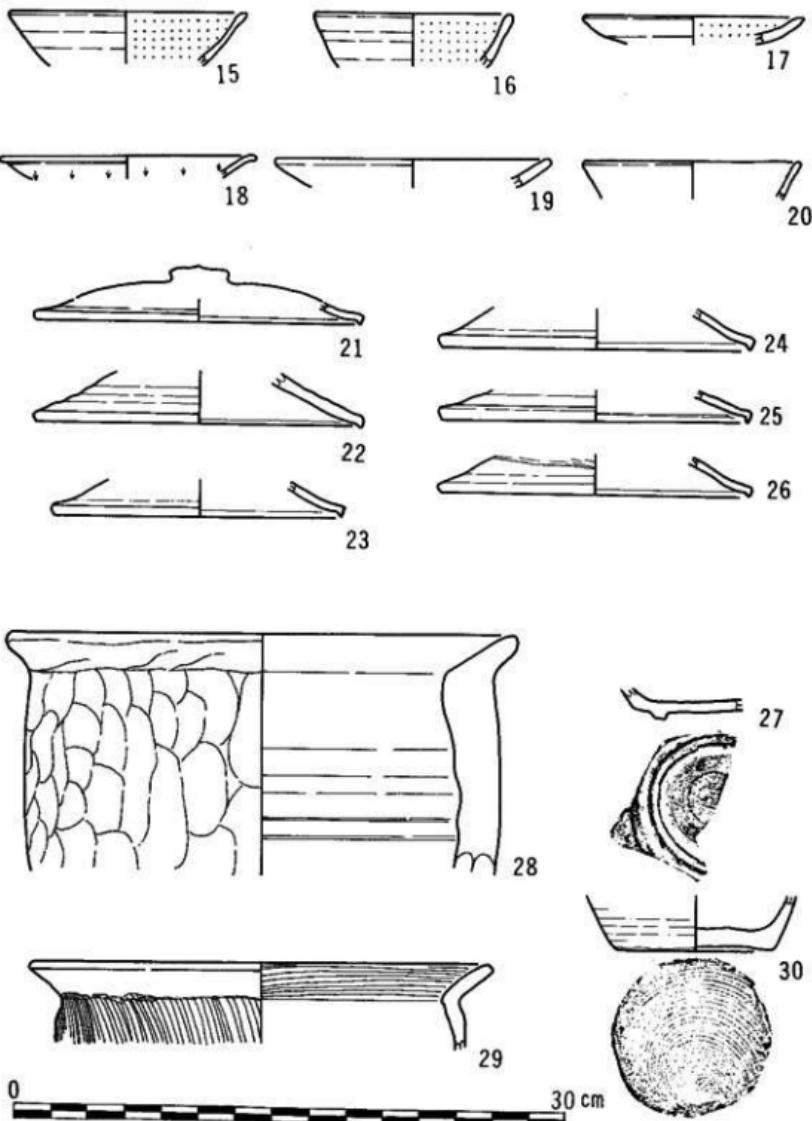


第47図 C地区1号住居址出土遺物

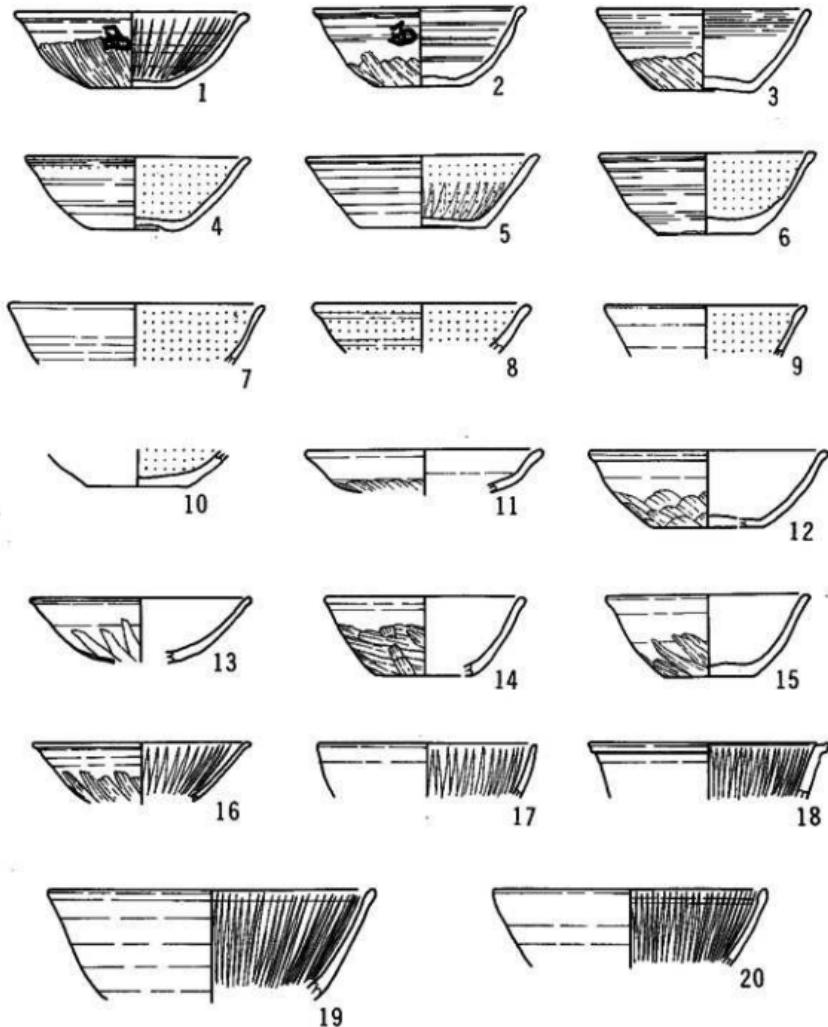


0 30 cm

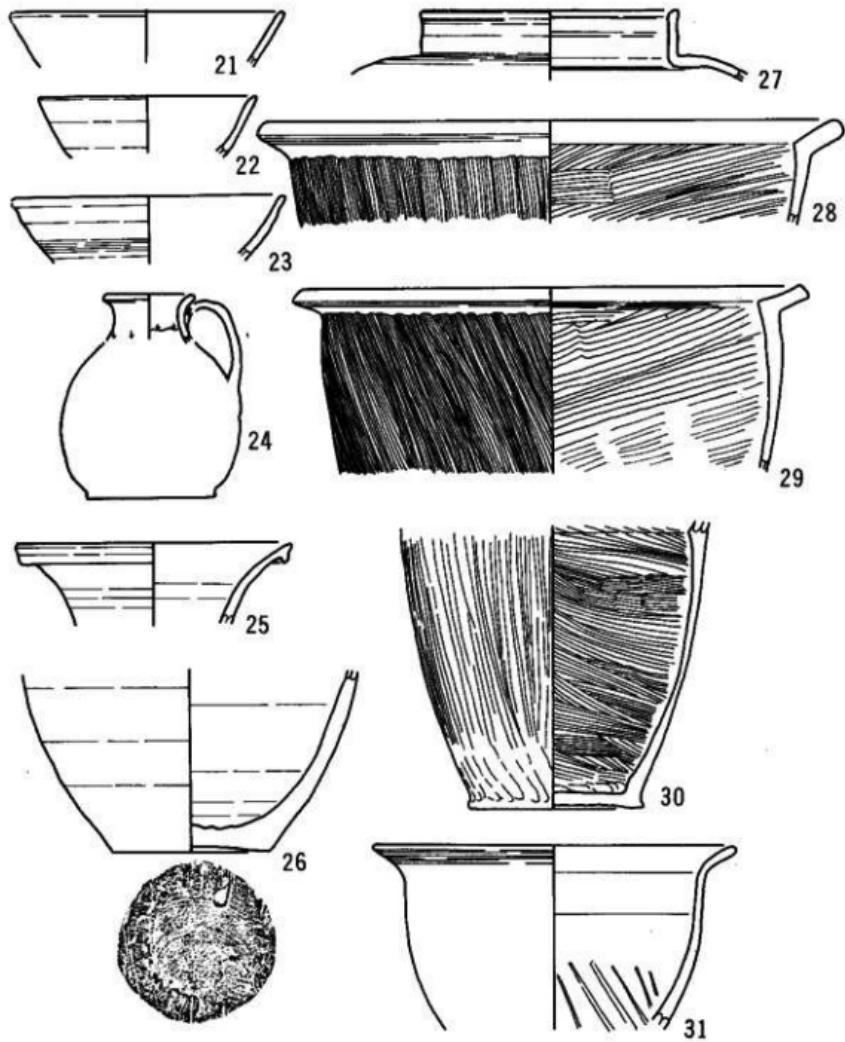
第48图 C地区2号住居址出土遗物(1)



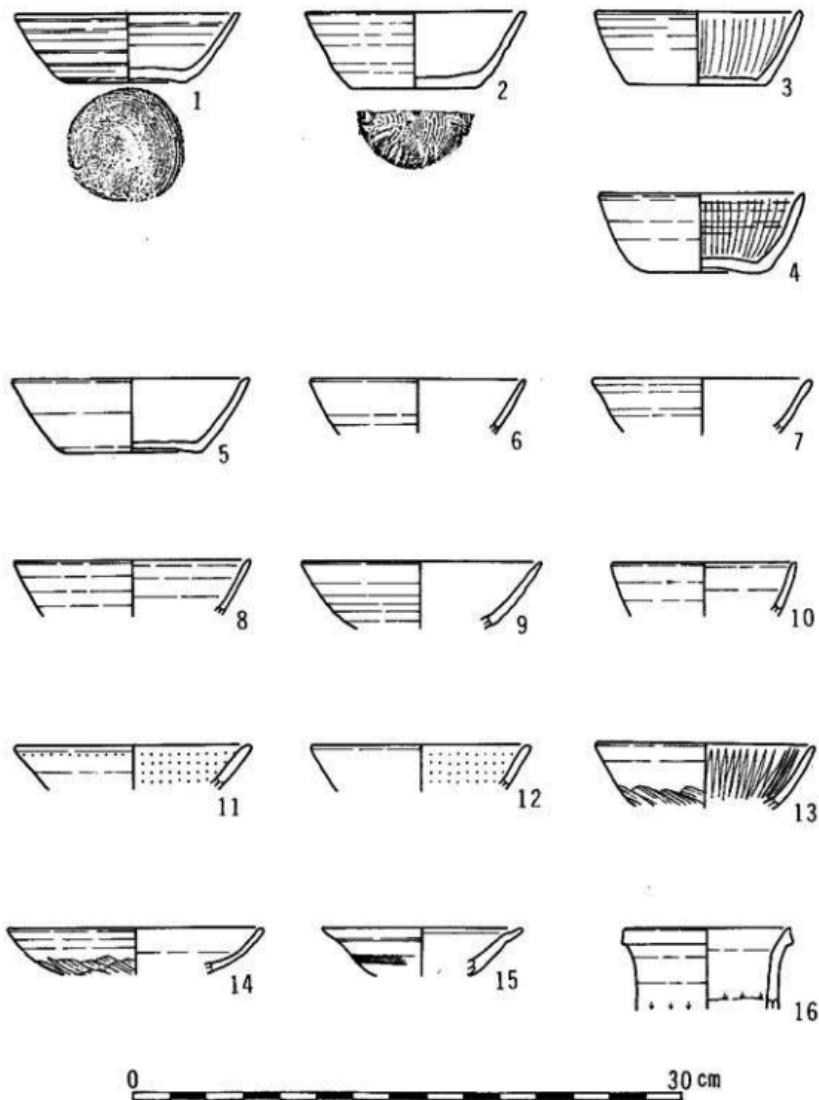
第49図 C地区2号住居址出土遺物(2)



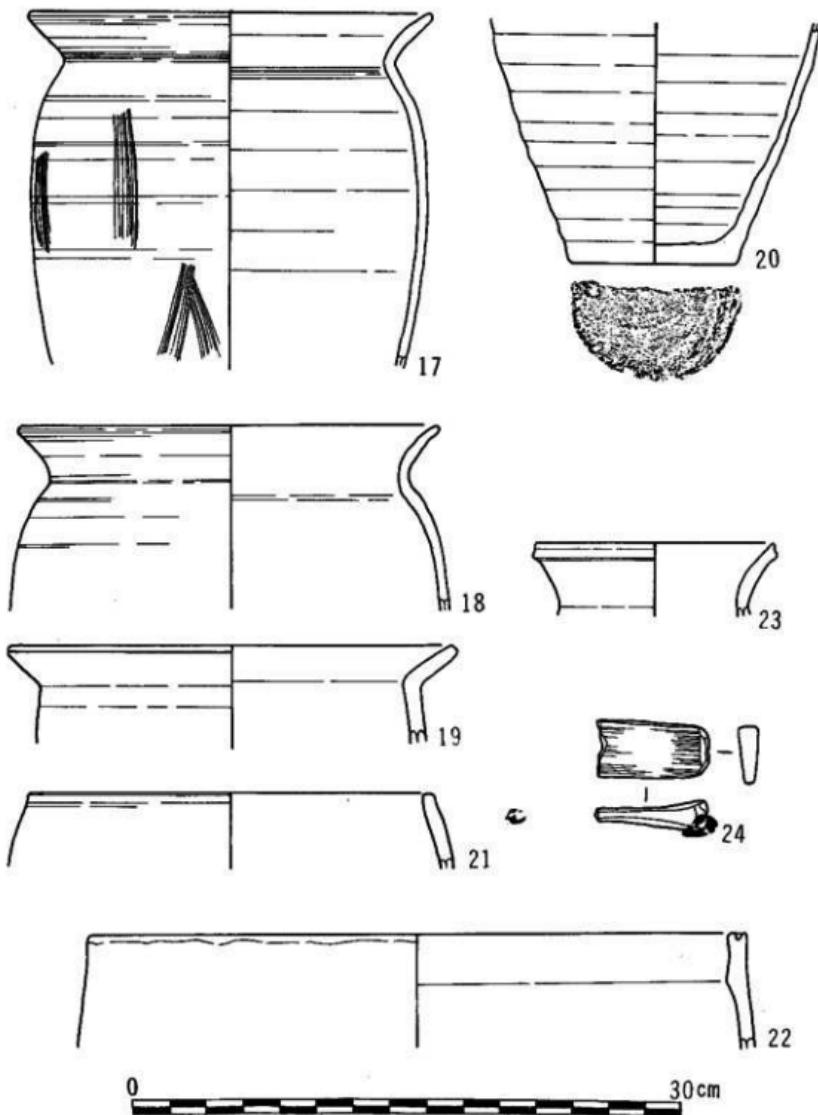
第50図 C地区3号住居址出土遺物(1)



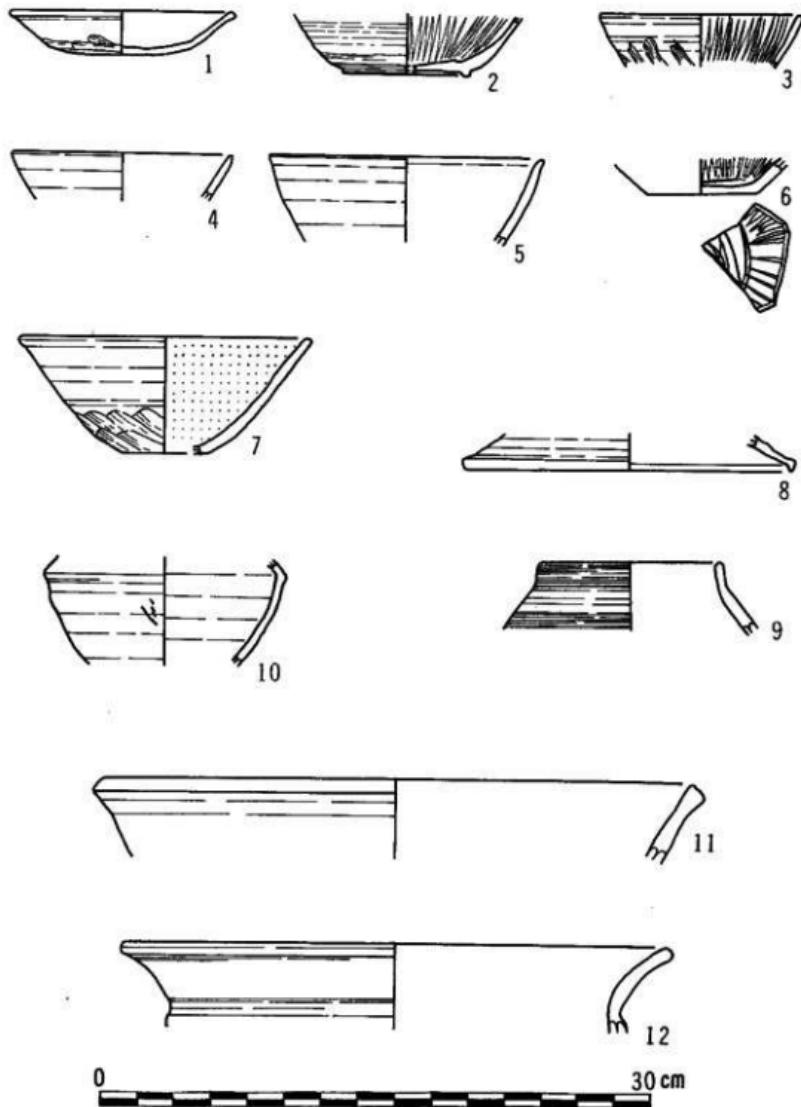
第51図 C地区3号住居址出土遺物(2)



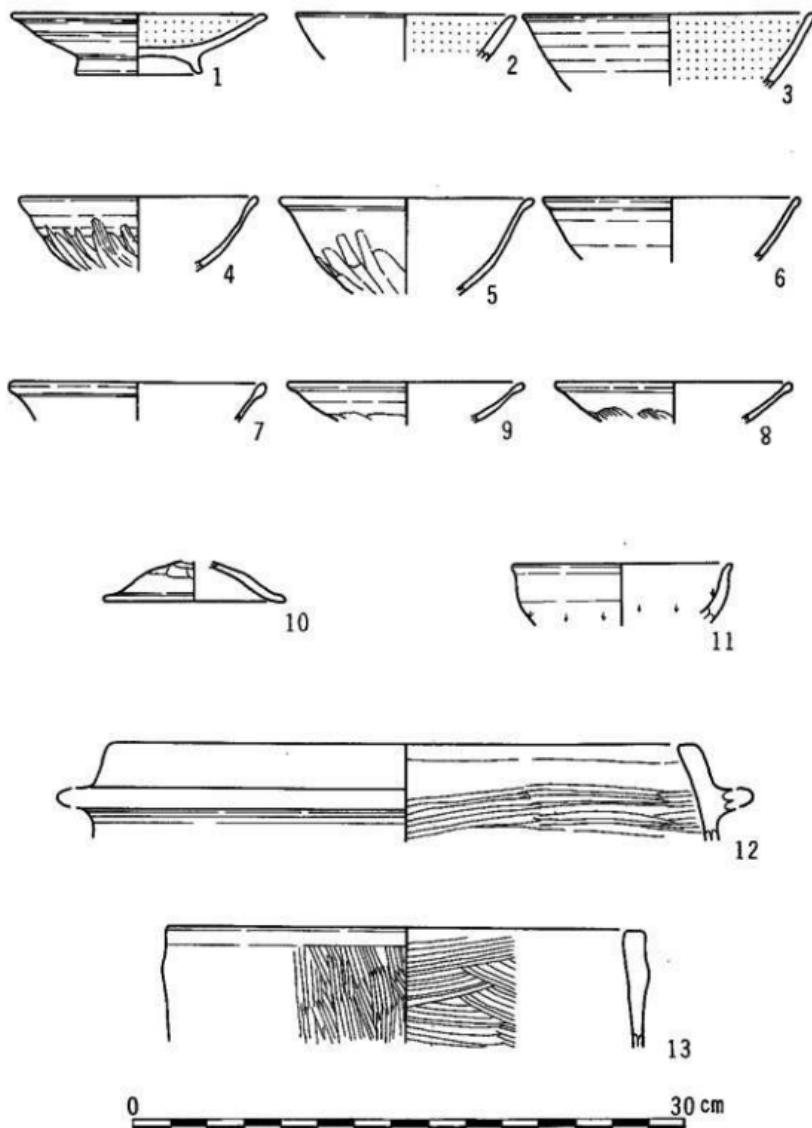
第52図 C地区4号住居址出土遺物(1)



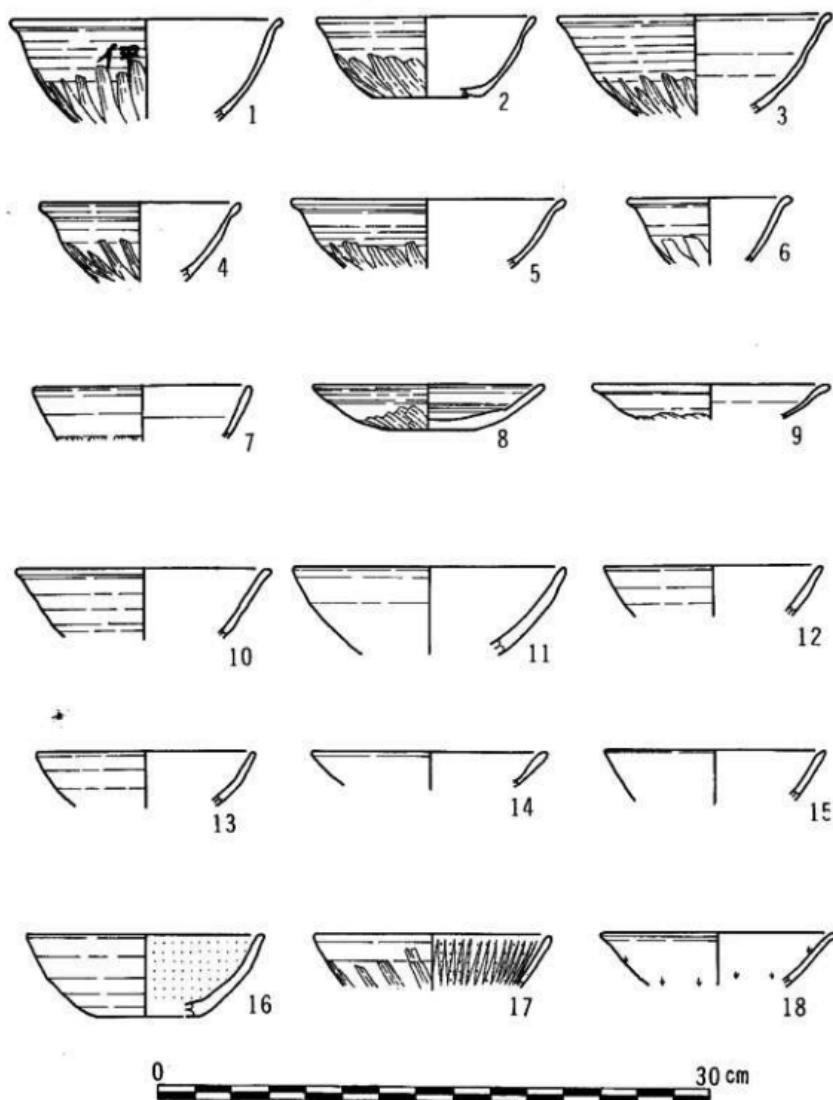
第53図 C地区4号住居址出土遺物(2)



第54図 C地区5号住居出土遺物



第55図 C地区 6号住居址出土遺物



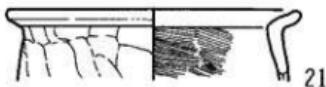
第56図 C地区 7号住居址出土遺物



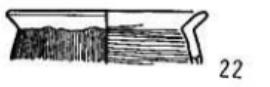
19



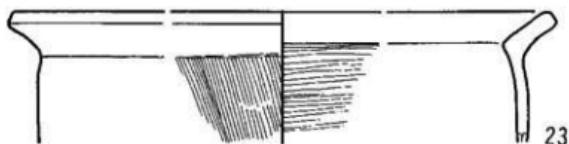
20



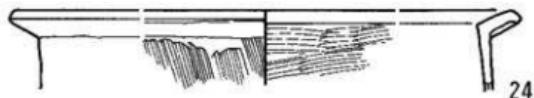
21



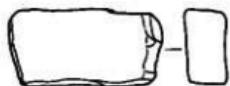
22



23



24



25



26

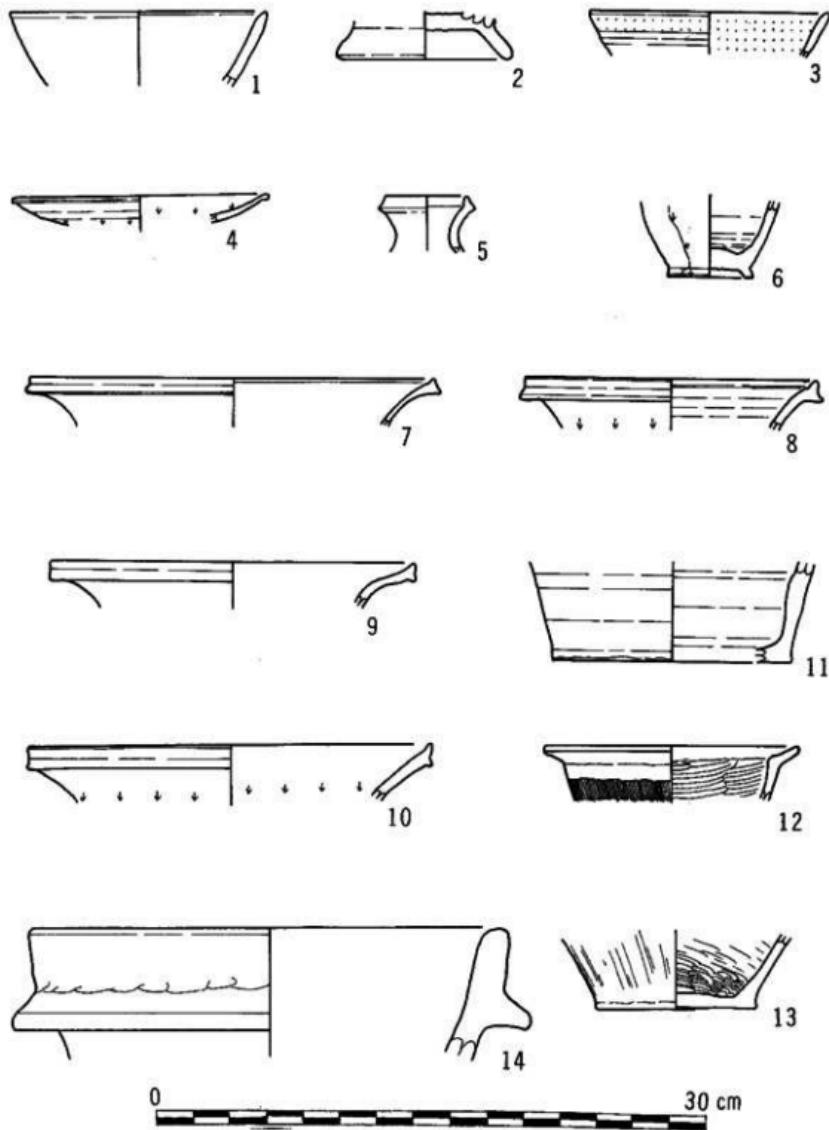


0

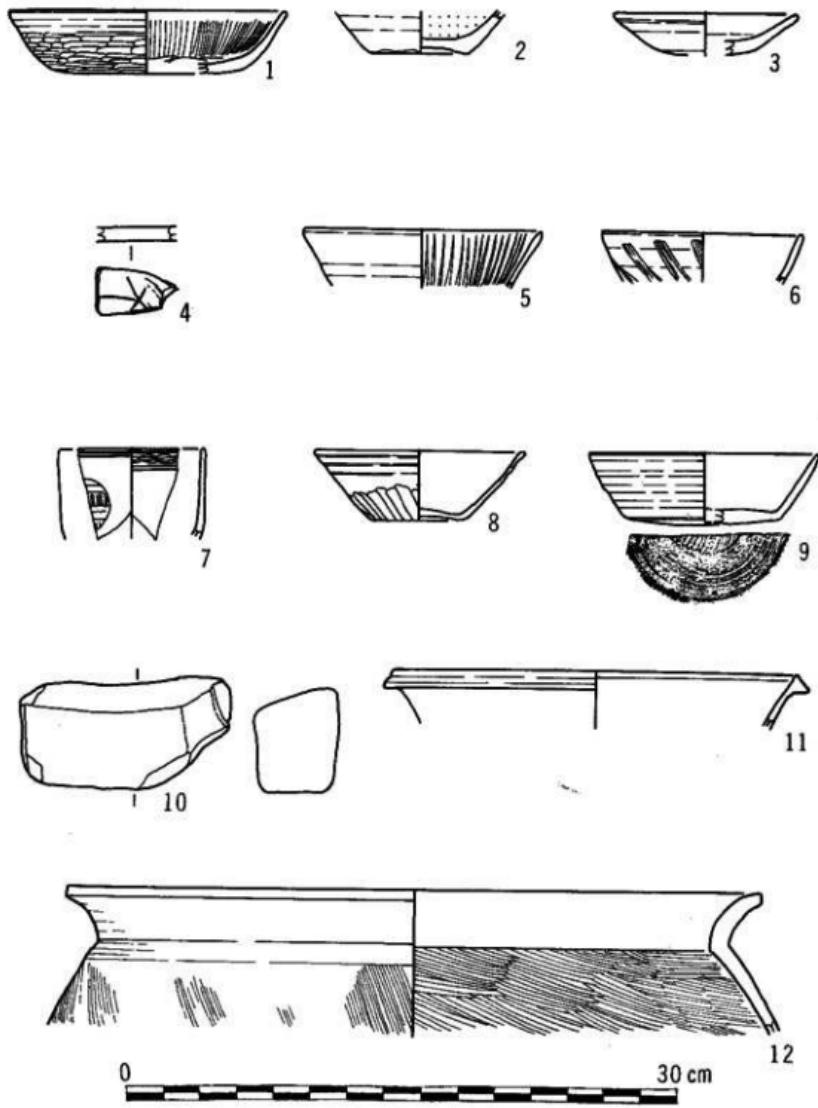
30 cm

27

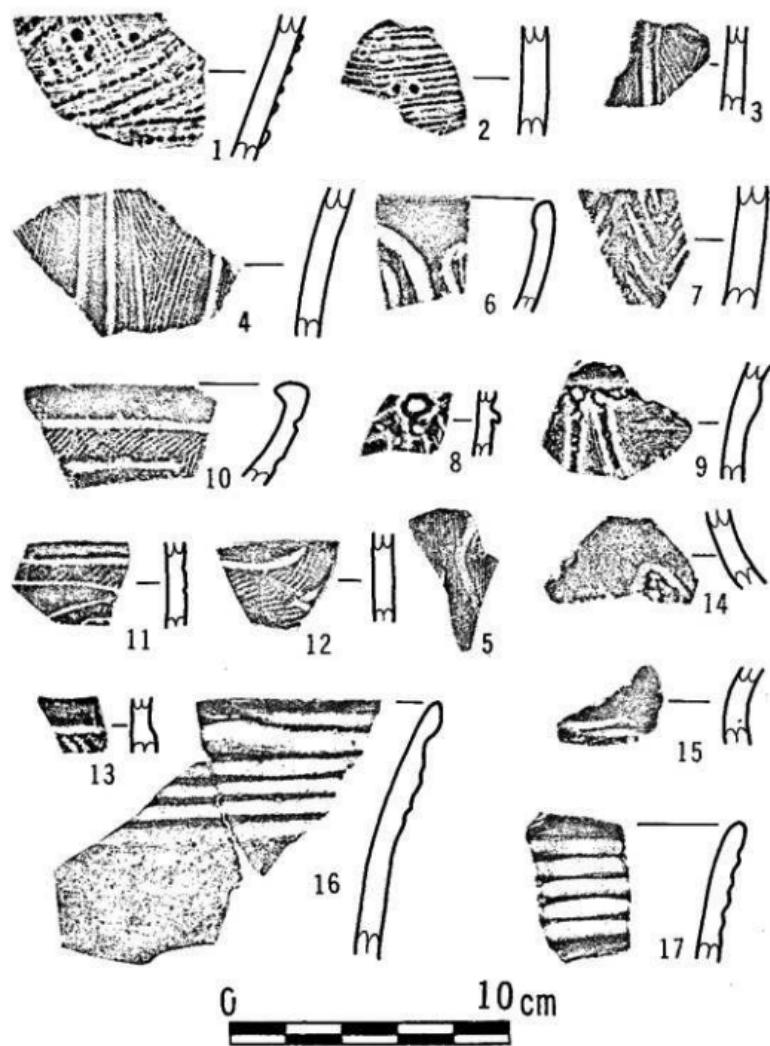
第57図 C地区 7号住居址出土遺物(2) (19~25)
8号住居址出土遺物 (26, 27)



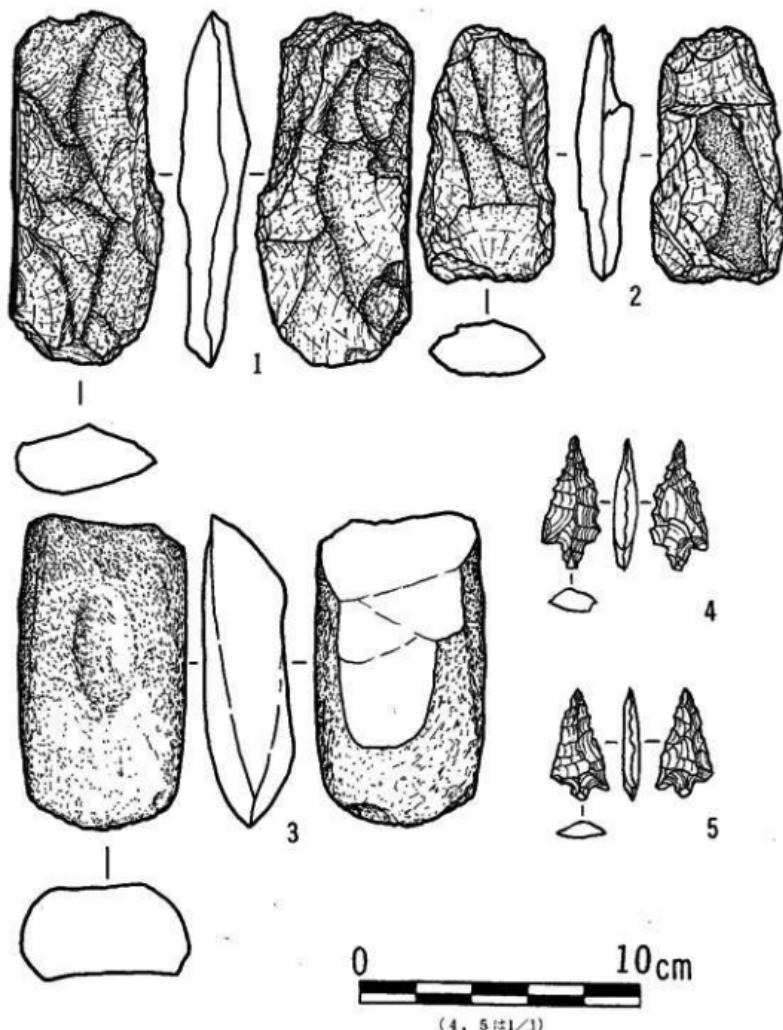
第58図 C地区9号住居址出土遺物



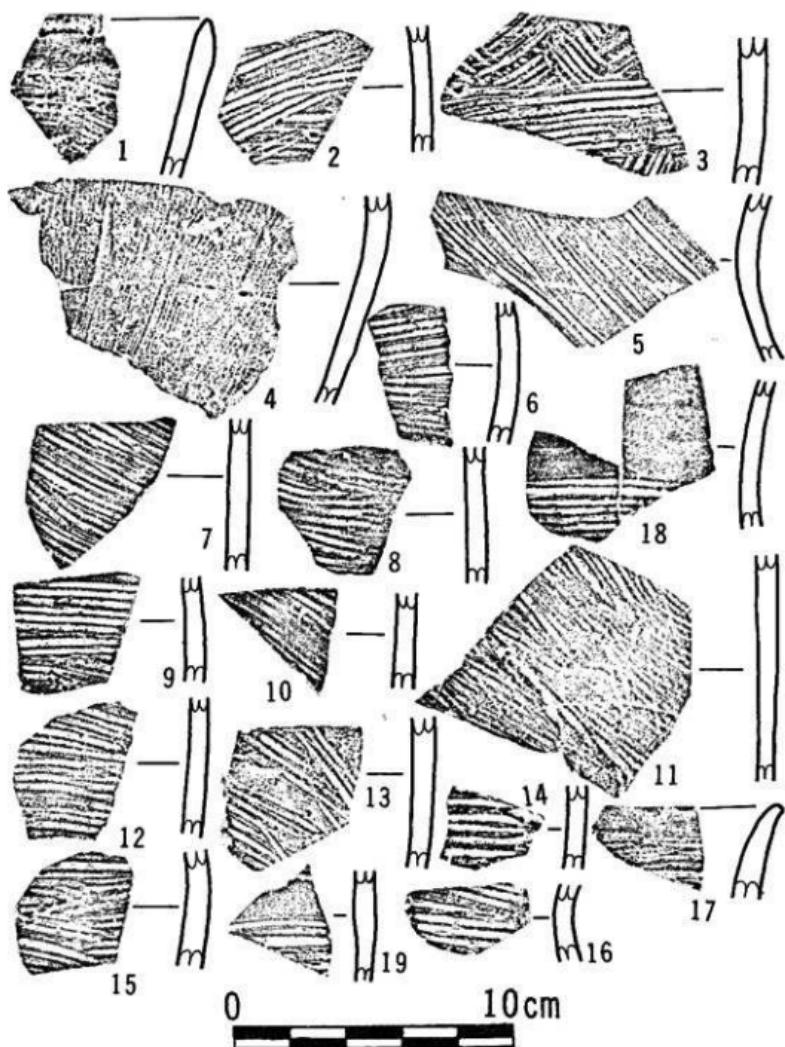
第59図 C地区G rid 他出土遺物



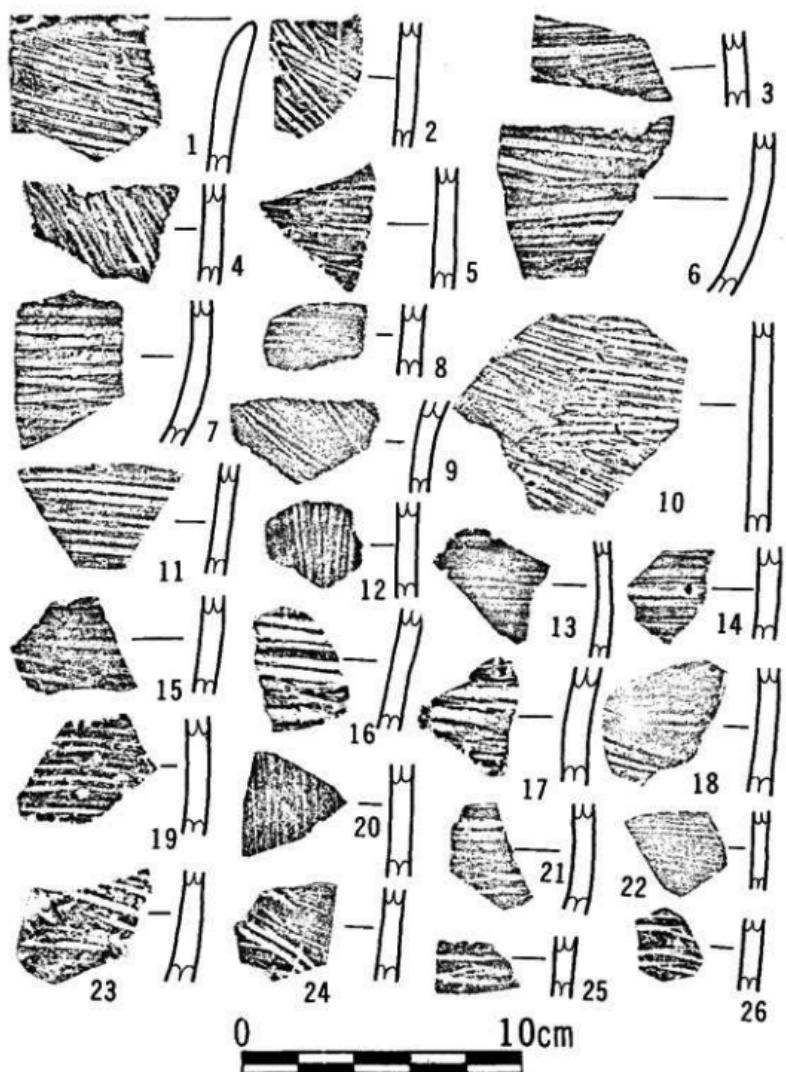
第60図 繩文時代遺物(1)



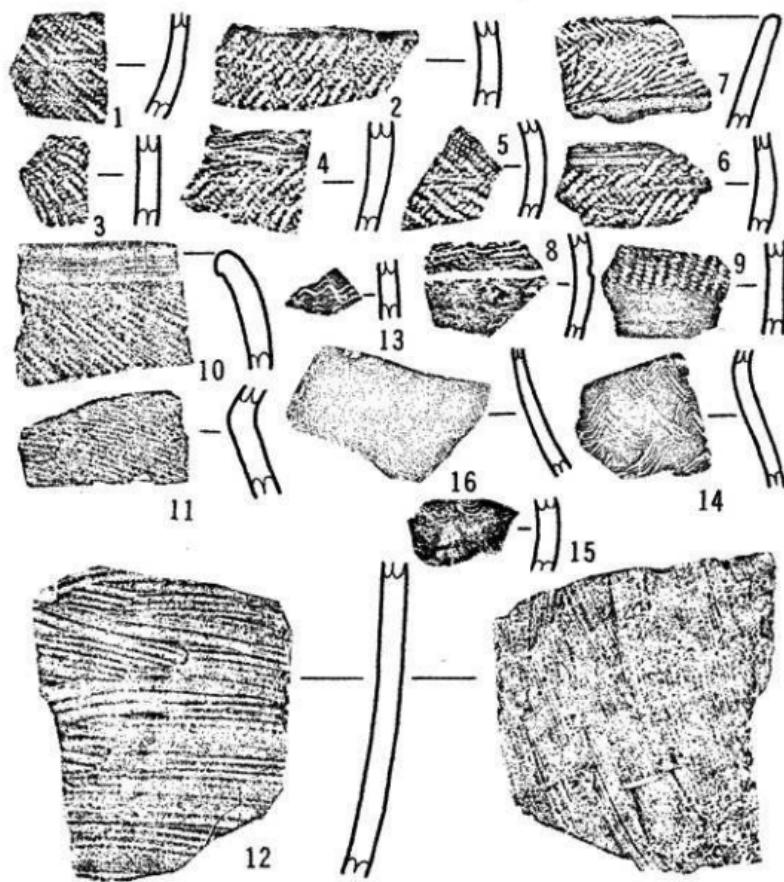
第61図 繩文時代遺物(2)



第62図 弥生時代遺物(1)

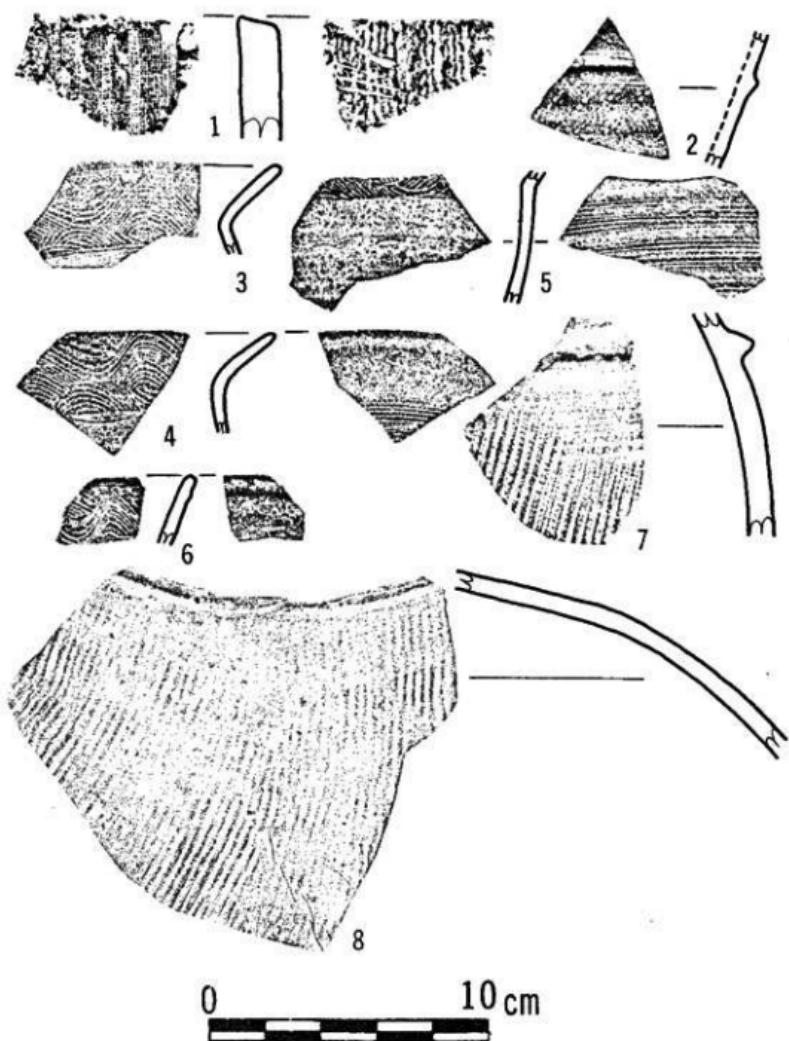


第63図 弥生時代遺物(2)

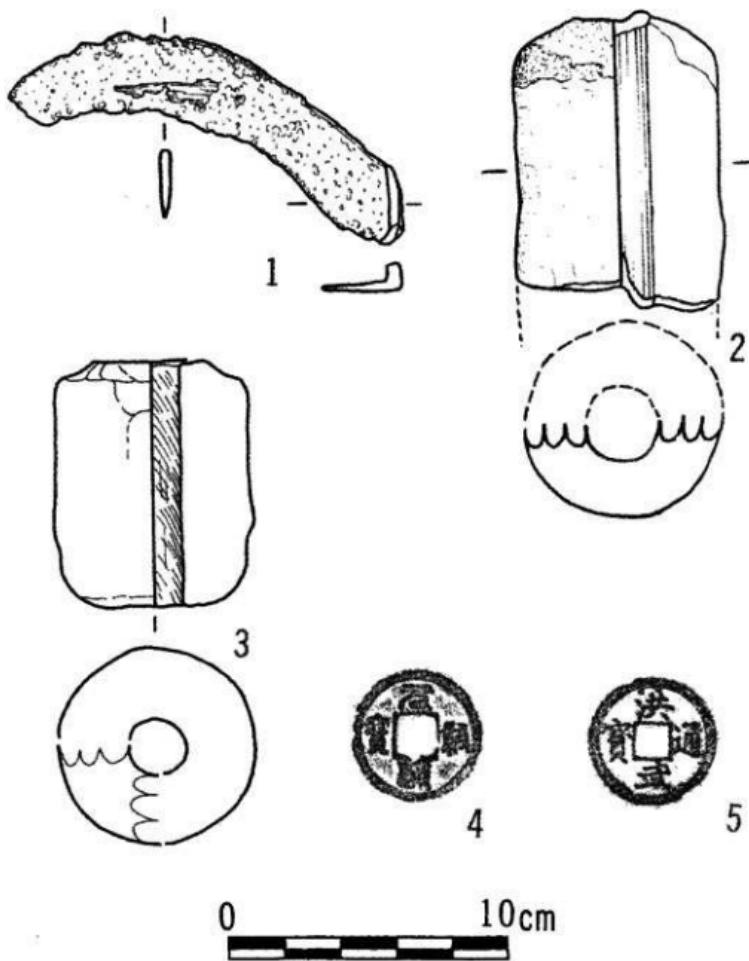


0 10cm

第64図 弥生時代遺物(3)



第65図 平安時代遺物(1)



第66図 平安時代遺物(2)

以上のもの他に拓本で示してある資料中第65図3～6のII縁内側に波状櫛目文をもつ土師器焼片がある。器壁が薄く、外面にロクロ回転中の刷毛目が横方向に施されるもので類例を見ない。

縁釉陶器（図版16）

今回の調査に於て縁釉陶器片は全部で17片出土している。破片数ではA地区が9点、B地区5点、C地区3点であり、A地区は面積的にも広いが、C地区と比較してA、B地区は質量ともに優れていると思われる。この原因としてA地区的列石遺構をあげることができるであろう。この列石及び配石址が建物址と考えると、生活から離れ祭祀と結びついたこれらの縁釉陶器がA、B地区に多い理由として理解できるものであろう。

この破片で器種は主に皿が多く高台があるもの2、底部蔚土が段状に厚くなっているのが2片見られる。その他に唾壺片1、小型壺形と思われる破片の頭部に直径3.5mm位の穴があけられているもの1片がある。釉は濃緑色、淡緑色、黄土色等があり、胎土は軟陶のもの16條岡系1点で、軟陶は鳴海窯系のものであろう。特筆すべきは陰刻文片が5片ある。B B 1から出土した稚拙なものを除いて、他は流麗な刻線で花文(?)が描かれている。これら縁釉陶器片は略10世紀末～11世紀に位置付けられるであろう。

彩色土師器（図版17）

総数5点でA地区4点C地区1点とA地区が多い。A地区B10、H7グリッド出土片は外表面をヘラ磨して丹彩色され、A 5は高杯脚片でヘラ磨はされていないが内外面赤色塗彩される。C地区D3出土の1片は表面だけ赤色塗彩され、高杯脚部裙片と思われる。本県での平安期の出土例は今までになく、出土層も明確ではないので時期が不明であるので、今後の出土例をまちたい。

(末木)

器物番号	出土地点	出土状況	種類	器形	法身cm			整 形		
					口径	器高	底径	口 檻	側 部	
27-1	A J12	集積中	土師器	杯	15			直立	④ロクロ横なび	④ロ横。ヘラ暗
2	AA' 7	集積中	*	*	14.2			外反やや玉縁	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
3	AA' 5	集積中	*	*	12.2			外傾	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
4	AG 4		*	皿	11			外傾	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
5	A I 8		*	杯	11			外傾	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
6	AA' 5	集積中	*	*	15.2			外反玉縁	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
7	AE 8		*	*	12.2			外傾	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
8	AA' 7	集積中	*	*	12	4	5.6	外反	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
9	AA' 7	*	*	*	12	4.5	5.2	外傾やや玉縁	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
10	AA' 7	*	*	*	12	4	5.6	やや外反	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
11	AA' 5	*	*	*	12.1			外傾玉縁	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
12	AA' 5	*	*	*	11			外傾玉縁	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
13	AA' 5	*	*	*	13.2	5.2	5.6	やや外反	ロ横。ヘラ削	ロ横。ヘラ暗
28-1	A H 2		土師器	杯	12	4.2	6	外傾尖唇	横ナギ、刷毛内、へうなど	刷毛口
2	A I 15		*	*	11	4	5	外傾尖唇	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
3	AA 12		*	*	11			外傾尖唇	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
4	AC 5		*	*	14			外傾	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
5	A 1列石	1号列石中	*	*	11.2			外傾	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
6	AA' 6-5	集積中	*	*	11	4.4	4.8	外傾やや玉縁	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
7	AA' 7	*	*	*	12.2			外反やや玉縁	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
8	AA' 5	*	*	*	14			外傾	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
9	AA' 5	*	*	*	12.2			外傾	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
10	AA' 7	*	*	*	11.2			外傾	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
11	AA' 6	*	*	*	12			外反やや玉縁	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
12	A表採		*	*	11			外傾	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
13	AH1-P1		*	*	11.4	4.2	4.5	外反やや玉縁	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
14	AA' 5	集積中	*	*	15	5.5	5.4	外傾	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
15	A I 10		*	*			4		ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
29-1	A表採		土師器	杯	13			外反やや玉縁	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
2	AA' 5	集積中	*	*	12			外反やや玉縁	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
3	AA' 5	*	*	*	12			外反やや玉縁	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
4	AA' 7	*	*	*	12			外傾やや玉縁	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
5	AA' 7	*	*	皿	13			外反玉縁	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ
6	AA' 7	*	*	杯	12			外反	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナギ

方 法		胎 土	燒 成	色 四		備 考
底 部				外	内	
②	②	粒子こまかい	良 好	赤褐色	赤褐色	放射状暗文
		#	#	黄褐色	黄褐色	#
		#	#	赤褐色	赤褐色	#
		#	#	#	#	墨青「刀」か。花青状暗文
		#	#	#	#	放射状暗文
		#	#	#	#	花青状暗文
		#	#	#	#	#
	ヘラ削り	#	#	#	#	#
	糸切り	#	#	#	#	#
		#	#	#	#	#
		#	#	#	#	#
		#	#	#	#	#
横ナデ、暗文	糸切→ヘラ削	#	#	#	#	#
	ヘラなでか	やや荒い	良 好	褐色	褐色	ロ様ハケ目模
横ナデ	糸切り	こまかい	良 好	赤褐色	赤褐色	
		やや荒い	#	#	#	
		こまかい	#	黄褐色	黄褐色	
		#	#	赤褐色	赤褐色	
横ナデ	ヘラ削り	#	#	#	#	
		#	#	#	#	
		#	#	#	#	
		#	#	#	#	
		#	#	#	#	
		#	#	#	#	
横ナデ	糸切→ヘラ削	#	#	#	#	1号列石と2号列石の接点中出土
横ナデ	ヘラ削	やや荒い	やや柔らかい	黄褐色	黄褐色	
横ナデ	ヘラ削	#	#	#	#	
		粒子こまかい	良 好	赤褐色	赤褐色	
		#	#	#	#	
		#	#	#	#	
		#	#	#	#	
		#	#	#	#	

調査番号	出土地点	出土状況	種類	器形	法量			整 形	
					口径	器高	底径	口縁	剝 部
29-7	AA'5	集積中	土師器	杯	12.2			外縁	④ロ横ヘラ削 ⑤クロ横ナデ
8	AA'5	"	"	"	14.2			外反	ロ横ヘラ削 ロクロ横ナデ
9	AA'7	"	"	"	13			外反玉縁	ロ横ヘラ削 ロクロ横ナデ
10	AA5		"	"	16			外縁	モラモラして 整 形 不明 崩毛目若干
11	AA'5	集積中	"	"	12			外縁	ロ横ナデ ロ横ナデ
12	AB7		"	皿	12			外縁	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
13	AA'7	集積中	"	杯	12			外縁	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
14	AH2		"	"	11			外縁	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
15	AA'7	集積中	"	"	13.2			外縁	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
30-1	AA'7	集積中	土師器	杯	12			外反やや玉縁	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
2	AJ10		"	"	14			外反	ロクロ横ナデ ヘラ横磨き
3	AC5		"	"	12			外反やや玉縁	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
4	AE8		"	"	15.2			外反玉縁	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
5	AA'7	集積中	"	"	12			外反玉縁	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
6	AA'7	"	"	"	12			外反やや玉縁	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
7	AA'7	"	"	"	12			外反	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
8	AA'5	"	"	"	14			外反玉縁	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
9	AA'6-P2	"	"	皿	13.2			外反玉縁	ロ横、ヘラ削 ロクロ横ナデ
10	AA'6-P3	"	"	"	13			外反玉縁	ロ横、ヘラ削 ロクロ横ナデ
11	AA'7	"	"	"	12			外縁	ロ横、ヘラ削 ロクロ横ナデ
12	AJ8		"	"	13	2.5	5.4	外反	ロ横、ヘラ削 ロクロ横ナデ
13	AA'5	集積中	"	"	13			外反やや玉縁	ロ横、ヘラ削 ロクロ横ナデ
14	AA'7	"	"	"	13.2	2.4	4.6	外反玉縁	ロ横、ヘラ削 ロクロ横ナデ
15	AF17		"	"	13	2.8	5	外縁	ロ横、ヘラ削 ロクロ横ナデ
16	AA'6	集積中	"	"	13			外縁	ロ横、ヘラ削 ロクロ横ナデ
17	AA'5	"	"	"	12			外反	ロ横、ヘラ削 ロクロ横ナデ
18	AA'6	"	"	"	13.2	2.3	8	外反	ロ横 ヘラみがき
31-1	AA'5	集積中	土師器	杯			6.5		ロ横、ヘラナデ ロ横ヘラ暗文
2	AJ8		"	"			6		ヘラ横削リ ロ横ヘラ暗文
3	AA'9	集積中	"	"	16			外縁	ロクロ横ナデ ヘラ磨ヘラ暗文
4	AH12		"	"	12.2			外縁	ロクロ横ナデ ヘラ磨ヘラ暗文
5	AA'7	集積中	"	"	14			外反玉縁	ロ横、ヘラ削 ロ横ヘラ暗文
6	AA'7	"	"	"	12			外縁	ロクロ横ナデ ヘラ磨ヘラ文
7	AA'6	"	"	"	15			外反玉縁	ロ横、ヘラ削 ロ横ヘラ暗文

方 法		胎 土	燒 成	色 調		備 考
底 部				外	内	
Ⓐ	Ⓐ	粒子こまかい	良 好	赤褐色	赤褐色	
		〃	〃	〃	〃	
		〃	〃	〃	〃	
		やや荒い	良 好	黄褐色	黄褐色	
		ややザラザラしている	やわらかい	赤褐色	赤褐色	
		粒子こまかい	良 好	黄褐色	黄褐色	
		〃	〃	赤褐色	赤褐色	
		〃	〃	〃	〃	
		〃	〃	暗褐色	暗褐色	
		粒子こまかい	良 好	黄褐色	黄褐色	
		〃	〃	赤褐色	赤褐色	
		〃	〃	〃	〃	墨書「已」か
		〃	〃	黄褐色	黄褐色	
		〃	〃	〃	〃	
		〃	〃	赤褐色	赤褐色	墨書「九」か
		〃	〃	褐色	褐色	口縁部にクール付葉
		〃	〃	赤褐色	赤褐色	
		〃	〃	〃	〃	
		〃	〃	黄褐色	黄褐色	
ロ横ヘリ ラセン暗文	ヘラケズリ	〃	〃	赤褐色	赤褐色	
		〃	〃	〃	〃	墨書「市」か
ロ横ナデ	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
		〃	〃	黄褐色	黄褐色	
		〃	〃	赤褐色	赤褐色	
		〃	〃	〃	〃	口縁部が極端に外反屈曲する
ラセン暗文	ヘラケズリ	粒子こまかい	良 好	赤褐色	黑色	放射状、ラセン状暗文
ラセン暗文	ヘラ円ケズリ	〃	〃	赤褐色	黑色	放射状、ラセン状暗文
		〃	〃	黄褐色	〃	花卉状暗文
		〃	〃	褐色	〃	花卉状暗文
		〃	〃	黄褐色	〃	花卉状暗文
		〃	〃	赤褐色	〃	放射状暗文
		〃	〃	〃	〃	花卉状暗文

同番号	出土地点	出土状況	種類	器形	法量cm			型 形	
					口径	器高	底径	口縁	脚 部
31-8	A H12		土師器	浅鉢	20			外反	④ロクロ横ナデ ⑤ヘラ磨ヘラ縞文
9	A 葵様		"	"	21			外頬	ロクロ横ナデ ヘラ横みがき
10	A H12		"	杯	17			外反やや玉縁	ロクロ横ナデ ヘラ磨ヘラ縞文
11	A A' 5	集積中	"	"	16.2			外反玉縁	ロクロ横ナデ ロ横ヘラ縞文
32-1	A J10		土師器	杯	14	4.3	5.5	外頬	ロクロ横ナデ ヘラみがき
2	A 葵様		"	"	18	6.4	7	外反	ロ横、ヘラ削 ロクロ横ナデ
3	A A' 5	集積中	"	"	14			外頬	ロクロ横ナデ ヘラみがき
4	A H12		"	"	17			外頬	ロクロ横ナデ ヘラみがき
5	A A' 7	集積中	"	"	14			外頬	ロクロ横ナデ ヘラみがき
6	A G 2		"	"	13			外頬	ロクロ横ナデ ロ横ヘラ磨き
7	A A' 5	集積中	"	"	14			外反	ロクロ横ナデ ヘラ横磨
8	A A' 5	"	"	"	16			外反やや玉縁	ロクロ横ナデ ヘラ磨
9	A A' 5	"	"	"	15			外頬	ロクロ横ナデ ヘラ横磨
10	A A' 6	"	"	"	15.2			外反やや玉縁	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
11	A A' 5	"	"	浅鉢	20.2			外頬	ロクロ横ナデ ヘラ磨
12	A A' 7	"	"	杯	19			外頬	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
33-1	A B 4		土師器	杯	12.2			外頬	ロクロ横ナデ ヘラ磨き
2	A 葵様		"	"	12			外反	ロクロ横ナデ ヘラ磨
3	A H1		"	"	13			外頬	ロクロ横ナデ ヘラ横磨き
4	A A' 7	集積中	"	"	15.2			外反	ロクロ横ナデ ヘラ横磨き
5	A A' 7	"	"	"	13			外頬	ロクロ横ナデ ヘラ磨き
6	A A' 5	"	"	"	14.2			外頬	ロクロ横ナデ ヘラ磨き
7	A A' 7	"	"	"	14.4			外頬	ロ横ス付着 ヘラ磨き
8	A E 12		"	"			5		ロクロ横ナデ ヘラ磨き
9	A A' 7	集積中	"	高台付杯		7.2			ロクロ横ナデ ヘラ磨き
10	A A 4		"	"(組か)		6			ロクロ横ナデ ヘラ磨き
11	A A' 7	集積中	"	皿	12.6			外反	ロクロ横ナデ ヘラ磨き
12	A H12P2		"	高台付皿	13	3	7	外反	ロクロ横ナデ ヘラ磨き
13	A A' 7	集積中	"	皿	13			外頬	ロクロ横ナデ ヘラ横磨き
14	A A' 7	"	"	皿(蓋か)	14			外反	ロクロ横ナデ ヘラ磨き
34-1	A B 12		土師器	小形皿	10	2.4	5.5	外頬	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
2	A F 2		"	高台付(杯)		7			ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ
3	A 葵様		"	杯			4.6		ヘラ削り ロクロ横ナデ
4	A E 8		"	皿	14			外頬	ロ横ヘラ削剂 ロクロ横ナデ

方 法		粘 土	燒 成	色 調		備 考
底 部				外	内	
(内)	(内)	粒子こまかい	良 好	赤褐色	黒	ラセン暗文
		粒子こまかい	良 好	褐色	〃	
		〃	〃	赤褐色	〃	花状暗文
		〃	〃	黄褐色	〃	〃
	系切り	石英粒を含む	良 好	赤褐色	黒 色	
	ヘラ削り	やや荒い	良 好	〃	〃	
		やや荒い	〃	〃	〃	口縁部一部タール付着
		やや荒い	〃	褐色	〃	
		こまかい	〃	〃	〃	
		やや荒い	〃	赤褐色	〃	
		こまかい	〃	灰褐色	〃	
		〃	〃	黄褐色	〃	
		〃	〃	褐色	〃	
		〃	〃	赤褐色	〃	
		〃	〃	黄褐色	〃	
		柔らかい	赤褐色	〃		
		こまかい	良 好	赤褐色	黒 色	
		あらい	〃	黄褐色	〃	
		こまかい	〃	〃	〃	
		〃	〃	褐色	〃	
		ややあらい	良 好	黄褐色	〃	
		こまかい	良 好	黄褐色	〃	
		ややあらい	〃	赤褐色	〃	外側スス全面に付着
	系切、ヘラ削り	こまかい	〃	褐色	〃	削出高台に近い
	ヘラなで	〃	〃	黄褐色	〃	貼付高台
	系切	やや荒い	〃	暗褐色	〃	〃
		〃	〃	褐色	〃	
ヘラ磨き	系切	〃	柔らかい	黄褐色	〃	貼付高台
		こまかい	良 好	灰褐色	〃	
		〃	〃	赤褐色	〃	杯蓋かもしれない
	系切	ザラザラして荒い	良 好	暗褐色	暗褐色	胎上が厚い
	ロクロ横ナゲ	こまかい	〃	黄褐色	黄褐色	
ロクロ横ナゲ	系切後ヘラ切	〃	〃	赤褐色	赤褐色	
		〃	〃	〃	〃	ヘラ回転切(削り)

国銘番号	出土地点	出土状況	種類	器形	法量cm			整 形		
					口径	器高	底径	口縁	網	部
34-5	A I 8		土師器	瓶	11			外頸	④ロクロ横ナデ	④ロクロ横ナデ
6	A I 8			#	12			外反玉縁	ロ横。ヘラ削	ロクロ横ナデ
7	A H 5			#					ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
8	AA' 5	集積中		#						
	9 A I 8			#	皿	12		外頸	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
10	AA 4			#	皿(杯蓋)	18		外反	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
11	A 表			#	杯蓋		15.2	先端くの字屈曲	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
12	A J 13			#	#		19	先端尖る	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
13	A E 8			#	#				ロクロヘラ削	ロ横ナデ
35-1	AB 3		須恵器	杯蓋			16.6	先端くの字	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
2	AD 8			#	#		16.2	#	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
3	A H 9			#	#		16.4	#	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
4	AA' 9	集積中		#	#		14	#	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
5	A H 12			#	#		17	#	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
6	AA' 5	集積中		#	#		15.8	先端屈曲鋭い	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
7	A K 12			#	#		14	先端くの字	ロ横ヘラ削	ロクロ横ナデ
8	AA' 5	集積中		#	杯	16.4		外頸	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
9	AA 4			#	#	13		#	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
10	AB 7			#	#	10.2		#	#	#
11	AB 7			#	#	10.2		#	#	#
12	AG 2			#	#	12.2		#	#	#
13	AA' 6	集積中		#	#		6.4		#	#
14	A E 8			#	#		6			
36-1	AA' 7	集積中	灰釉陶器	杯(萬古付)	13.5	4.5	5.4	外反	釉台上まで	釉全面
2	AG 6			#	# (〃)	17.5	5.5	8.4	外頸	釉胴中
3	AA' 7P2	集積中		#	# (〃)	13.6	4.6	5.5	外反	#
4	AA' 6			#	杯	19		外反	釉全面	釉全面
5	A1号列石	(1号列石中)		#	#	15.2		外頸	#	釉胴中
6	AF 2			#	#	16.2		外頸	#	釉全面
7	AA' 5	集積中		#	#	16		外反	#	#
8	A H 1			#	#	13		外頸	釉無し	釉粒子状
9	AA' 7	集積中		#	#	14		外反	釉全面	釉全面
10	A H 2			#	#	13		やや外反	釉無し	釉粒子状
11	AA' 6	集積中		#	#	18.2		外反	釉全面	釉全面

方 法		駆 土	焼 成	色 調		備 考
底 部				外	内	
⑨	⑩	こまかい	良 好	黄褐色	黄褐色	
		*	*	赤褐色	赤褐色	
		*	*	褐色	褐色	刻書「ハ」か
ロクロ横ナデ	糸切、ヘラ削	*	*	黄褐色	黄褐色	墨書「中」
		*	*	赤褐色	赤褐色	駆土やや厚い
		*	*	黄褐色	暗褐色	駆土褐色
		*	*	赤褐色	赤褐色	
		*	*	*	*	
	やや荒い	*	*	灰褐色	灰褐色	
	こまかい	良 好	灰黑色	灰黑色		
		*	*	灰色	灰色	
		*	*	*	*	
		*	*	灰黑色	灰黑色	
		*	*	灰青色	灰青色	
		*	*	灰黑色	灰黑色	
		*	*	灰色	灰色	外面上部ヘラ回転削り
		*	*	灰黑色	灰黑色	
		*	*	*	*	
		*	*	*	*	
		*	*	*	*	
		*	*	*	*	
木びき痕	糸切り	*	*	灰色	灰色	
木びき痕 ロクロ	糸切り	*	*	黄灰色	黄灰色	
軸全面	軸なし	灰色こまかい	良 好	灰褐色	灰褐色	内面に重複がある K90期か
軸無し	灰白色 （黒色粒子含む。こまかい縦上）	かたい	白色軸	白色軸	つけがけ軸	D53期か
軸全面	高台軸無	灰白色こまかい	*	灰绿色軸	灰绿色軸	ハケがけ K90期か
		ややザザラして 灰色	かたい	*	*	*
		灰白色こまかい	*	灰白色軸	灰白色軸	つけがけ O53期水田窯か
		灰白粒子こまかい	*	*	*	ハケがけ O53期か
		*	*	*	*	O53期（永田か）
		灰白色粒子こまかい	*	灰白色	灰白色	自然軸状（内） O53期か
		灰白色	*	灰绿色	灰绿色	K90期か
		ややザザラして 灰色	*	灰白色軸	灰绿色	自然軸状（内） O53期か
		灰色	やや柔らかい	白绿色	白绿色	O53期か

図版番号	出土地点	出土状況	種類	器形	法量cm			整 形		
					口径	器高	底径	口縁	肩	部
36-12	A A' 7	集積中	灰釉陶器	杯	15			外反	④軸胴中	内軸全面
37-1	A A' 6	集積中	灰釉陶器	杯	13			外反	軸無	軸無
2	A H 2		"	"	13			外反	軸全面	軸全面
3	A C 11		"	"	13			やや外反	軸胴中	軸口縁
4	A A' 9	集積中	"	"	13			外反	軸無	軸無
5	A H 2		"	"	13			外傾	軸胴中	軸内面全
6	A A' 6	集積中	"	"	14			外反	軸無	"
7	A A' 6	"	"	皿	16.2	3.1	6.8	外反	軸胴下	"
8	A B 12		"	"				7.6	軸無	軸無
9	A G 6		"	"				6	"	"
10	A A' 6 P5	集積中	"	"	16.2	2.9	7.2	外反	軸胴下	軸内面
11	A I 1		"	"			5.5		軸無	軸無
12	A A' 7	集積中	"	"	14.6	2.8	6	外傾	口縁	内面全
13	A B 6		"	"	13			外反	軸胴中	軸剥離
14	A 斧		"	杯	16			外反	軸無	軸無
15	A A 8		"	浅鉢	32			外反	軸全面	軸全面
38-1	A A' 7	集積中	土師器	小型甕	14			外・横ナデ 内・ハケ横	ハケタテ	ハケ横削
2	A A' 5	"	"	"	15			外・横ナデ 内・ハケ横	ハケタテ	ハケ横削
3	A A' 5	"	"	"	10.2			横ナデ	ハケ横ナデ	横ナデ
4	A H 4		"	甕	23.4			外・横ナデ 内・ハケ横	ハケタテ削	ハケ横削
5	A A' 6	集積中	"	小型甕	16.2			内外とも横ナデ	横ナデ	横ナデ
6	A H 5-1		"	甕	24.3			"	"	"
7	A A 2		"	"	24.2			外・横ナデ 内・ハケ横削	ハケタテ削	不明
8	A C 9		"	"	36			外・横ナデ 内・ハケ横削	横ナデ	ハケ削削
39-1	A P 8		土師器	甕	23.2			内・横ナデ	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
2	A A' 6	集積中	"	"	20			ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
3	A H 9		"	羽釜						
4	A F 14		"				40		ハケタテ削	ハケ横削
5	A H 12		"	浅鉢	26			外・横ナデ 内・ハケ横削	"	"
6	A A' 7	集積中	須恵器	甕			40	内外とも横ナデ	板口タタキ目	横ナデ
40-1	A H 4		須恵器	甕	40			折り返し	横ナデ	横ナデ
2	A J 10		"	"	44			"	"	"
3	A G 12		"	"	44			"	"	"
4	A F 3 P1	1号列石中	"	"	34.5				"	"

方 法		胎 七	焼 成	色 調		備 考
底 部				外	内	
◎	◎	灰色こまかい	良 好	灰綠色	灰綠色	ハケがけ K90か
		灰色こまかい	*	灰 色	灰 色	O53か
		灰色きめこまかい	*	透 明 軸	透 明 軸	ハケがけ O53(永田か)
		灰色こまかい	*	灰 色	灰 色	つけがけ O53(永田か)
		灰色ややあらい	*	*	*	軸ほとんどかからぬ O53
		灰色ややあらい	*	灰白色	灰白色	ハケがけ O53(浜北系か)
		*	*	灰綠色	灰綠色	
		灰色こまかい	*	*	*	ハケがけ O53か
	高台(ヘラなし)	灰白色こまかい	*	灰白色	灰白色	O53期か(鉛錠系)
	高台(ヘラなし)	灰白色こまかい	*	*	*	O53期か
	高台	灰色こまかい	*	灰綠色	灰綠色	ハケがけ O53期か
	高台(系切り)	*	*	灰白色	灰白色	O53期(永田か)
	高台(ヘラ円)	灰白色こまかい	*	透 明 軸	透 明 軸	ハケがけ O53期か
		灰白色こまかい	*	灰白色	灰白色	O53期か
		*	*	*	*	軸ほとんど無し O53期か
		灰色こまかい	*	綠 色	綠 色	軸厚い K90期か
		褐色、やや荒い	良 好	褐 色	褐 色	胎上に石英粒子若干含む
		やや荒く雲母なし	*	赤褐色	赤褐色	内面刷毛日は横又は斜め
		粒子やや荒い	*	暗褐色	暗褐色	胎土雲母含まず、ロクロ整形
		雲母を含む シラサギした	良 好	赤褐色	赤褐色	
		粒子こまかい	*	褐 色	褐 色	雲母含まない
		やや荒い	*	赤褐色	赤褐色	*
		荒い	*	赤褐色	赤褐色	金雲母多量に含む
		やや荒い	かたく良好	黒褐色	黒褐色	雲母含まない
		粒子こまかい	*	黄褐色	黄褐色	*
		こまかい	*	褐 色	褐 色	*
			良 好	黄褐色	黄褐色	羽茎のツバ部分のみ横ナデ
	やや厚い	やや荒い	*	赤褐色	赤褐色	雲母混入
		*	*	赤褐色	赤褐色	内面スス付着、金雲母を含む
		こまかい	*	*	*	雲母が酸化皮によって変色したもの
		粒子こまかい	*	灰黑色	灰黑色	
		灰白色こまかい	*	*	*	
		黒褐色こまかい	*	黑 色		内面自然釉(灰白色)がかかるがつやなし
		黒褐色	*	暗褐色	暗褐色	常滑施か

器面番号	出土地点	出土状況	種類	器形	法量cm			整 形		
					口径	器高	底径	口 種	制 部	
43-1	B A 3		上部器	杯	13			外頬	ロクロ横ナデ	ヘラ磨。暗文
2	B D 4		"	"	10	4.2	5.4	外頬	ロ横ヘラ削	ロクロ横暗文
3	B D 4		"	"	12.2	3.7	5.4	やや外反	"	ロクロ暗文横
4	B C 4		"	"	11.6	4	4	外反玉縁	"	"
5	B A 4		"	"	14			外反やや玉縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
6	B B 2		"	"	14.2			外頬	"	"
7	B D 2		"	"	11.2			外頬	"	"
8	B B 6		"	"	11.2	4	4.9	やや外反	ロ横ヘラ削	"
9	B B 2		"	"	12.4			外反やや玉縁	"	"
10	B A 3		"	"	12	3.8		外頬	"	"
11	B A 7		"	"	14			外頬	"	"
12	B A 6		"	"	13.2			外反	"	"
13	B A 7		"	"	12			外頬やや玉縁	"	"
14	B D 1 P 1		"	"	13			外反やや玉縁	"	"
15	B A 6		"	皿	13.2			外反玉縁	ロクロ横ナデ	"
44-16	B A 4		上部器	杯	12.2			外反やや玉縁	ロ横ヘラ削	ロクロ横ナデ
17	B B 6		"	皿	12			やや外反	"	"
18	B B 4 P 1		"	"	13			外反	"	"
19	B B 6		"	"	12			外反玉縁	"	"
20	B B 2		"	"	12.2			外反玉縁	"	"
21	B C 2		"	"	16			やや外反	"	"
22	B A 4		"	"	12			外頬	ロ横ヘラ削	"
23	B C 4		"	"	12			外頬	ロクロ横ナデ	"
24	B A 7		"	"	13			外頬	"	"
25	B A 7		"	"	13			外頬	"	"
26	B B 2		"	杯	13.2			外頬	"	ヘラ横磨
27	B A 7		"	"	12			やや外反	"	"
28	B A 7		"	"	11			外頬	"	"
29	B A 7		"	皿	12			外頬	"	"
30	B A 7		"	杯	14			外頬	"	"
45-31	B A 7		上部器	杯	12			外頬	"	"
32	B A 7		"	皿	13			外頬	"	"
33	B A 7		"	蓋			14	先端L字形	"	ロクロ横ナデ
34	B D 2		"	蓋					"	ヘラ磨

方 法		胎 土	焼 成	色 調		備 考
底 部				内	外	
(2)	(2)	砂粒子やや荒い	良好	黑色	赤褐色	放射状暗文
コクロ痕	糸切り	こまかい	x	黄褐色	黄褐色	花弁状暗文
x	同軸ヘラ切	x	x	赤褐色	赤褐色	x
x	ヘラケズリ	x	x	黄褐色	黄褐色	放射状暗文
		やや荒い	x	暗褐色	暗褐色	底部近くの内外面にヌス付有
		こまかい	x	黄褐色	黄褐色	
		こまかい	x	赤褐色	赤褐色	
ロクロ痕	回軸ヘラ切	x	x	x	x	洞ヘラ焼削
		こまかい	x	x	x	
ヘラ削	x	x	x	x	x	
	x	x	x	x	x	
	x	x	x	黄褐色	黄褐色	
	x	x	x	赤褐色	赤褐色	
	x	x	x	黄褐色	黄褐色	
	x	x	x	赤褐色	赤褐色	
	x	x	x	x	x	
糸切	x	x	x	x	x	
ヘラケズリ	x	x	x	x	x	
	x	x	x	x	x	
	x	x	x	黄褐色	黄褐色	外面ヘラ焼ケズリ
	x	x	x	赤褐色	赤褐色	外面下ヘラ回軸削
	x	x	x	x	x	
	x	x	x	x	x	
	x	x	x	黑色	赤褐色	
	x	x	x	x	黄褐色	
	x	x	x	x	x	
糸切り	x	x	x	x	褐色	
	x	x	x	x	黑色	
糸切り	x	x	x	x	黄褐色	
	x	x	x	x	x	
	x	x	x	赤褐色	赤褐色	
	x	x	x	黑色	黄褐色	

器面番号	出土地点	出土状況	種類	器形	法量cm			整 形		
					口径	器高	底径	口部	腹	底部
47-1	C1号住居	フク土	土師器	杯	10.8	4.2	6	やや外傾	⑧ロ横ヘラ削	⑫ロ横ヘラ暗文
2	*	*	*	*	12.8			外反玉縁	ロ横ヘラ削	ロクロ横ナデ
3	*	*	*	*	14			外傾	*	*
4	*	*	*	*	11.2			外反玉縁	ロクロ横ナデ	*
5	*	*	*	皿	7	1.9	4	外傾	*	*
6	*	*	須恵器	杯蓋			16.8	L字屈曲	*	*
7	*	*	陶器	小皿	10			直立 ツバあり	淡黄色釉	淡黄色釉
8	*	*	上部質土器	鉢	24.2			直立	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
48-1	C2生P5	床やや上	土師器	皿	10	2.8	5.8	外傾	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
2	C2住P402	*	須恵器	杯			8.4		ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
3	C2住P401	*	土師器	*			7		ロ横ヘラ横削	*
4	C2住	フク土	*	*	11.4	4.4	6.7	外傾	ロ横ヘラ削	ロ横暗文
5	*	*	*	*	11			*	*	*
6	*	*	*	*	12	4.4	6.5	*尖唇	*	*
7	*	*	*	*	11.6			*	*	*
8	*	*	*	*	11.8			*尖唇	ロクロ横ナデ	*
9	*	*	*	*	10.8			*	ロ横ヘラ削	*
10	*	*	*	*	10			*尖唇	*	*
11	*	*	*	*			7		*	*
12	*	*	*	*			7		ヘラ削横	*
13	*	*	*	*	17.2			*	ロクロ横ナデ	*
14	*	*	*	皿	12	2.8	4	*	ロ横ヘラ横削	ロ横ヘラ暗文
49-15	C2住	*	土師器	杯	13.2			外傾	ロ横ナデ	ヘラ磨
16	*	*	*	*	11			*	*	*
17	*	*	*	皿	12			*	*	*
18	*	*	灰釉陶器	*	14.2			外反	灰绿色釉	灰绿色釉
19	*	*	土師器	*	15.2			外傾	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
20	*	*	*	杯	12			*	*	ヘラ磨
21	*	*	*	杯蓋			18		ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
22	*	*	*	*			18	端部やや屈曲	*	*
23	*	*	*	*			15.8	*	*	*
24	*	*	*	*			17.2	*	*	*
25	*	*	*	*			17	端部やや屈曲	ロ横ヘラ回削	*
26	*	*	*	*			17	端部やや屈曲	*	*

方 法		粘 土	燒 成	色 調		備 考
底 部				外	内	
(4) 口横	(6) 素切、ヘラ円	こまかい	良 好	黄褐色	黄褐色	花弁状暗文、裏底素切後削開のみ
	ヘラ削り	*	*	赤褐色	赤褐色	
		*	*	*	*	
		*	*	*	*	
	素切り	*	*	*	*	C E I P 1
		やや荒い	*	青灰色	青灰色	
		黄灰色				C E 1
		こまかい	*	赤褐色	赤褐色	外面スス付有、雲母なし C F 1
	素切り	*	柔らかい	暗褐色	暗褐色	外面スス付有
	素切り	*	良 好	黄白色	黄白色	
	ヘラ削	*	*	赤褐色	赤褐色	削出高台(回転削)
	ヘラ削	*	*	*	*	花弁状暗文
		*	*	*	*	放射状暗文
	ヘラ削	*	*	*	*	C E, F, 2, 3, 花弁状暗文
		*	*	*	*	花弁状暗文
		*	*	*	*	C D 3 花弁状暗文
		*	*	暗褐色	暗褐色	C E 3 花弁状暗文
		*	*	赤褐色	赤褐色	C D 3 放射状暗文
		*	*	*	*	C E, F, 2, 3 削出高台状暗文
	ヘラ削	*	*	*	*	C F 2 削出高台放射状暗文
		*	*	*	*	C E, F, 2, 3 花弁状暗文
	ヘラ削り	*	*	*	*	C E, 2, 内面ウズ巻暗文
		*	*	褐色	黑色	C E 3
		*	*	黄褐色	黑色	C F 2
		*	*	*	黑色	C E 9
	灰色こまかい	良 好	灰綠色	灰綠色	C E 3	
	こまかい	*	赤褐色	赤褐色	C F 2	
	こまかい	*	黄白色	黄白色	C F 2	
	こまかい	*	赤褐色	赤褐色	C F 3	
		*	黄褐色	黄褐色	C E, F, 2, 3,	
		*	赤褐色	赤褐色		
		*	*	*	*	
		*	*	*	*	
		*	*	*	*	

器物番号	出土地點	出土状態	種類	器形	法量cm			整 形		
					口径	器高	底径	口縁	制 部	
49-27	C 2 住	フク十.	須恵器	杯					◎	◎
28	*	*	土師器	甕	28			ヘラなで	横ナデ	
29	*	*	*	*	25.5			外・横ナデ 内・ハケ 備削リ	ハケ目タチ	ハケ横削
30	*	P 1	*	*			8.5		ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
50-1	C 3 住	P 1	土師器	杯	12.9	4.2	4.8	外反 玉様	ロ横-ヘラ削	ロ横-ヘラ暗文
2	*	P 9	*	*	11.6	4.4	5.2	やや外反玉様	*	ロクロ横ナデ
3	*	P 16	*	*	11.7	4.5	5.4	外傾	*	*
4	*	P 3	*	*	12.4	3.9	4.7	外傾	ロクロ横ナデ	ヘラ磨
5	*	P 2	*	*	12.8	4	7	外傾	*	ヘラ-暗文
6	*	フク土	*	*	12	4.5	5.4	外傾やや玉様	*	ヘラ磨
7	*	*	*	*	14.2			外傾	*	*
8	*	*	*	*	12			*	*	*
9	*	*	*	*	11.1			* やや玉様	*	*
10	*	*	*	*			5.6		*	*
11	*	*	*	皿	13			外傾	ロ横-ヘラ削	ロクロ横ナデ
12	*	*	*	杯	13.2	4.3	6.2	やや外反	*	*
13	*	*	*	*	12.2			やや外反	*	*
14	*	*	*	*	11	4.4	5.2	外傾	*	*
15	*	*	*	*	11.2	4.5	5	外傾	*	*
16	*	*	*	*	12			外反	*	ロ横、暗文
17	*	*	*	*	12			外傾	*	*
18	*	*	*	鉢	13.3			屈曲	ロクロ横ナデ	*
19	*	P 14	*	杯	18			外傾	*	*
20	*	フク土	*	*	15			外傾	*	*
51-21	C 3 住	フク上	土師器	杯	15			外傾	ヘラ横磨	ヘラ横磨
22	*	*	*	*	12			*	ロクロ横ナデ	ヘラ磨
23	*	*	*	*	15			*	ロ横-ヘラ横削	ロ横
24	*	*	灰釉陶器	手付瓶	5.1			外反	灰綠釉	灰綠釉
25	*	*	須恵器	広口形壺	15.1				黒褐色	黒褐色
26	*	P 11	土師器	甕			8.5		横ナデ	横ナデ
27	*	P 12	須恵器	直口壺	14.1			直立	*	*
28	*	P 13	土師器	甕	32.2			外・横ナデ 内・ハケ目横	ハケ目タチ	ハケ目ヨコ
29	*		*	*	28.2			*	*	*
30	*	P 5	*	*			9.6		*	*

方 法		胎 土	燒 成	色 調		備 考
底 部				外	内	
(2) ロクロ	⑥ 糸切一ヘラ					高台
	やや荒い		かたい	黄褐色	黄褐色	内面黑色タール付着
	*		柔らかい	赤褐色	赤褐色	金雲母を含む
糸切						
糸切一ヘラ削	こまかい	良 好	赤褐色	赤褐色	C E 3, 花弁状暗文 墨書「西」	
ヘラ削	こまかい	*	*	*	*	墨書「西」
糸切一ヘラ削	*	*	*	*	*	
糸切	*	*	黄褐色	黑 色	外面口線一部黒色	
*	*	*	黑褐色	黑 色	花弁状暗文	
*	*	*	黄褐色	黄褐色	C E 3	
*	*	*	暗褐色	暗褐色	C E F 2, 3	
*	*	*	黑色	黑 色	*	
*	*	*	黄褐色	黑 色		
糸切	あらい	*	*	*	*	
	こまかい	*	赤褐色	赤褐色		
ヘラ削	ややあらい	*	*	*	*	
	こまかい	*	黄褐色	黄褐色	C E 3	
ヘラ削	*	*	暗褐色	暗褐色	C E F 4, 5	
糸切, ヘラ削	*	*	赤褐色	赤褐色		
	*	*	*	*	花弁状暗文 内面タール付着	
	*	*	*	*	花弁状暗文	
	*	*	*	*	C F 4 花弁状暗文	
	*	*	褐色	褐 色	花弁状暗文	
	*	*	赤褐色	赤褐色	C E F 4, 5, 花弁状暗文	
こまかい	良 好	*	*	*		
*	*	黄褐色	黄褐色			
*	*	赤褐色	赤褐色	C E F 4, 5,		
灰色胎土こまかい	*	灰綠色	灰綠色	C E 3,		
黒褐色こまかい	*	黒褐色	黒褐色	C E, F, 2, 3, 4,		
糸切	こまかい	*	赤褐色	赤褐色	雲母なし	
	灰褐色こまかい	*	灰褐色	灰褐色		
	やや荒い	*	赤褐色	赤褐色	金雲母を含む	
	*	*	黒褐色	黒褐色	*	
木葉模	*	*	*	*	*	

図面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量cm			整 形		
					口径	器高	底径	口縁	腹	部
51-31	C 3 住	P 6	土師器	甕	20			外反	④ロクロ横	⑤口横-ヘラ磨
52-1	C 4 住 4	P 1	須恵器	杯	12.4			外頬	#	ロクロ横ナデ
2	#	P 7	#	#	12.1			#	#	#
3	#	P 2	上師器	#				外頬尖唇	ロ横-ヘラ磨	ロ横-ヘラ縞文
4	#	P 8	#	#				#	#	#
5	#	フク上	須恵器	#	13			外頬	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
6	#	#	#	#	11.9			#	#	#
7	#	#	土師器	#	12			#	#	#
8	#	#	須恵器	#	13			#	#	#
9	#	#	#	#	13.2			#	#	#
10	#	#	上師器	#	10.2			#	#	#
11	#	#	#	#	13			#	#	ヘラ磨
12	#	#	#	#	12.2			#	#	#
13	#	#	#	#	12			#	ロ横-ヘラ削	ロ横-ヘラ縞文
14	#	#	#	皿	14.1			#	#	ロクロ横ナデ
15	#	#	#	皿(杯蓋)	11			#	ヘラ刷毛目	ヘラ磨
16	#	#	灰釉陶器	短口壺	9				灰白色釉	灰白色釉
53-17	C 4 住	P 4	土師器	甕	22.2			横ナデ	ロ横一部刷毛	ロクロ横
18	#	フク土	#	#	23.1			#	ロクロ横	#
19	#	#	#	#	24.7			#	#	#
10	#	カマド内	#	#		9	#	#	#	#
21	#	フク土	#	#	22.4			#	ロクロ横	#
22	#	#	#	#	36.1			#	#	#
23	#	#	須恵器	短頭壺	13.2			#	濃緑自然釉 毛だら	灰白色自然釉
24	#	#	石	6×3×1.7 0.8						
54-1	C 5 住	P 1 の 1	土師器	皿	12.4	2.4	4.4	やや外反玉縁	ロ横-ヘラ削	ロクロ横ナデ
2	#	フク土	#	杯			6		ロ横ヘラ横削	ロ横-縞文
3	#	フク土	#	#	11.2			外頬	#	#
4	#	#	須恵器	#	12			# 尖唇	ロ横	ロ横
5	#	#	土師器	#	15			#	#	ロ横-ヘラ磨
6	#	#	#				6		ヘラ横削	ロ横-ヘラ縞文
7	#	P 2	#		16			外頬	ロ横-ヘラ削	ヘラ磨
8	#	フク土	須恵器	杯蓋			18		ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
9	#	#	土師器	直口蓋				直立	#	#

方 法		粘 土	燒 成	色 調		備 考
底 部				外	内	
④	④	こまかい	良 好	赤褐色	赤褐色	下面下半にヘラ形痕あり
	糸切	#	#	灰白色	灰白色	
	糸切	#	#	灰黑色	灰黑色	
	糸切ヘラ形	#	#	赤褐色	赤褐色	黒墨(道)か、放射状暗文
	#	#	#	#	#	
	糸切り	#	#	灰色	赤褐色	CC 4
		#	#	灰色	灰色	CC 5
		#	#	赤褐色	赤褐色	CCD 3
		#	#	灰白色	灰白色	
		#	#	#	#	CC 4
		#	#	赤褐色	赤褐色	CC 4
		#	#	褐色	黑色	CCD 3
		#	#	#	#	CC 5
		#	#	黄褐色	黄褐色	CC 4 花弁状暗文
		#	#	赤褐色	赤褐色	
		#	#	褐色	褐色	CB 4 杯蓋からしない
	やや荒い	#	#	灰色	灰色	CC 3
	こまかい	#	#	赤褐色	赤褐色	雲母含まず
		#	#	#	#	
		#	#	#	#	CC 3 石英粒を粘土に含む 雲母なし
	糸切	#	#	#	#	# #
		#	#	黄褐色	黄褐色	
		#	#	赤褐色	赤褐色	CD 3 日経上部にヘラ形 長1.4cm、巾0.3cm
	灰黒色船七	#				CC 5 安山岩両面研石
						CD 3
	ヘラ削	こまかい	良 好	黄褐色	黄褐色	
	削出高台	こまかい	#	赤褐色	赤褐色	
		#	#	赤褐色	赤褐色	CC 2
		#	#	灰色	灰色	CB 2
		#	#	黄色	黄色	CB 1
	ヘラ回転削	#	#	赤褐色	黑色	CC 2
	ヘラ削	#	#	#	#	
		#	#	灰色	灰色	
		#	#	赤褐色	赤褐色	CB 3 雲母若干含む

器番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量cm			整 形		
					口径	器高	底径	口 線	脚 部	
54-10	C 5 住	フク土	須恵器	長頸壺					ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
11	"	"	"	甕	33.5			"	"	"
12	"	"	土師器	"	30.2			"	"	"
55-1	C 6 住	P 1	土師器	皿	14	3.4	7	外傾	ロクロ横ナデ	ヘラ磨
2	"	フク土	"	杯	12			"	"	"
3	"	"	"	"	16			"	"	"
4	"	"	"	"	13.2			外反玉縁	ロ横ヘラ削	ロクロ横ナデ
5	"	"	"	"	14			"	"	"
6	"	"	"	"	14			外傾やや玉縁	ロクロ横ナデ	"
7	"	"	"	"	14.2			外反玉縁	"	"
8	"	"	"	"	13			外傾玉縁	ロク横ヘラ削	"
9	"	"	"	"	13			外反玉縁	"	"
10	"	"	"	杯蓋			10		"	ロクロ横ナデ
11	"	"	陶器	杯	12			やや外反	鉄軸	鉄軸
12	"	"	土師器	鉢釜	32			内傾	横ナデ	横ナデ
13	"	"	"	甕	26.4			直立	刷毛目タチ	刷毛目ココ
56-1	C 7 住	フク土	土師器	杯	15			外反玉縁	ロ横ヘラ削	ロクロ横ナデ
2	"	"	"	"	12	4.5	6	"	"	"
3	"	"	"	"	15			"	"	"
4	"	"	"	"	11			"	"	"
5	"	"	"	"	15.2			"	"	"
6	"	"	"	"	9			"	"	"
7	"	"	"	"	12.2			外傾	"	"
8	"	P 1	"	皿	12.6	2.5	5	"	"	"
9	"	フク土	"	"	13			外反玉縁	"	"
10	"	"	"	杯	14			外傾	ロクロ横ナデ	"
11	"	カマド内	"	"	15			"	"	ヘラ磨
12	"	フク土	須恵器	"	12			"	"	"
13	"	"	"	"	12			"	"	"
14	"	"	土師器	"	13			"	"	"
15	"	"	"	"	12			"	"	"
16	"	カマド内	"	"	13.2	4.5	5.5	"	"	ヘラ磨
17	"	フク土	"	"	13			"	ロ横ヘラ削	ロ横、暗文
18	"	"	灰釉陶器	"	13			外反	灰綠色釉	灰綠色釉

方 法		胎 土	焼 成	色 調		備 考
底 部				外	内	
(6)	(6)	こまかい	良 好	灰 色	灰 色	CC 2
		"	"	青 黑 色	青 黑 色	CB 2
		"	"	黄 褐 色	黄 褐 色	CB 2 畫母なし
高 台 糸 切		"	"	赤 棕 色	黑 色	
		"	"	黄 棕 色	黑 色	
		"	"	"	"	
		"	"	赤 棕 色	赤 棕 色	
		"	"	暗 棕 色	暗 棕 色	
		"	"	"	"	
		"	"	赤 棕 色	赤 棕 色	
		"	"	暗 棕 色	暗 棕 色	
		"	"	"	"	
		灰色胎土こまかい	"	黑 軸	黑 軸	CA 6
		やや荒い	"	褐 色	褐 色	金雲母含む
		"	"	暗 棕 色	暗 棕 色	金雲母含む
		こまかい	良 好	赤 棕 色	赤 棕 色	墨書「伴」又「仲」か
ヘラ削		"	"	"	"	
		"	"	"	"	
		"	"	"	"	
		"	"	"	"	
		"	"	"	"	
		"	"	"	"	
ヘラ削		"	"	"	"	
		"	"	"	"	
		"	"	"	"	
		やや荒い	"	褐 色	褐 色	
		こまかい	"	灰 色	灰 色	
		"	"	"	"	
		"	"	赤 棕 色	赤 棕 色	
		"	"	黄 棕 色	黄 棕 色	
糸切	やや荒い	"	暗 棕 色	黑 色	外 面 スス若干付着	
	こまかい	"	赤 棕 色	"		
	ややもろい	"			軸 全面に施される	

器物番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量cm			整 形		
					口径	器高	底径	口縁	胴	部
57-19	C 7 住	フク土	須恵器	杯蓋			16		④ロクロ横ナデ	④ロクロ横ナデ
20	#	#	#	#			18		#	#
21	#	#	土師器	甕	16		16		ヘラナデ	刷毛削横
22	#	#	#	小形甕	11		11	横ナデ	刷毛タテ削	#
23	#	#	#	甕	29.5		29.5		#	#
24	#	#	#	#	27.4			粘土貼付補強	#	#
25	#	#	砾石	8.5×4×3.8 3.8						
26	C 8 住	#	土師器	杯	15			やや外反	ロ横ヘラ削	ロクロ横ナデ
27	#	#	灰釉陶器	#	17.2			#	袖	袖
58-1	C 9 住	フク土	土師器	杯	14			外傾	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
2	#	カマド内 P 1	#	高台			9.4		#	ロクロ横ナデ
3	#	フク土	#	杯	13			外傾	#	ロ、ヘラ磨
4	#	#	灰釉陶器	皿	14			外反	袖	袖
5	#	#	須恵器	瓶子	4.5			内傾	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
6	#	#	#	#			4.8		袖	#
7	#	#	#	甕	22				ロクロ横ナデ	#
8	#	#	#	#	16				袖	ロクロ横ナデ
9	#	#	#	#	20				ロクロ横ナデ	#
10	#	#	灰釉陶器	#	22				袖	袖
11	#	#	須恵器	#			13		ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
12	#	#	土師器	#			13		刷毛タテ削	刷毛横削
13	#	#	土師器	#	13.8			刷毛タテ削	刷毛斜削	
14	#	#	#	鍋釜	25.6			横ナデ		横ナデ
59-1	C B 3		土師器	皿	15.2	3.5	9	外傾	横ナデヘラ磨	横ナデ暗文
2	C B 3		#	杯			5.3		ロクロ横ナデ	ロ横ヘラ磨
3	C B 3		#	皿	10.2			外傾	#	ロクロ横ナデ
4	C B 3		#	杯						
5	C A 2		#	#	13.2			外傾	ロクロ横ナデ	ロ、ヘラ、暗文
6	#		#	#	11			#	ロ横ヘラ削	ロ横ナデ
7	#		磁器	瓶				直立	袖	袖
8	C B 1 P 1		土師器	杯	11.6			外傾やや正縁	ロ横ヘラ削	ロクロ横ナデ
9	表探		須恵器	#	12.6	4	8.4	外傾	ロクロ横ナデ	#
10	C A 3		砾石	11.5× 4.5×5.5						
11	C B 1		須恵器	甕	22.2				ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ

方 法		粘 土	燒 成	色 調		備 考
底 部				外	内	
⑤	⑥	こまかい	良 好	青黑色	青黑色	
		*	*	青灰色	青灰色	C B 6
		*	*	暗褐色	暗褐色	外面スス若干付着 露母少量含む
		やや荒い	ややもろい	*	*	露母若干含む
		*	良 好	赤褐色	赤褐色	*
		*	*	*	*	*
						砂岩
		こまかい	良 好	赤褐色	褐 色	C A B 5
		灰色胎度	*	灰 色	灰 色	C A 4 (水田窯か)
		ややあらい	良 好	黄白色	黄白色	
		*	ややもろい	暗褐色	暗褐色	C 1 露母多量に含む
		こまかい	良 好	黄褐色	黄褐色	C D 1
		灰色胎土こまかい	*	灰绿色	灰绿色	C D 1
		こまかい	*	灰黑色	灰黑色	C C 1 口線上部に灰白自然釉あり
糸切一機ナゲ		*	*	*	*	C D 2 緑灰綠色
		*	*	*	*	C D 1
		ややあらい	*	墨色自然	暗褐色	C D 1 外面黑色釉が施される
		こまかい	*	赤褐色	赤褐色	C D 2
		*	かたい	褐 色	褐 色	C C 2 常活焼か
		*	*	灰青色	灰青色	C C 2
		*	*	赤褐色	赤褐色	C D 2
木葉痕	ややあらい	もろい	*	*	C C 2 内面黑色タール付着露母含	
	*	*	暗褐色	暗褐色	C C 2 刻下にスス付着、黒露母含有	
ヘラなで	こまかい	良 好	黄褐色	黄褐色		
糸切り	ややあらい	*	褐 色	褐 色		
*	こまかい	*	赤褐色	赤褐色		
ヘラ削	*	*	*	*	刻書「大」か。底部	
	*	*	*	*		
	*	*	*	*		
	白色胎土					染付
糸切り				赤褐色	赤褐色	
糸切ヘラ削	灰白色こまかい	良 好	灰白色	灰白色		
						花崗岩
	こまかい	良 好	灰黑色	灰黑色		

図面No	出土地点	備考	図面No	出土地点	備考
60-1	B B 4	地紋平行条線の上に結節状浮雕文、ボタン貼付文が施す。	62-14	C P 1	条線が施される
2	B A 6	平行条線にボタン状貼付文が施す。	15	C A 1	"
3	A J 12	タテの沈線右側に彫被状文が施される。	16	C C 2	"
4	"	3と同様。	17	C C 1	外反する口縁で、条線が横に走る。
5	C H 3	細いタテの平行条線にミミズ状被状文が施される。	18	C A 1	上半分が無文で、下は条線が施される。
6	A J 8	無文に沈線の区画	19	C A 1	"
7	A 1 号列石	ハの字文。	63-1	C D 3	口縁で外反、条線は右下りに施される。
8	C C 2	縦い粘土紐を貼付て、その上をヘラで点列状に割ね。	2	C B 2	条線が施される。
9	C A 住	8と同様。	3	C C 2	"
10	A H 5	縦文を沈線で区画し周囲をスリ消している	4	C B 1	"
11	C C 2	同上。	5	C B 1	"
12	A H 6	同上。	6	C B 1	"
13	C D 3	縦文地文で同上。	7	C B 1	"
14	A J 10	曲線の沈線で区画し、内側に刺突文がある。蓋形土器の肩部か。	8	C C 2	"
15	C A 2	14と同様の文様と考えられる。14, 15は弥生時代にあたるものかもしれない。	9	C D 3	"
16	C 4型P 4	器腹内外をていねいにハラ磨きしており口縁部外側4~5本の横沈線。	10	C D 3	"
17	C A 5	同上、墨褐色を呈する。	11	C D 3	"
61-1	AG2S'	打製石斧。	12	C D 3	"
2	A I 3	打製石斧。	13	C D 3	"
3	A H 3	磨製石斧。	14	C D 3	"
4		黒曜石製石器。	15	C B 1	"
5		黒曜石製石器。	16	C A 2	"
62-1	C B 4	口縁部が尖り条線が右下りに施される。	17	C F 1	"
2	C A 1	条線。	18	C P 3	"
3	C A 1	横方向の条線をはさんで杉縞状文が上下に施される。	19	C C 2	"
4	C A 1	他に比較してやや細い条線である。	20	C B 4	"
5	C B 1	条線が右上から右下へ施され、土器のカーブからして蓋形土器肩部の様である。	21	C C 2	"
6	C A 1	条線が施される土器の肩部か。	22	C D 3	"
7	C A 1	条線が施される。	23	C P 3	"
8	C A 2	"	24	C C 2	"
9	C A 1	"	25	C C 3	"
10	C A 1	"	26	C C 2	"
11	C A 1	"	64-1	C C 2	外面縦文が施される。
12	C A 1	"	2	C C 1	"
13	C A 1	"	3	C C 2	"

3 考 察

中部地方の平安時代土師式土器編年の諸問題

近年の中央道建設工事等の緊急発掘調査によって、中部地方に於ける土師器、とりわけ平安時代に属する集落址が続々と調査されるに及び、その編年的内容が次第に明確になりつつある。このことはかって杉原莊介氏が土師器研究の中で、大和朝廷の支配化による地方文化の大和化によって全国的に均一化された土師器編年が組み立てられるとして、和泉→鬼高→真間→国分の4段階を設定した意識性とは異なり、近年の資料増加に伴って地域性が歴然としてきている。

即ち岩崎卓也氏が指摘している通り、今後の土師器研究が「当初考えられたように土師器が全国的に一歩調で変化していくものではないことが判明している現在にあっては、これらのもつ共通要素の抽出ばかりでなく、地方色の抽出をもおこなうという相対する二つの視角からの検討が望ましいし、さらに一歩すすめて、これら両者のもつ意義にまで立ち入って考究して、その歴史的評価をおこなうという態度も必要であろう」⁽²⁾と語られている通りである。

ここであつかう平安時代の土師器は関東地方で国分式に比定されるもので、それ以前の土師器に比較してその編年研究や歴史上的意義についての考察が遅れており、最近の資料増加と灰軸研究の発達によって伴出土師器の年代的考察も可能となっている現在では、地方古代史研究に於て欠くことのできない分野となりつつあることも自明である。

平安時代とはおよそ9世紀から12世紀に至る約400年間という長い期間があって、古代社会から中世社会に変貌する政治的経済的あるいは文化的な過渡期とも考えられており、その大転換期の生活様式も、当然のことながら影響下にあったであろうことを推察しても大過ないであろう。即ち考古学上の資料としての土師器や陶器をはじめ鉄製品及び木簡等の遺物、又住居址や倉庫址水田等の遺構の存り方がそうした変動に規定されて出現して来たとも考えて良いであろう。

すでに各図間に於ける生活様式の一端としての土師器の、地域差についての意識性を岩崎卓也氏の言葉を借りて述べたが、地域差を明確にしていくための平安時代土師器編年、とりわけ中部地方に於ける土師器製作技術についての特徴を地域別に概観することによって編別された編年を確立し、集落変遷が導き出されていくのではないかと考えられる。

ここで中心的にあつかう地域とは山梨、長野の両県であるが、長野は北信と南信に分け又北信地方の編年を補うために石川県三浦遺跡を加えた。山梨では中央道及び勝沼バイパス建設工事による緊急発掘調査によって編年資料となる重複住居が幾軒かが発見され、そこで菊島美夫氏が7型式⁽³⁾筆者が5時期⁽⁴⁾に分類している。

長野県内では南信地方の研究が進んでおり宮沢恒之氏の飯田地方の編年⁽⁵⁾及び伴信夫氏の伊那地方中道遺跡での4時期分類⁽⁶⁾がなされているが、北信地方では平安時代の土師器編年作業がやや不充分と言える。

これら分類の対比は当然製作技術の伝達のみならず政治経済社会での有機的な結合を示し、中部山岳地帯と畿内あるいは東海、関東等の近接地域との関係をも浮き彫りさせる手段として志向するものである。

1. 地域研究の概要

a) 南信地方

南信地方に於ける国分期土師器編年の基礎となつたのは何と言つても昭和25年以来行なわれた塩尻市平出遺跡の発掘調査であろう。小出義治、桜井清彦、玉口時雄各氏は土師器を7様式に分類し、第5様式から第7様式までの3様式を国分期に比定させ、又灰釉陶器も3分類し、前者にそれぞれ対比させている。¹⁰⁾ この国分期に比定されたものの年代は当初8世紀末～9世紀に考えられていたものだが、檍崎彰一氏による灰釉陶器の年代研究に於て11世紀～12世紀に比定しうるものとなっている。¹¹⁾

平出遺跡発掘調査報告書の分類は長い間、長野県内の編年研究の基調となつたものであるが、現在の研究段階から推察すれば、第4様式の真間期から第5様式に至るまでの間の200年間が空白のまま放置され、逆に平安時代研究の障壁にもなった感もあるが、當時としては最大限のものとして理解しておきたい。

しかし昭和41年に出版された「上伊那の考古学調査」¹²⁾に於ても平出編年の枠から脱出することができず、全く平出編年に依拠したものであった。昭和43年には宮沢恒之氏が飯田地方の土師器研究について発表し¹³⁾、昭和48年には伴信夫氏、桐原健氏が中央道中道遺跡の資料によって伊那地方の国分期土師器を4期に分類した。¹⁴⁾そこで飯田地方及び中道遺跡の編年を簡単に説明しておきたい。

飯田地方（信濃20-11参照）

IV期 土師器自体、部分的にはロクロ成形技法になり、当方窯になると考えられる稚拙な技術によつた須恵器を少量伴う一群。

V期 坯ないし椀は黒色上器に限られるようになり、IV期同様稚拙な須恵器と移入の灰釉陶器、藏骨器を伴う一群（V期は二つに分別することができる。）

このIV期とV期の年代とその特徴は、VI期が9世紀頃に位置づけられ、V期A類は10世紀、V期B類は10世紀後半から11世紀にあてられている。V期A類とB類の差は焼の胎土がAではやや厚く、Bでは極く薄い点である。灰釉陶器については前者が東濃系であるのに対して後者は地窯の可能性の強いものであるとしている。

上伊那地方（中道遺跡）（第67図～70図）

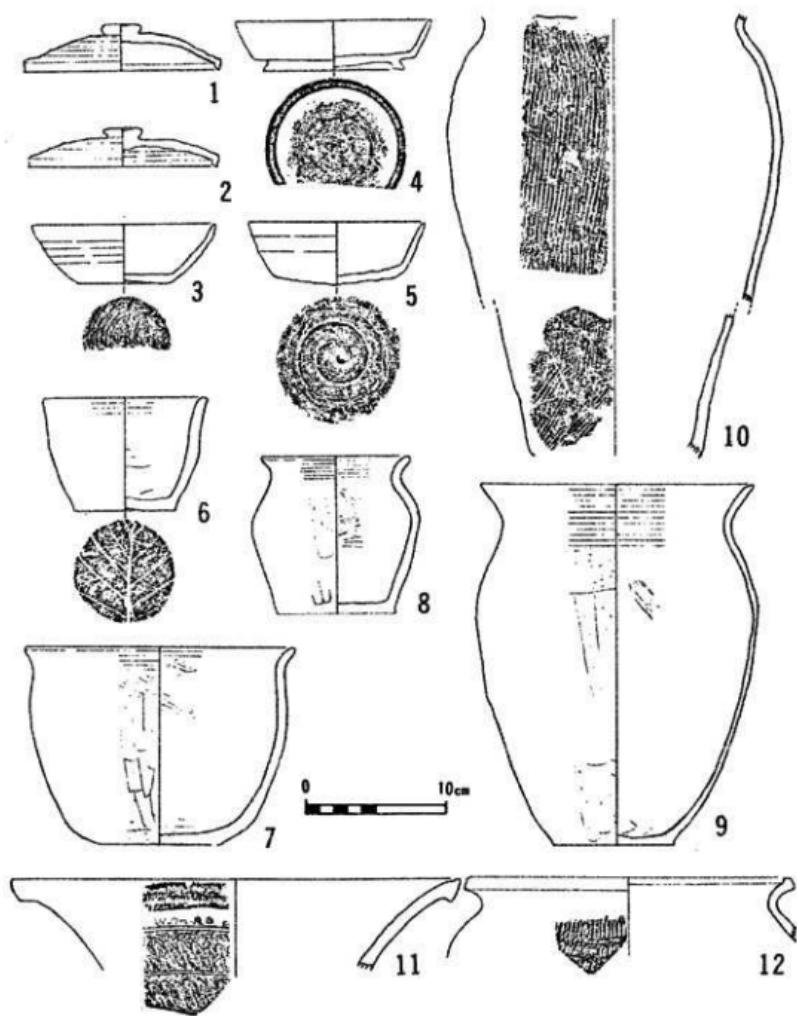
中道I期 城の内遺跡第6様式に比定されるもので、須恵器杯蓋（A、B類） 坯（底部窓切、糸切） 高台付坯、土師器小形甕（胴中央に最大径をもつ鐘形）甕、小形鉢、鉢に近いもの、瓶、高坯、坏等が出土する。

中道II期 茅野和田西10号住居跡に比定されるもので、須恵器蓋（B類） 坯（糸切底で口徑に比べ底径が大きくなる傾向がある。胎土は灰白色のものが多い。） 土師器小型甕（最大径胴部上）甕、坏（内面黒色研磨された椀に近い糸切り底の坏で、胎土は砂質でがさついた厚いもの）が出土する。

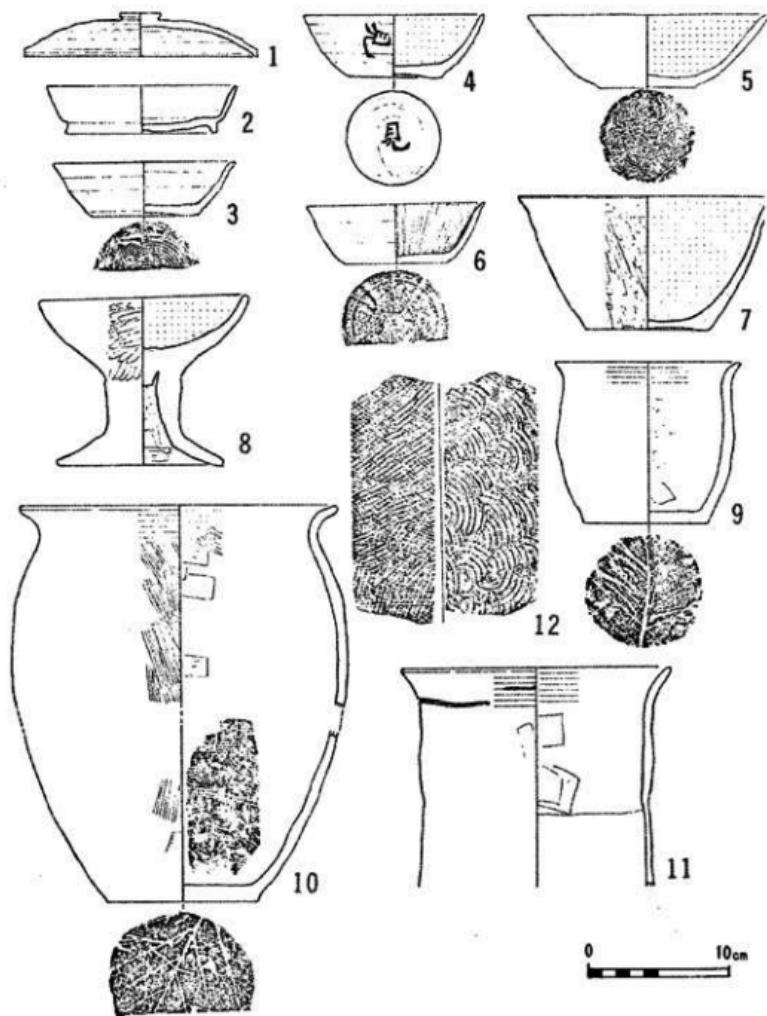
中道III期 黒塗14号、90号窯跡に比定される灰釉を伴う時期で、灰釉には盤、椀などがある。須恵器杯蓋、坏（口徑に比し底径の大きいものと小さいものがありロクロ痕が目立つ。） 高台付坯（浅いものと深いもの） 甕上器小型甕（ロクロ輪形、糸切底） 甕（窓削り、カキ目） 坯（内黒土器の増加、丁寧な仕上げ） 高台付椀、赤色胎土暗文坏等が出土する。

中道IV期 折戸53号窯跡に比定される灰釉を伴出し、須恵器甕（坏等は消失）、土師器坏の口邊が外反気味となり赤色胎土暗文坏は消える。又かわらけの祖形となる小形甕が出てくる。

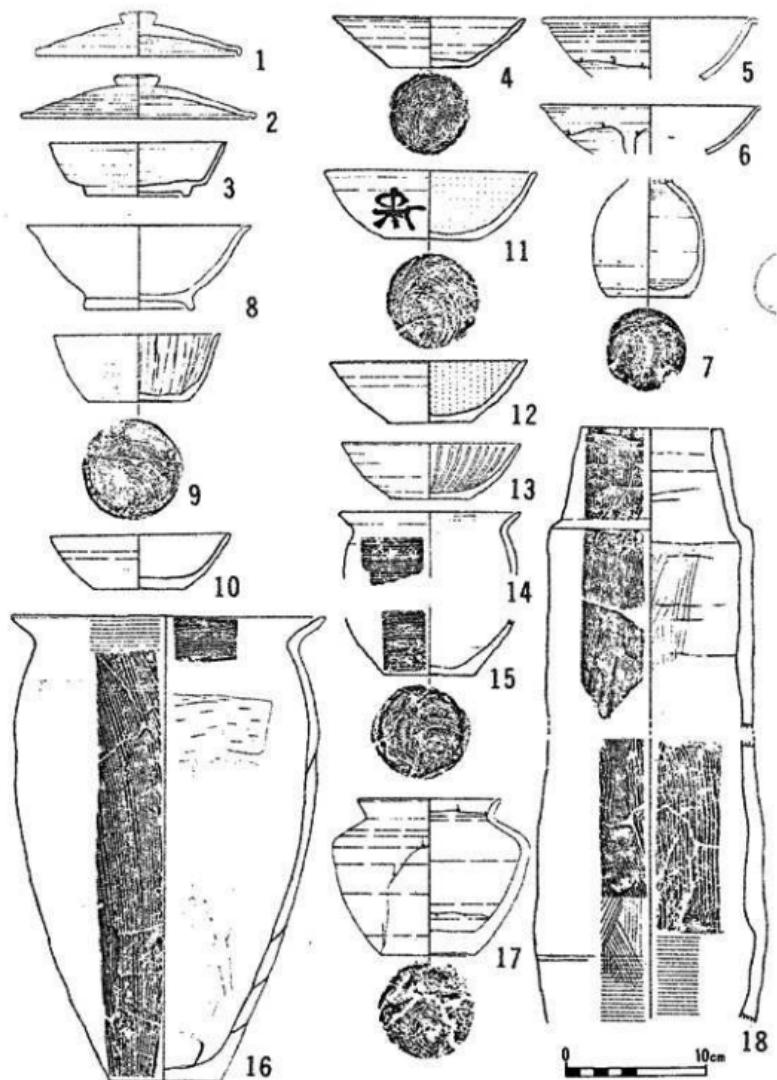
以上飯田地方、上伊那、塩尻地方の土師器の編年を第19表のとおりに整理した。



第67図 中道Ⅰ期 1～5, 11, 12. 須恵器
6～10. 土師器

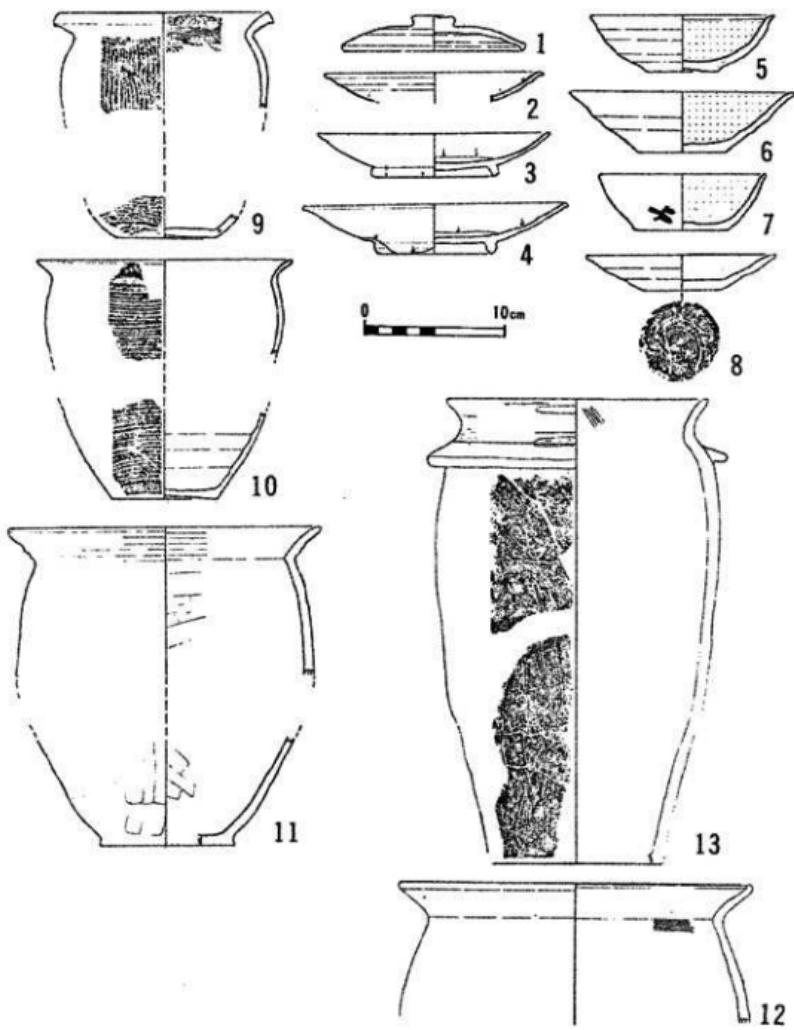


第68図 中道 II 期
 (1,10,11-59号住 2,6-60号住 3,12-56号住 4-38住 7,9-34住
 8-21住 1～3,12 須志器 他は土器)



第69図 中道田期

(1~3,14,15号 4,11~15号 5~7~9号 8~19号 10,12,18~40号
16~12号 17~13号) 1~4,17須底器 5~7灰釉 他上師器



第70図 中道Ⅳ期
 (1~3.58~36号 4,9~11~68号住 12,13~22号住)
 L.S. 2~4.K. 5~13.H

	平出遺跡	飯田地方	中道遺跡
A.D. 800	第4様式	Ⅲ期 D類	I 期
900		IV期	II 期
1000	第5様式 施釉陶器I	V期A類	III 期
1100	第6様式 施釉陶器II 第7様式 施釉陶器III	V期B類	IV 期

第 19 表

そこで飯田、伊那地方の特色を比較していきたいが、ここで問題となるのは土師器のうち、ロクロ整形小形甕と、内面黒色研磨土器である。前者について、飯田地内では9世紀(IV期)に発生しているものが、伊那では10世紀後半～11世紀(III期)に出現している。ロクロ技法が単に环、皿等から甕にまで取り入れられてくることは、必然的に量産的傾向をもたらしたであろうし、須恵器の需要あるいは生産及びその技術とも密接な関連があるであろう。飯田地方IV期はロクロ技術導入によって、須恵器生産が灰白色の移入品から胎上稚拙な当地方産生産品の出現ともなってくるが、伊那地方ではIII期に至って飯田地方と同様な変化が現われるようである。しかし須恵器生産の発生が土師器を消し去ることなく、むしろ土師器生産をも増大させていることは明白で、飯田地方V期A類の黒色土器の増加は伊那地方でも見られる現象であり、中部地方に於ける土師器生産の強さが充分にうかがえる。

ロクロ技術と黒色土器の関連性について、田中琢氏は「畿内の土師器生産は、外からの新しい技術をとりいれることなく、過去からうけついだ技術的なワクのなかで多量生産の方向をたどった」として「東日本の土師器生産が、9世紀以降新しいロクロの技法を取り入れた点とくらべると、新しい技術をうけ入れない生産組織の硬直性と、技術的な保守性がつよく感じられる。しかしこのワクの中であるいは一部このワクをぬけだそうとする新しい動きもある。それは黒色土器の発生と、瓦器生産の成立である。」³⁴としている。

黒色土器の編年上の変化については後論するが、「内面黒色研磨土器は一般的に鬼高窯類を出发点としている様に考えられるが、土師器の製作技法面から推論すれば船橋遺跡³⁵の発掘調査から裏書きされたように8世紀後半から出現した」³⁶と考えられている。中部の各地域で9世紀初頭に位置付けられる黒色土器の出土例を見ていないことからも、黒色土器生産の技術が畿内地方からの移入によったものとして考えられているのが一般的であろう。飯田、伊那地方の黒色土器の盛行はほぼ10世紀にあたる。

又、赤色胎土暗文甕は山梨に於て9世紀から略10世紀中頃まで盛行しているが、伊那では中道III期(10世紀末)に現れる点や、畿内の黒色土器の高台付瓶が飯田地方のものより伊那、北信地方の土器の方が類似しているように思えることなども今後の問題となろう。

b) 北信地方

北信地方における土師器編年の基本となっているものは城の内遺跡³⁷であろう。この報告書で木代、岩崎両氏は城の内遺跡出土土師器を第1様式から第6様式に分類した。それぞれの様式年代は第1様

式が5世紀に、第2・3様式が6世紀に、第4・5様式が7世紀、第6様式を8・9世紀としている。このうち特に関係ある6様式は「土師器の他に5様式に比較して須恵器の量が増加していること、かなり回転の早いロクロ技法が、全面的に採用されていることが指摘される。糸切底など城の内出土土器のうち、もっとも後出的な要素が多いと考えられる。この様式の土器は壺、鎌蓋、壺などをその内容としている。」

又北信地方でのこの期の遺跡には星代大塚遺跡¹⁸馬口遺跡¹⁹などを代表として数多くの発掘例があり、それぞれの編年上の位置付けは大塚遺跡の報告に詳しいところである。

しかし、それらの諸遺跡は地域的な流れとしての編年を埋めるに乏しく、その遺跡の年代的な位置を求めているにすぎない。これに比べ、石川県三浦遺跡²⁰では一応の編年資料が提出されているので、次にこの遺跡についての概略を記すが、その前に北信地方の二、三の問題点を指摘しておく。

まず鎌蓋であるが、南信地方では中道IV期、山梨では約11世紀になって現われており、地域的な関係では接しているにもかかわらず、年代的に発生が8～9世紀と捉えることが困難ではないかということである。これには更に考え得る二つの方向があるが、その一つには、「ロクロ整形＝奈良末～平安初期」という短絡的結論による8～9世紀決定論に支配されていたのではないかということ。もう一つは、逆に畿内に於ける鎌蓋の発生は奈良興福寺出土の綠釉陶器にも見られるように8世紀代に位置付けられるが、その技術が北陸地方を急速に伝播して北信地方に定着したのかということである。

次に甕について見ると、北陸をも含めた特色ある土師器の甕の底部丸底で印目のあるものをとりあげることができる。これらは山梨及び南信地方に見ることができないものであり文化差が遺物によって明確にされた例である。

この様な諸々の問題点は、後述するとして、北信地方と極めて密接な関係にあった北陸石川県の加賀三浦遺跡の編年について概観しておきたい。これは現在のところ推論ではあるが、北信への技術伝播が近江から北陸を抜けて北信へと伝わったと思われる点が多いところによる。

C) 北陸（石川県三浦遺跡）

この遺跡においては奈良～平安時代に属する土師器をI～IV期に分類している。このI～IV期は8～11世紀に比定され第20表のとおりである。

推定年代	須 恵 器	土 師 器	黒色土器	塗 彩 土 器	墨 寄 土 器	綠 釉 陶 器	灰 釉 陶 器
-800-	I 春木第3号窯	I(8)					
-900-	II 1.和氣第1号窯 2.黒川第2号窯 3.州衛第1号窯	II(9)		○	○		
		III(10)		○	○		
-1000-	III 戸津第4号窯 (三浦遺跡上層)	IV(11)	○		○	○	○

第20表（注20より引用）

この年代は「北陸における土師器編年」²¹に於て土師器第3段階に位置付けられ、「奈良～平安中期（8～10世紀）までは供膳、貯蔵形態は須恵器、煮沸形態は土師器という明瞭な分化現象がみられるが、平安後期（11～12世紀）にはほとんど土師器に遷えされることが明らかになった」としている。

この三浦遺跡各期の土師器の変化は第20表の須恵器に対比させて概要を略記しておきたい。これは城内の内遺跡などの北信地方の土師器が北陸の影響を受けていることを知るためには必要と思われるからである。

「I期については明確に捉えられておらず一応土師器に粘土塊ロクロ法が導入される前段階として捉えられているだけである。土師器甕は巻上げ成形による器体の内外壁とも入念な刷毛目の調整を加えた丸底仕上げで、口縁部は端部が丸味をおびる長い口縁が頸基部でくびれるのを編年指標とする。

II期は須恵器甕によって1、2が土師のⅡに3が皿にそれぞれ対比される。この段階で須恵器が供膳貯蔵に、土師器は煮沸に機能分化をとげ、土師器甕に粘土ロクロ法が普及的に見られる。須恵器と土師器の比は4:1～5:1である。II期の土師甕はII-1期でロクロ整形による小形甕が多く、大形甕はその大部分が器体上半を巻上げないし粘土ロクロ法によって形をととのえ、下半はこれと別途に巻上げ法によって整形し器体中位で接着する技法が普及しIII期まで存続する。又口縁はII-1, 2期には上端が内掘しても60～40度にたちあがり、II-3期にはたちあがりの部分がのびて上端が反転ぎみになる。

III期は須恵器はほぼ貯蔵形態に限定され、土師器が供膳、煮沸形態の主流を占める。又須恵器の碗皿は、三浦遺跡上層の土師器と同一の形状を呈し、かつこれにかぎって糸切技法が用いられている。又、环の外傾度についてはII期が50度以上を計るのに対し、III期は50度からそれ以下になるとともに器高指数も24～22になつて器体が著しく扁平化し、III期のグループと判別される。土師器大甕は胎土の水築、器壁の荒削によって薄手で堅微な器質をうみ出している。又口縁はさらに圧縮された複雑な逆「く」の字形を呈する。⁴⁴

ここで北陸三浦遺跡編年について述べるとすれば、まず須恵器と土師器の供膳、煮沸、貯蔵形態の各期に於ける在り方の流れが他地方とほぼ同一傾向を示すことである。しかし北信地方でも記述した様に丸底叩目の土師器甕が特異な点であろう。又、ロクロ技法が甕製作に当初使用され、III期に至つて环にも糸切技法が普及する。甕器形で異なるものの、山梨の古手の甕にもロクロ糸切が見られる点は注意すべきであろう。

d) 山梨地方

ここではまず平安期土師器研究の歩みを調べ、その中から諸問題あるいは他地域との関連性について、やや詳細に記述しておかなければならぬ。

山梨に於ける平安期土師器研究は昭和24年の日下部中学校校庭遺跡の調査に始まる。この遺跡発見の原因是校庭整地作業によるが今日言う様な緊急発掘調査ではなく上野晴朗氏個人の努力によって事業がなされたものである。現在では多くの不明の点や矛盾を含んだものではあるが、戦後山梨の考古学史上の第1歩とも言えるような平安期集落址の遺物は、上野氏が「日下部式」を命名した程他地域の物と異なっていた。⁴⁵ この他県内では七日子遺跡や江曾原遺跡⁴⁶などが次々と調査されたが、これらの発掘調査は戦後日本考古学会の豊呂や尖石等に見られる様な歴史ブームの一環としての傾向であったろう。

それでは国分期の編年研究の経過を追ってその到達点を概説したいが、関係資料を全て取り上げることができなかつたことをあらかじめお断りしておく。⁴⁷

上代文化19号（1950）に於て小出義治、上野晴朗は日下部遺跡概報でその年代を「出土する土器は

土師器及び須恵器であるが數量に於ては土師器が絶対多数を占め、土師器は所謂国府期、須恵器は第4型式に属し、厳密に云へば土師器にしろ、須恵器にしろ寧ろ更に降る物とも考えられる。特に異色砂質土層上約十種類の腐蝕土層中よりは少量ではあるが、緑色の釉薬のかかった明かに降るもののが発見される』として遺跡の年代を奈良時代としている。同じころ長野県平出遺跡の概報も出されており、この影響が見られるところであるが、引用文中にも国分期以降に日下部出土遺物を位置付ける前兆が見られる。荻原引道氏は「西郊文化8号」(1954)で土師器編年を行ない國分式以後にしている。

しかしこれらの編年上の年代及び分布についての誤りを最初に指摘したのは若月直氏であるだろう。若月氏は国学院大学考古学会報第47号(1957)に於て「山梨県出土土師器の一資料」と題し、日下部遺跡出土の遺物を平安時代に正しく位置付けたばかりではなく、同会報52号の「山梨市下神内川出土の土師器について」(1958)で、日下部出土土師器の分布範囲を甲斐を中心とした一部であることを指摘し、杉原莊介氏らの言う土師器の全国的均一化に対し暗に反論している。

この若月氏の研究はその後受け継がれることなく、上野晴朗氏は「一宮町史」に於て土師器編年を述べ、五領→和泉→鬼高→真間→国分→日下部→(日下部下限土器)としている。上野氏は7世紀以降に糸切底の出現を考え、県内には「真間式土器の純粹な遺跡はなく、國分式が日下部式に作出するのは何を意味するのであろうか。鬼高期の時代が長く続き、7世紀以降いきなり國分様式の歴史的發展の中に融合してしまったのであろうか」という様な方向違いの結論を導こうとしている。この考案の基底には小出が位置付けた日下部式=奈良時代=8世紀の大きな制約が厳然としてあったにちがいない。

これに対し山本寿々雄氏は富士山麓の剣丸尾溶岩流直下から日下部遺跡にはほぼ期を同じくする土師器を幾ヶ所からも採集し、富士山の貞觀6年(864)に噴出した溶岩に覆われたものだとしてこれを800年代に位置付けた。

この方向は菊島美夫氏によって受けつがれ、1972年頃から1975年にかけて集大成され編年確立を見てくるので、その概要を見ると、まず1972年の両木神社遺跡調査報告に於て伴出遺物の須恵器、灰釉陶器、綠釉等の年代からこの遺跡を10世紀後半から11世紀初頭に位置付けた。ここで主に灰釉陶器によって年代を捉えたことが、土師器編年の出発点ともなり得た。即ち1973年の勝沼バイパス発掘調査に於て更に豊富な資料を得た菊島氏は土師器編年の大綱を示した。即ち和泉→鬼高(I II III)→真間(I II)→国分(I II)であって、從来日下部遺跡が8世紀から9世紀初頭に位置付けられていたものを灰釉等の特徴により11世紀後半に位置付けた点が高く評価されよう。

その後筆者¹が中央道発掘調査の小沢町上平出遺跡及び須玉町大豆生田遺跡の重複住居から國分期を5時期に分類したのと時を同じくして菊島氏は甲府盆地東辺を中心として晩期I(真間)を2期に、晩期II(國分期)を7期に分類した。²この詳細は甲斐考古12-2を参照していただくとして、これらの整理過程で明確になったことは次のとおりである。

- ① 上野、小出両氏が直感的に把握した日下部式なるものは國分式に比定されること。
- ② 若月氏が洞察した通り地域的に限定され、大沢和夫、岡田正彦両氏が指摘した様に「甲斐文化圏」³を呈すること。
- ③ 坯、甕の整形技法によって分類が可能である。
- ④ 時期は平安時代9世紀~12世紀の約400年間に及ぶ。
- ⑤ 生産地は甲府市東部の横根町、川田町一帯と推定されること⁴。

- ⑥ 北巨摩郡に於ては南信系文化が相当入り込んで来ており、対比しうること。
- ⑦ 「甲斐文化圏」を呈する技術は東海地方を通って、あるいは畿内から直接的に伝播されたものかもしれない。
- ⑧ 灰釉、綠釉陶器の対比によって後半年代が想定できる。

以上の8点より他にも多くの発展性ある諸問題が含まれているが、甲斐に於ける国分期の概要についてはこのくらいにしておき、次に南信及び北信と甲斐との編年対比を行う中で、具体的に考えていきたい。

4、国分期の年代

前述してきた中部地方の編年資料に実年代を示す資料が含まれてはいないが関東地方の編年々代もあわせて表示すると第21表の様になる。

この第21表でやはり問題としておかなければならぬのは8世紀代と9世紀の土師器製作の差であろう。一般的には8世紀の杯はヘラ削りが特徴で、9世紀にロクロ整形技法が普及したとされているが、9世紀に突入した段階で全国的にロクロ整形技法が普及したとは考えられないし、あくまでもロクロ技術が須恵器生産から導入されたもので、田中啄氏の須恵器製作技術の検討からすれば、8世紀まで受けられていた「まきあげロクロ法」「まきあげ叩打法」から、鉛釉陶生産技術である「粘土塊ろくろ法」が須恵器生産に8世紀終末から9世紀ごくはじめに伝えられたとされる。鉛釉陶の生産が畿内で開始され、その技術が須恵器生産に受けがれたのであるから、土師器の「粘土塊ろくろ法」による製作は、畿内を除いたその周辺に、9世紀には広がったと解釈することができる。しかも須恵器生産と切り離すことのできない関係としてあるだろう。それは上師器生産の粘土塊ロクロ法の導入と平行関係にあるのか否かという点で歴史的背景の大きな問題をかかえているのである。勿論これららの結論について、地域差や、畿内との関係、技術集団の発展段階等にも左右されるものであるから、今後の詳細な研究にゆだねられるであろう。

しかし、「粘土塊ロクロ法」が須恵器に使用されるのは河内船橋遺跡の研究からしても弘仁12年(820年)以前にさかのぼり得ないとうれば、この技術が9世紀初頭に発展したと考えられるであろう。

地方で粘土塊ロクロ法が普及する前段階に行なわれてきたロクロ巻上、ロクロ叩打法、ヘラみがき、ヘラ削り等の整形技法が引き継がれて平安初期の土師器が出来上がってから灰釉陶器の普及に至るまでの土師器の正確な年代をとらえることは困難である。畿内及び東海地方の美濃、尾張等では灰釉編年によって知り得る年代が、山梨や関東では黒笹90号窯期から折戸53号窯期が主で、それ以前に年代の明確になっている建物址も少ない。

そこで東海地方の灰釉に伴う土師器の研究が編年対比研究上要求されているのであるが残念ながら筆者はその良好な資料を得ていない。奈良、平安時代の甲斐に至る官道が御坂路であるとされているが、そうなればロクロ技術もこの道を伝わったはずであり、山梨の胴部下半ヘラ削の环の性格も解明できるのではないかと思われる。又、黒色土器の一群については、近年の長野県内の中央道の緊急発掘調査で多量に出土しており、山梨の北巨摩地方の黒色土器に大きな影響を与えていていることが判明しつつある。

この長野の資料によって山梨の平安時代に於ける土師器の編年は著しい進歩をすることができたが、それは長野県下出土の灰釉陶器の出土によるところが大である。

南		信		關		東			
飯出地方	伊那地方	平出邊跡	城の内邊跡	北陸	甲斐	美濃	近畿	杉原小林	倉田芳郎
700	III期	中道I	V期	須恵I	I期	II-1.2	高間	猪	
800	IV期	中道II	VI期	須恵II	II期	II-1.2	國分	猪II	
900	V期	中道III		土師II	II期				
1000	V A期	中道IV		土師III	III期	II-3			
1100	V B期			土師IV	IV期	II-4			
				須恵III	V期	II-5			
				土師V					
				須恵IV					
				須恵V					
				灰釉					
				6 I					
				II					
				7 III類					

第 21 表

ちなみに長野県出土の年代の分る灰釉陶器の出土量を見るならば第22表のとおりである。

地域	時代	N-32	O-10	K-78	K-14	K-90	O-58
下伊那				3	2	3	9
上伊那	1			7	9	34	23
諏訪				1		1	4
佐久	1						4
長野						5	8
松本北							8
松本南		1	3	2		10	80
木曾			14				38
計		2	1	14	13	53	185

第22表 長野県下灰釉陶器時代別地域分布個体数
(昭和50年5月、長野県考古学会 橋崎彰一氏講演資料より)

長野に於けるこの傾向は山梨では、もと極端に黒塗90号窯期以降のものが大部分を占める。現在灰釉陶器の研究は山本寿々雄氏、菊島美夫氏によって進められているが、その緒緒についたばかりであり今後期待するところが大きいと言わなければならない。

5. 山梨の土師式土器

山梨の分類は著者が北巨摩地方を5時期に菊島美夫氏が7期に分類したものがあることはすでに述べたが、それぞれの年代対比は第21表に示してあり、菊島美夫氏が晩期II-1式（9世紀～）に置いている上平出1号住居址出土遺物の前段階に須玉町大豆生田遺跡4号住居出土遺物がある。この住居出土の环は土師器と須恵器で、土師器の环は口唇部先端が尖り、底部が大きく、ロクロ糸切り底とそうでないものがある。又外面はヘラ横磨きで、内面は横ナデの後放射状暗文を施す。甕もロクロ整形で糸切底で、器形は真圓期の長胴甕の姿を良好に残したものである。

このうち环に見られる諸特徴は中道遺跡II期の遺物の中に見られ、III期のメルクマールとなる赤色胎土暗文环とほぼ同様である。正確にはII期（9世紀中頃）に初見し、III期（10世紀後半から11世紀中頃）に盛行してIV期には消滅するのだが、全体の遺物量からすると、堂地遺跡2、中道遺跡3個という少量のものでしかない。このことから一応中道遺跡出土のIII期のメルクマールとなる赤色胎土暗文环は甲斐文化の流入品と考えることができるであろう。ただし胎土分析をした結果ではないので、今後その方面的研究がなされなければならないが、対比上問題となるのは大豆生田4号が9世紀前半で、中道II～III期が9世紀中頃から11世紀中頃という年代的ズレがある。今のところ大豆生田4号以前の平安時代に含まれると考えられる土器が発見されていないので、その他の遺物による対比を行なわなければならない。

赤色胎土暗文环を出土する中道III期のもう一つのメルクマールとしてロクロ整形小形甕がある。これは山梨県内でも小淵沢町上平出遺跡2号、3号住居址、長坂町柳坪B遺跡17号住居址等から発見されており、甲斐北巨摩地方III～IV期（10世紀中頃～11世紀中頃）にあたる。この年代は中道III期と丁

图710 山东邹县巨野地方土质器物时代表

I 期 (大官主田沟号) 土质器 (杯、瓶) 陶质 (杯、盘)		II 期 (上平出一号) 土质器 (杯、盘)		III 期 (上平出二号) 土质器 (杯、盘)		IV 期 (大官主田三号) 土质器 (杯、盘)		V 期 (上平出五号) 土质器 (杯、盘)	
1	21	22	23	24	25	26	27	28	29
II 期 (上平出一号)									
III 期 (上平出二号)									
IV 期 (大官主田三号)									
V 期 (上平出五号)									

度一致し、南信地方と甲斐北巨摩地方の交通を証明するものであろう。

以上の赤色胎土暗文杯とロクロ整形小形甕から得た結論では大豆生田4号住居址の遺物年代を9世紀中頃以降に下げるかもしれないが、一応現在の段階では大豆生田4号の前に位置付けられる資料を得てからとしたい。

なお付言すると、ロクロ整形小形甕は北巨摩地方にその分布の中心があって、甲府盆地東縁には出土例がない様である。

山梨に於ける土師器の环の特徴が発生するのは北巨摩第II期の上平出第1号住居址出土遺物である。口唇部先端は丸くなり、口径に比して底部がやや小さくなる。これに類した県外の資料は長野県内では飯能郡に若干見られる程度であり、信濃國の技術によったものでないことが判明している。それは神奈川県や埼玉県あたりで見られる。神奈川の資料について充分目を通している訳ではないので断言することを今回はさけたいが、秦野下大規遺跡⁶出土の环は肩部外面下半に1段あるいは2段のヘラ削痕が認められ、埼玉県下に於ても高橋一夫氏の研究⁷からも知り得るが現段階ではこれらの対比をし得る資料を手許に得ていないので、この紹介だけに止めておく。

北巨摩地方III期は黒窯14号窯期に比定される灰釉陶器の併出によって大きく特徴づけられるが、このことは須恵器の环との交代による。土師器は肩部がくの字に屈曲した皿が発生し、环は内面暗文の施されるものとないものが共存する。内面黒色土器の発生がこの時期で、北巨摩地方よりむしろ盆地東部が発生地と思われ、内面に放射状あるいは花弁状又は4~8方向に東に直線暗文を施し、その見込み底面にラセン状暗文を施すものがある。この黒色土器は北巨摩地方でも須玉町以北では今日のところ知られていない。この時期にのみ削出高台をもつ土師器が現れる。

北巨摩IV期以降の环は灰釉陶器の影響を強く受けている為か口唇部が玉縁を呈し外反を強めていく。肩部下半のヘラ削りも粗雑でしかも削り方が荒く、薄くなり、V期では器厚が2~3mmのものさえ現れる様になる。

6. 黒色土器の系譜

黒色土器とは「土師器の表面とくに内面をヘラでていねいに磨きあげ、炭素を吸着させて漆黒とした土器」⁸と言われており、この命名は昭和29年の大安寺発掘調査に於て坪井清足氏等が瓦器と区別する為に用いたところから発している。又黒色土器についての研究では田中啄氏や稻垣晋也氏⁹のものがあるのでこの概要について述べ、中部地方の黒色土器生成の振り所としたい。

黒色土器には大きく分けて内面黒色のものと内外面黒色の土師器があり、前者を田中氏はA類、稻垣氏はII類とし、後者をそれぞれB類、I類と呼んでいる。この対象となったものはどちらも畿内の遺物で平城宮址など年代のほぼ明確なものによっており、稻垣氏は年代を追って3時期に分けているので、まずその概略について見ておく。

○第1期

黒色土器は更に3段階に細分され、その第1段階は「平城宮址発見の天平宝字末年頃(765)に比定される第II類の平底の碗と鉄鉢形で、特に前者には内面に横に丁寧に箋で磨き外面も粗く磨いている」もので、第2段階は天長2年(825)頃に比定され、II類の环、碗、壺、甕の器形があり、环や碗にはヘラみがき後螺旋状、渦巻状、波状等の暗文が旋される。第3段階は承和昌宝(835)を伴う時期で高台付皿、高台付壺があるがII類だけで暗文が施される。

□

○第2期

この期の黒色土器盛行時は10世紀末から11世紀前半に比定され、延喜通宝(907)や灰釉陶器、綠釉陶器が伴出する。この時期にはⅠ類、Ⅱ類があり、Ⅰ類の方が精製土器である。又暗文が消える。壇は高台付で黒色土器である。

○第3期

この期の黒色土器は11世紀後半から12世紀前半の時期に位置付けられ、瓦器A～D型式と伴行するもので、Ⅱ類はなくなりⅠ類の精粗2種類の壇がある。

次に田中啄氏のA類、B類の年代について略記すると、A類(内黒)は8世紀中頃に初源を見、9世紀から10世紀にかけて盛行するものとし、B類は10世紀末までに始まり、かなり接近して瓦器が成立了としている。

福垣、田中両氏の年代観は、瓦器成立の年代の若干のズレを除いてはほぼ同一であり、畿内黒色土器が8世紀中頃から11世紀末頃まで使用されていたことを知ることができる。しかし畿内と中部地方の差として大きなものは、ロクロ整形(糸切底)の有無と、全面黒色の土器より内面黒色土器が出土量の大部分を占めていることであろう。又長野県内に於ては暗文の施されるものが少なく、むしろ畿内より遠い山梨の甲府盆地を中心とした地域に時期を限定して出土することが明らかになりつつある。

黒色土器(内黒)はすでに各地域で発見されている様に鬼高期内には見られ、真間期へと続くが、いわゆる国分期の前半(ここでは北巨摩Ⅰ・Ⅱ期)には伴出せず、Ⅲ期になって出現する。この多くは内面に放射状、花弁状の暗文やラセン状暗文が施され、底部糸切後、胸部外面下半から底部にかけてヘラ削手法が見られる。これと同期あるいはやや遅れて長野方面から内面をヘラ磨した良好な黒色土器が移入されている様である。この内面黒色研磨土器は北巨摩Ⅳ期に多く見られ、V期には長野系の黒色土器は姿を消して玉縁口縁胸部外面下半ヘラ削の黒色土器に変わる。内面はヘラ磨されずロクロ横ナデ痕がそのまま見える。甲府盆地内部でも一応これと同様の変化をたどる様である。

ではこの黒色土器の初源はどの地域であるのか。又山梨の暗文の施される黒色土器の系譜が何処に求められるかが今後の問題となってくるのであろう。

これは私見であるが、まず最初の問題について推論するなら、その初源地は畿内であろう。鬼高期内の黒色土器が平安初期になって消滅したのはまさしくロクロ技術の導入によって量産化されたことによるであろうし、逆に量産化されなかった畿内でこそ定着し得たのではないだろうか。暗文が畿内で盛行しているのは略10世紀末頃までであるから、甲斐の御牧からの駒索による中央との往来から、暗文技術を導入したのではないかと思われる。御牧の存在した北巨摩地方が暗文土器の量が少ないので、技術そのものが国府に定着してしまったのだろうと考えている。

7.まとめ

以上各地域との対比や、先学の編年研究に基いて中部地方とりわけ山梨県内出土平安時代比定の土師式土器編年と年代的位置について概観してきた。そこでまとめとして、まず信濃(南北)や山梨に於ける土師器の供給形態の変化を代表的な住居出土遺物を取り上げて第23表に示した。勿論これら住居出土遺物は報告者の選択が入っているので正確な数字ではないだろうし、特にこの表の作製段階では大豆生田遺跡は未整理であったので当時判明しているものだけ取り扱っている。

第23表から整理してみると次の様なことが言えるであろう。

- ① 須恵器の供給形態は伊那地方にあっては略10世紀、甲斐では10世紀前半までには終了する。
- ② 土師器坏、皿は伊那では相対的に少なく、甲斐北巨摩から盆地東部に来るにしたがってその全体に占める量が多くなる。
- ③ 黒色土器は、須恵器と交代する様に、伊那では略10世紀、甲斐では10世紀後半から出現、盛行する。
- ④ 伊伊那では、須恵器の減少化を黑色土器と灰釉陶器で補うのに対して、北巨摩地方では土師器がその主流にあって、須恵器と黒色の交代の後に灰釉が増加していく。又東八代地方に於ては土師器の量が当初から8~9割で、須恵器、黑色土器、灰釉陶器がそれぞれの時期に添えられるという状態であろう。

地域	年代	住居名	型式	須恵器坏、皿	土師器坏、皿	黒色土器坏、皿	灰釉坏、皿	計
上伊那	9	中道20号	中道I	41	1	2	0	44
	10	堂地大原4号	中道II	8	1	3	0	12
	11	中道12号	中道III	8	1	7	1	17
	12	中道68号	中道IV	1	2	6	1	10
甲斐北巨摩	9	大豆生田4号	I	1	2	0	0	3
	10	上平出1号	II	2	2	0	0	4
	11	柳坪B17号	III	0	5	0	0	5
	12	大豆生田3号	IV	0	2	3	0	5
	12	上平出5号	V	0	3	3	7	13
甲斐東八代	9	木木両の木5号	晚II-2	1	6	0	0	7
	10	勝沼313-6号	晚II-3	0	6	2	1	9
	11	" 313-2号	" -4	0	5	2	0	7
	12	" 319-9号	" -5	0	6	0	0	6
	12	" 319-8号	" -6	0	9	0	2	11
	12	" 319-17号	" -7	0	3	1	0	4

第23表 (45)

以上の諸理解を得て、平安時代の中部山岳地帯を考えるとき、今後、大集落の調査を行ない、当時の村落形態を把握することは勿論、文献などの利用、あるいは歴史学の協力を得て、それぞれの国ごとの文化内容を手中にしたいものである。

年代についての課題としては、古錢伴出例が少なく、灰釉等の年代にも疑問が提出されている。現段階では、ロクロ系切底の土師器を9世紀と決めつけることもできない。しかし住居の重複関係を基本にした編年と、国分寺、尼寺、国府等の発掘調査によって実年代を各地域ごとに確立していく必要がある。

(末木)

【註】

- (1) 杉原 庄介 「原史学序論」
- (2) 岩崎 卓也 1964 「東日本における土師器の研究」(史学研究)東京教育大学文学部
- (3) 菊島 美夫 1975 「山梨県における晩期上部式土器編年試論」甲斐考古12の2
- (4) 末木 健 1975 「山梨県中央道埋蔵文化財調査報告書」(長坂、明野、並崎地内)
山梨県教育委員会
- (5) 宮沢 恒之 1968 「飯田地方の土師器の様相」信濃20-11
- (6) 作 信夫 1973 「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書」-上伊那郡箕輪町-
- (7) 信濃考古学総覧(下) 1970
- (8) 植崎 彰一 「施器の道(1)」名古屋大学文学部20周年記念論集
- (9) 林 茂樹編 1966 「上伊那の考古学的調査-総括篇」
- 10 (5)と同様
- 11 (5)と同様
- 12 岩崎 卓也 1961 「城の内」更埴市教育委員会
- 13 河西 清光他 1970 「茅野和田遺跡」茅野市教育委員会
- 14 田中 琢 1967 「窯業一畿内」日本の考古学IV
- 15 出中 琢他 1962 「河内船橋遺跡出土遺物の研究」大阪府文化財調査報告11
- 16 岡田 正彦 1970 「長野県更埴市屋代大塚遺跡調査報告書」信濃22の4
- 17 16と同様
- 18 16と同様
- 19 岡田 正彦 1971 「長野県更埴市屋代馬口遺跡調査報告書」
- 20 古岡 康鶴 1967 「加賀三浦遺跡の研究」石川県教育委員会
- 21 " 1967 「北陸における土師器の編年」考古学ジャーナルNo.6
- 22 20より引用
- 23 小出 義治 1950 「山梨県日下部中学校々庭聚落遺跡概報」上代文化第19輯
- 24 上野 晴朗 1951 「八幡村江曾原遺跡の研究」山梨高校教育研究1
- 25 昭和43年以前の調査については山本寿々雄氏の「山梨県の考古学」に詳細に記載されている。
- 26 24と同様
- 27 萩原 弘道 1954 「上部文化前期に対する-考察-矢倉台式土器の提唱」
- 28 杉原 庄介 1946 「原史学序論」
- 29 上野 晴朗 1967 「一宮町史」山梨県東八代郡一宮町
- 30 山本寿々雄 1968 「山梨の考古学」
- 31 山本寿々雄 1972 「甲斐国国分寺周辺聚落址の調査(予報)」山梨県教育委員会
- 32 菊島 美夫 1973 「甲斐国埋没条生遺構等の調査」山梨県教育委員会
- 33 (4)と同様
- 34 (3)と同様
- 35 大沢 和夫 1974 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(諏訪)郡富士見町内その1」
長野県教育委員会
- 36 昭和50年4月に調査した人坪遺跡で51年に報告予定
- 37 田中 琢 24と同様
- 38 この歴史的背景については註24の田中氏の論述を根拠としておきたい。
- 39 原口 正三 「河内船橋遺跡川上遺物の研究」大阪府文化財研究報告書8
- 40 山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書1973~1975

- ④(4)と同様（正式報告は1975年に発行予定）
- ⑤ 小出 義治 1974 「秦野下大槻」秦野市教育委員会
- ⑥ 高橋 一夫 1975 「国分期土器の細分編年試論」埼玉考古学第13、14号
- ⑦ 荘地大原は註(6)大豆生田、柳岸Bは(4)上平出は仰。勝沼 313、319地点は「古代甲斐國の考古学調査」1974、山本寿々雄編（山梨県教育委員会）参照
- ⑧ 稲垣 晋也 1968 「瓦器塼の盛立と展開」日本歴史考古学論叢2
- ⑨ 高島 忠平 1971 「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」考古学雑誌第57巻第1号

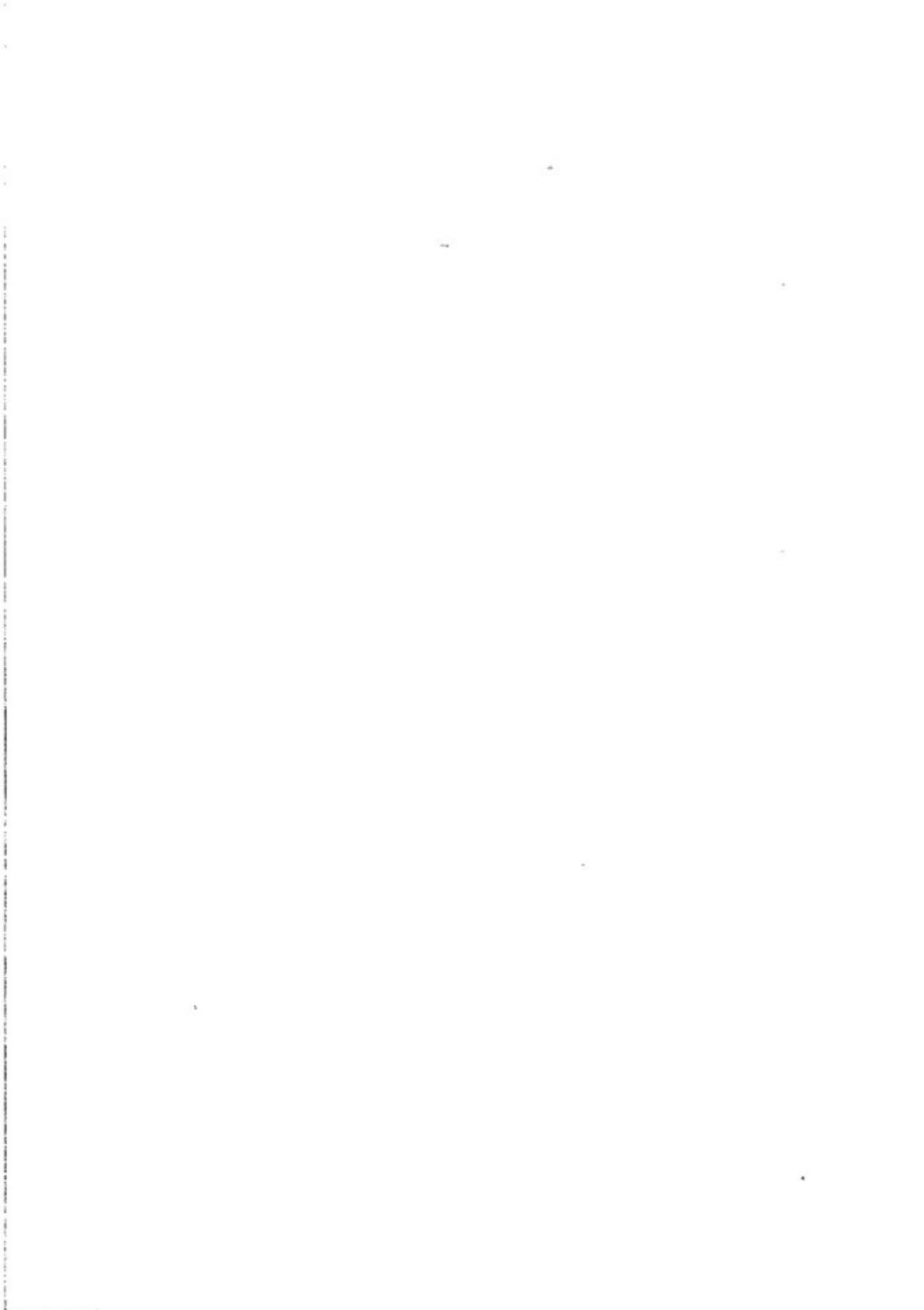
おわりに

昭和49年6月末に発掘調査を開始してから遺物整理、報告書作成まで1年9ヶ月を費して大豆生田遺跡関係の事業は一応完了しました。調査、整理、報告書がそれぞれ参加した人々の協力によってまとめあげられ、こうして発刊できることになりましたが、先学諸氏の御批判が得られるなら幸です。

太古という悠久な時空に在って、四季の移り変りと同じように人々が生き、道具を造り、骸となつた過程で、後世の我々に無意識で残した多くのものを今回の調査でも得ることができました。この残されたものを図面や写真を添えて、簡単に説明しただけですが、山梨や中部の平安時代の姿を知る上で極めて貴重なものであるだけでなく、その分析を通じて文化を理解していくたいと思います。

文末ではありますが、調査に参加され、又協力していただいた地元大豆生田の方々をはじめ、補助調査員及び須玉町教育委員会、三菱建設の方々に厚く御礼申し上げます。

なお執筆にあたって適切な助言を与えていただいた山本寿々雄氏、菊島美夫氏に御礼申し上げます。





(1) A 地区調査風景(北西より)



(2) A 地区列石(南より)



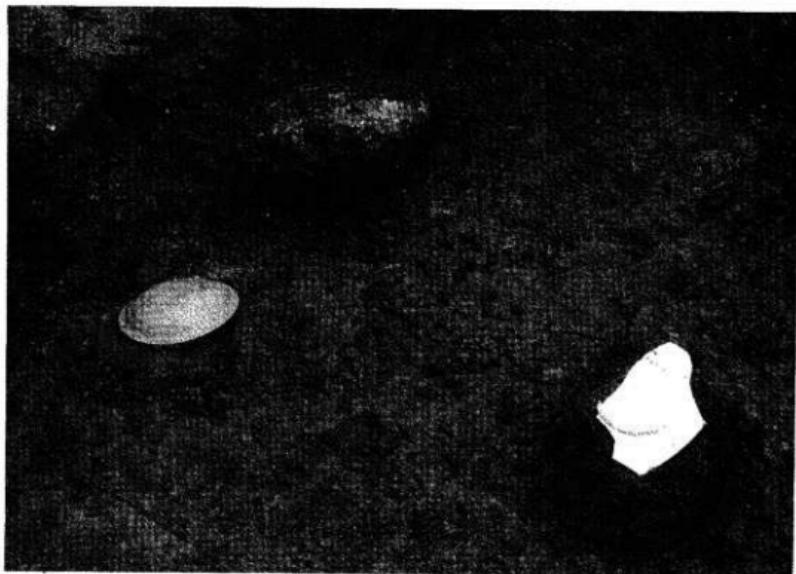
A 地 区 列 石 全 景



(1) A地区H 2 グリッド遺物出土状態



(2) A地区H 3 グリッド出土磨製石斧



(1) B地区B 4 グリッド遺物出土状態



(2) 同 上 部 分

C 地區全景





(1) C 地区 3 号住居址全景



(2) C 地区 3 号住居 遗物 出土状态



(1) C 地区 3.4 号住居址



(2) C 地区 6.7.8 号住居址



(1) 4号住居址 カマド



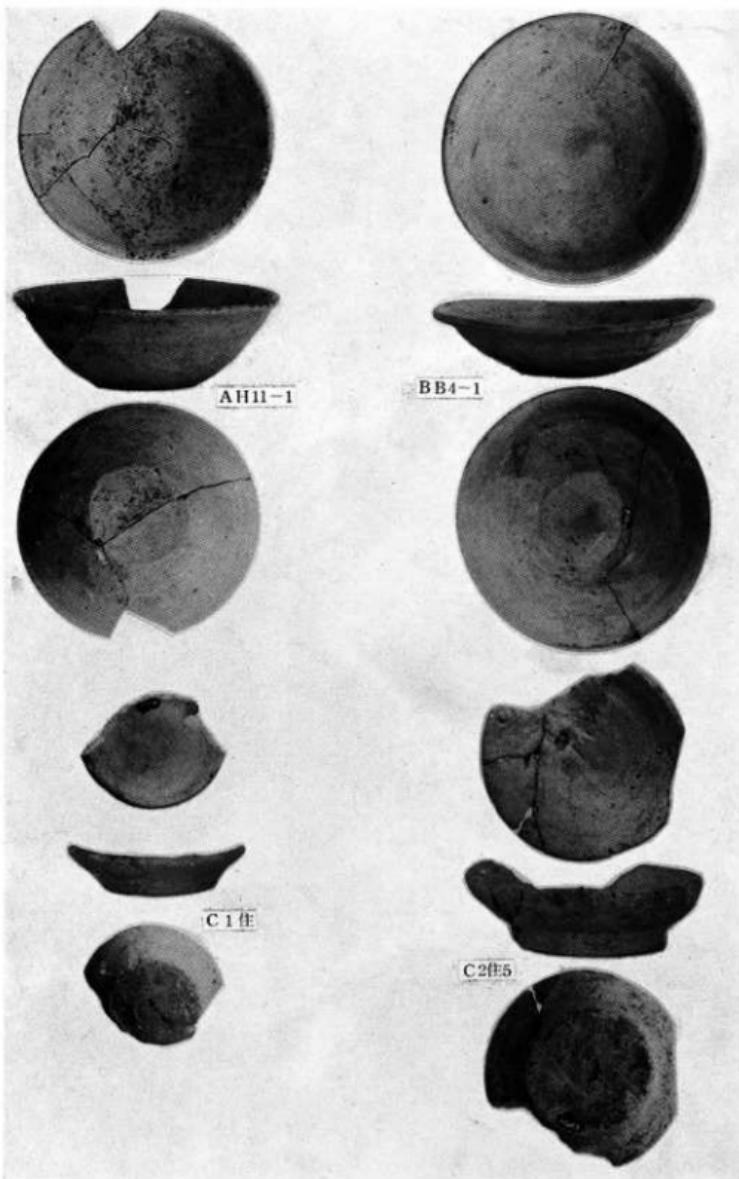
(2) 7号住居址 カマド

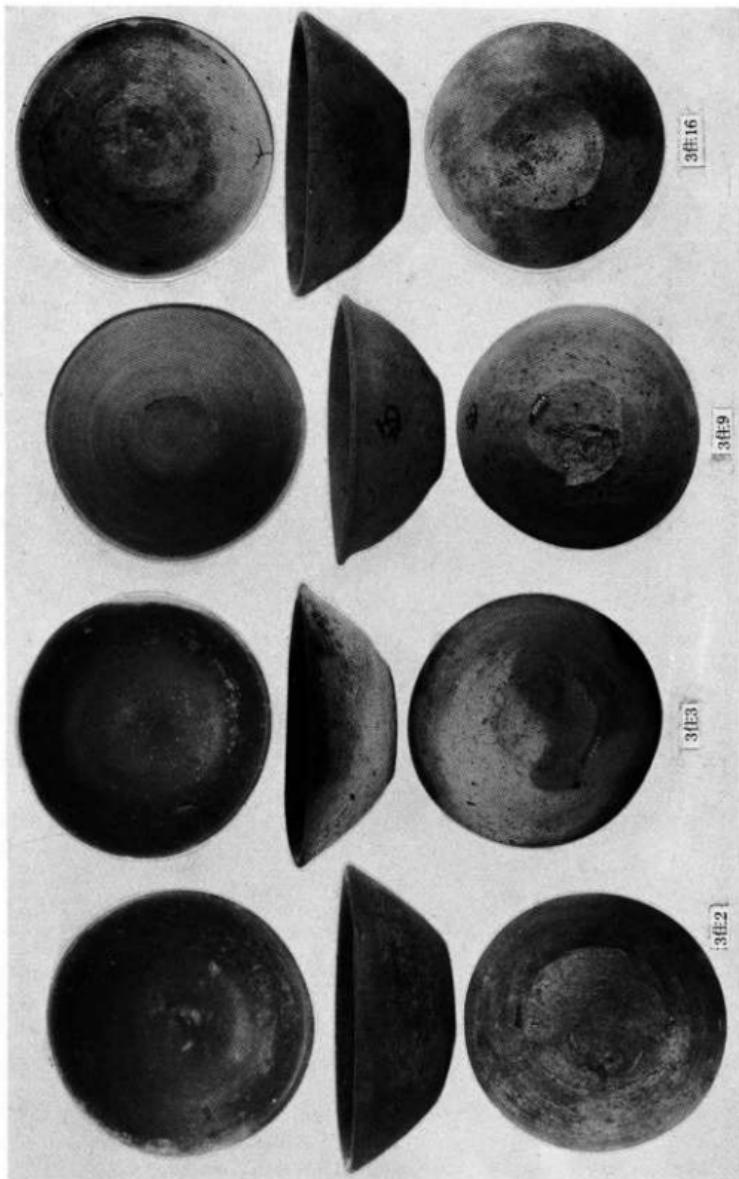


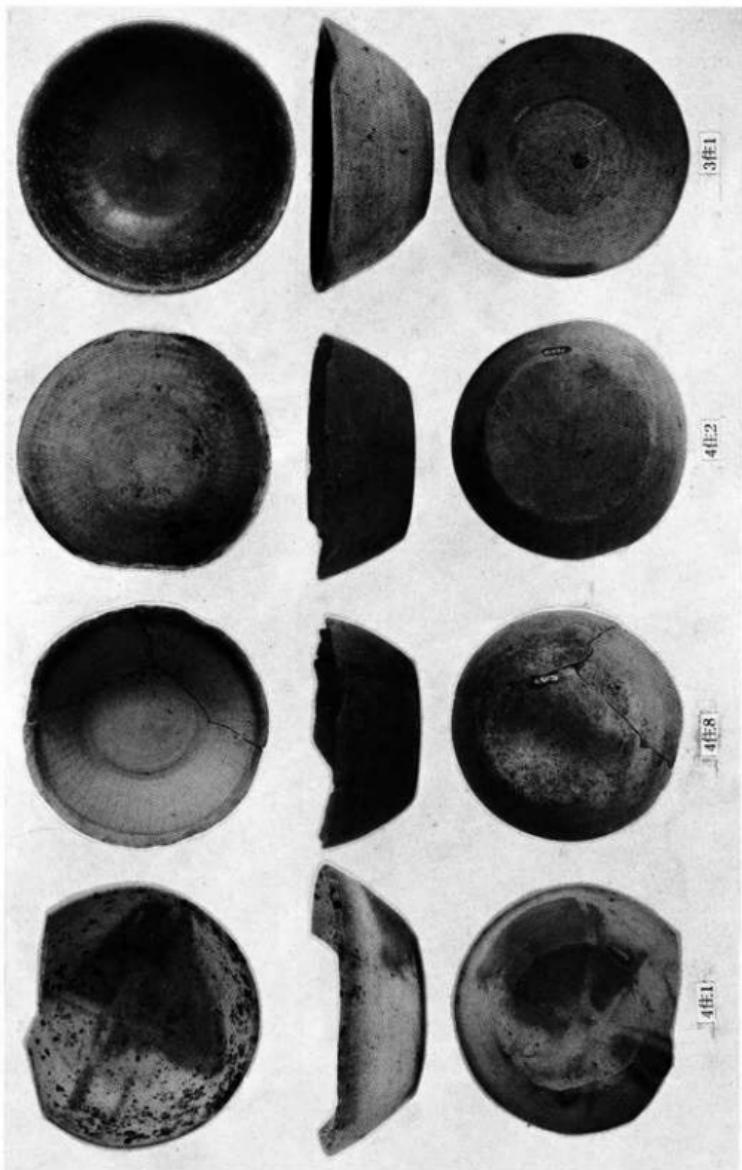
(1) C 地区発掘作業風景



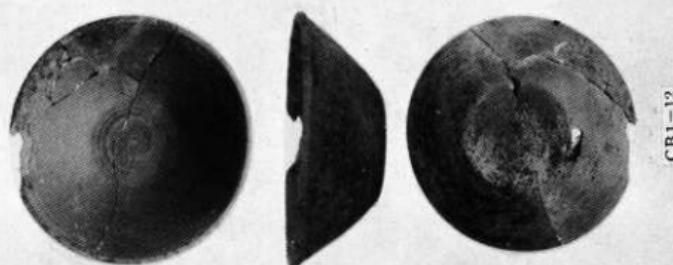
(2) 発掘参加者







CB1-12

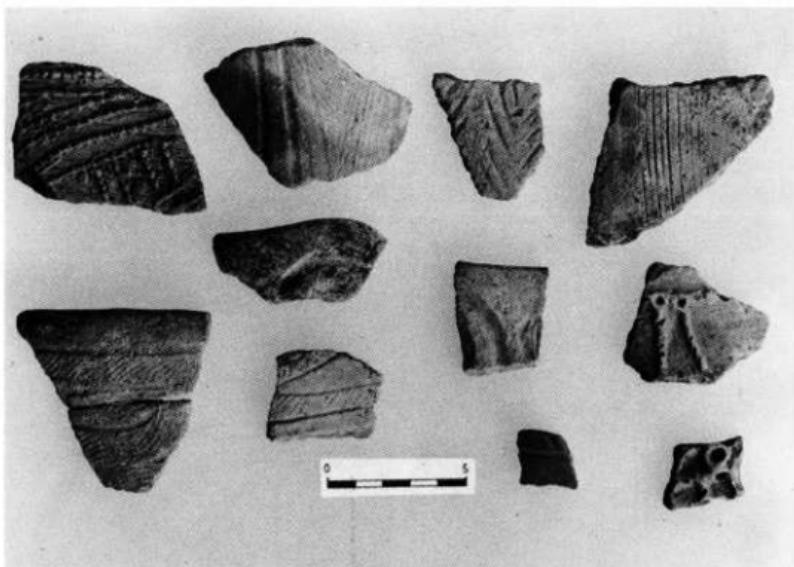


6#1

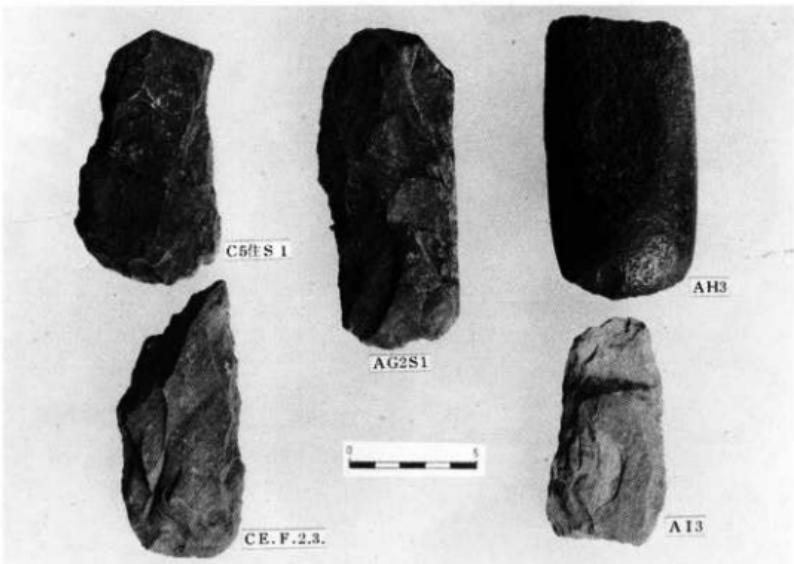


7#1





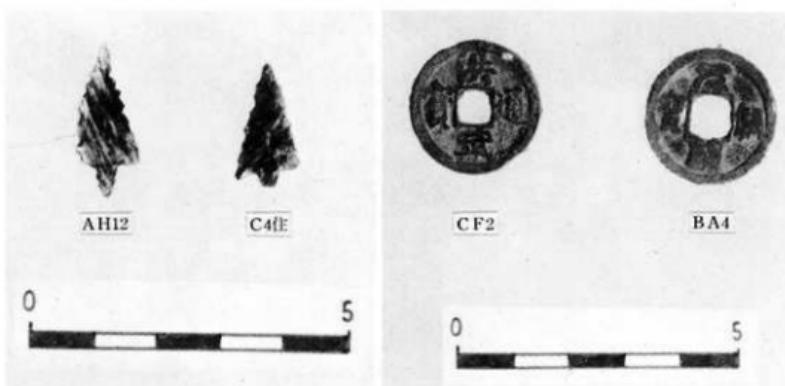
(1) 縄文時代土器



(2) 縄文時代石器



(1) 緑 種 陶 器 (陰刻文)

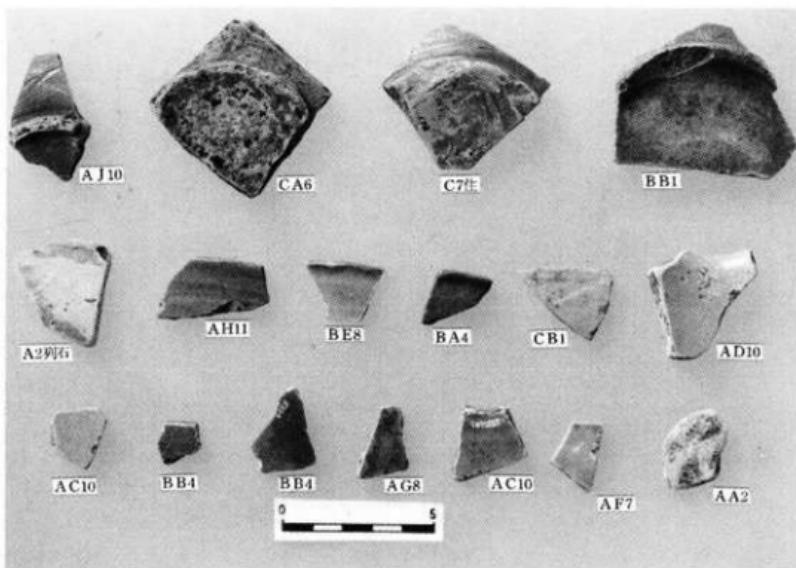


(2) 石 鋸

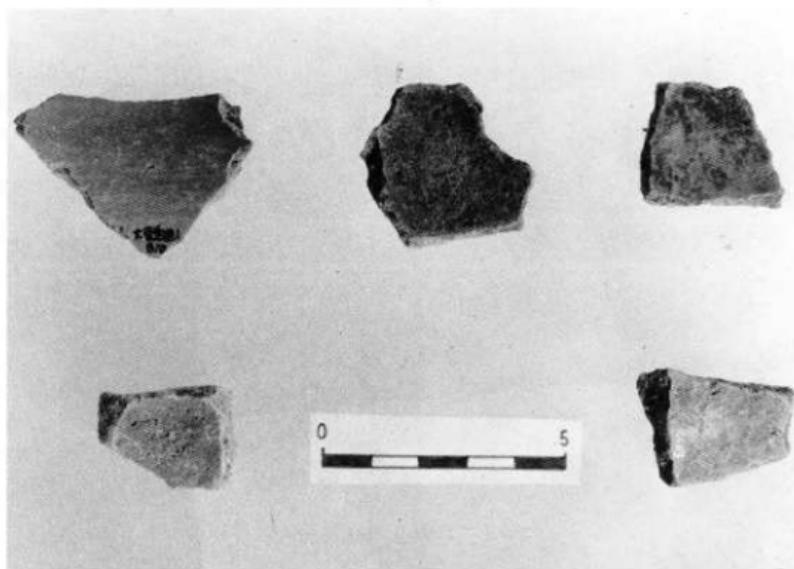
(3) 古 錢



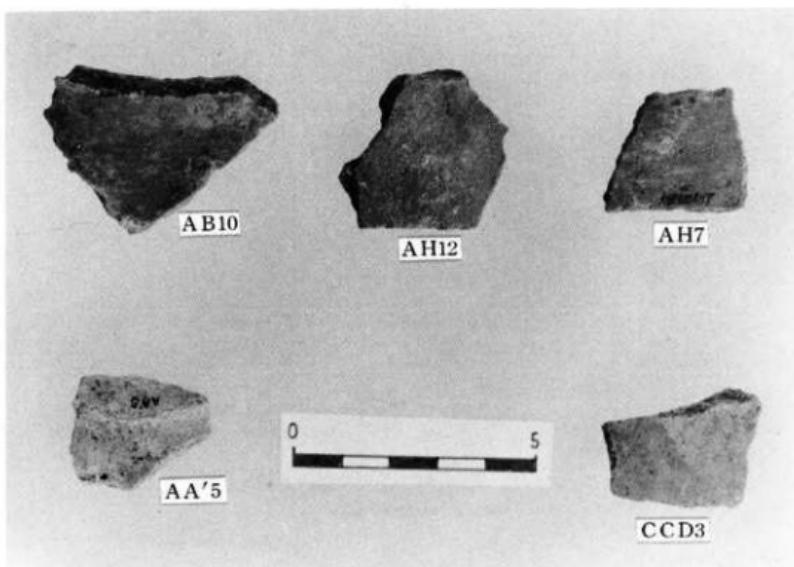
(1) 緑 色 陶 器



(2) 同 上



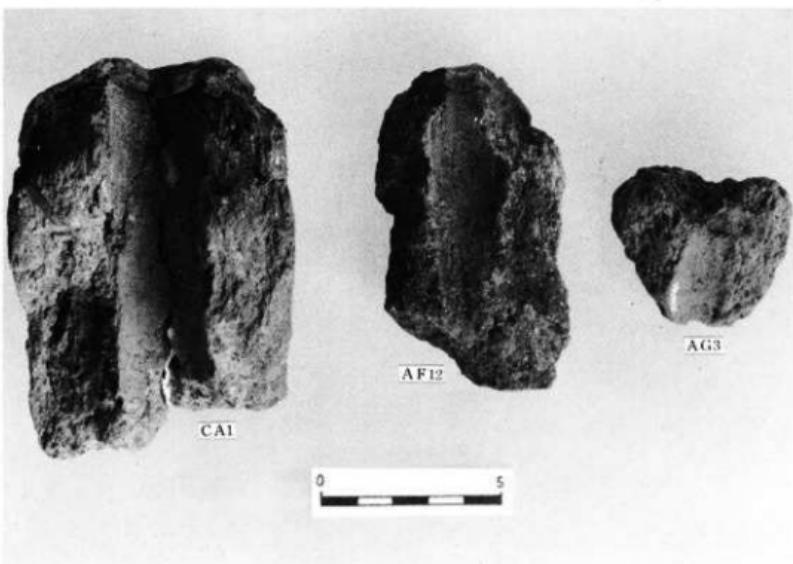
(1) 彩 色 土 器



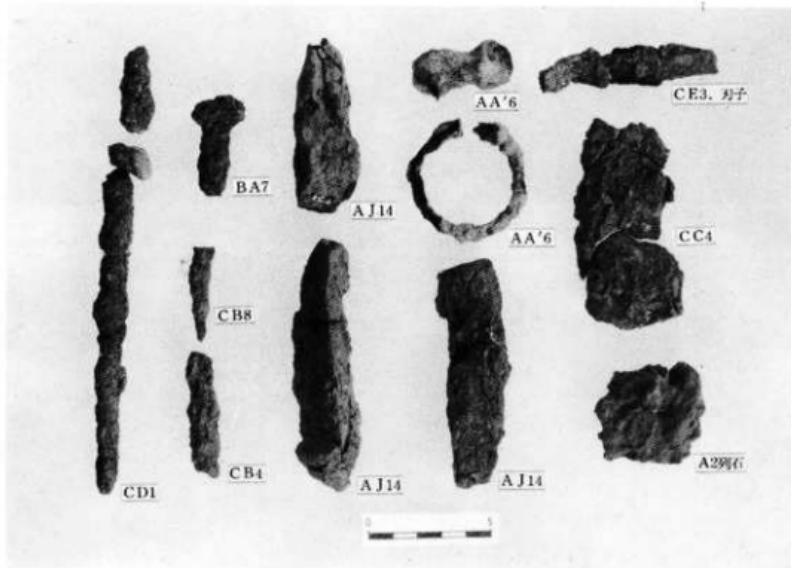
(2) 同 上



(1) 椎骨 (チイゴ)



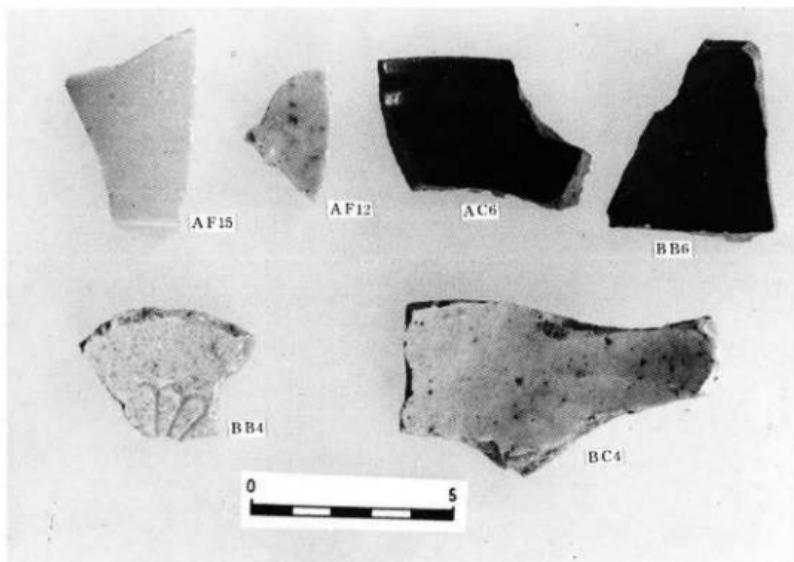
(2) 同 上



(1) 鐵 製 品



(2) C 地區 3 号住居出土鐵劍



(1) 陶 瓷 器



(2) 同 上

昭和51年3月25日印刷
昭和51年3月31日発行

山梨県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書
—北巨摩郡須玉町地内—

発行所 山梨県教育委員会
日本道路公団東京第二建設局
印刷所 横浜南堂印刷所

